

長野県小県郡真田町埋蔵文化財調査報告書

よつ か いち
四 日 市 遺 跡

1990. 3

真田町教育委員会

長野県小県郡真田町埋蔵文化財調査報告書

よつ か いち
四 日 市 遺 跡

1990. 3

真田町教育委員会

序

文化的精神は、日々止むことなく育まれ前進していくものと考えます。その向上発展が個々人の生活に有益であるばかりか、社会全体の躍進につながるのは言うまでもありません。文化的精神の創造は、より多くの文化的産物や文化現象に触れ、再確認するなかで琢磨され、真に培われていくものと思います。

埋蔵文化財は、過去の人々が現代に残してくれた文化遺産であります。私どもはこれらの文化遺産を発掘し、様々な視角から調査することで、失われた過去の生活ドラマを復元することに努力しております。時には現代の利器にそっくりな遺物が出土することに驚嘆し、また貴重な習俗の消滅に痛惜することも多々あります。これらを通して、現代文化が、過去繰り返されてきた先人の生活を経て成立していることを肌で感じとることができるのであります。過去を振り返ることで、現在の文化に新しい価値観を見出し、将来の文化向上に役立つことを信じて止みません。

このたび、発掘調査いたしました四日市遺跡は、真田町四日市地籍に位置し、神川を目前にした河岸段丘末端の地にあります。この遺跡は縄文土器などが豊富に散布しており、過去、敷石住居址が発見されるなど、古くから周知されておりましたが、本格的な調査を受けないまま今日に至っておりました。今回の調査は、役場建設工事に伴う緊急発掘調査でありましたが、縄文時代と平安時代を中心とする貴重な集落跡を発見することができ、特に縄文時代中期の集落跡は、真田町ばかりでなく東信地方を代表する遺跡と言えるでしょう。当地方の該期地域色を考える上で、重要な役割を果たすことと思います。

ここに、その報告書を刊行いたしましたので広くご活用されるとともに、埋蔵文化財に対する正しいご理解をいただければ幸甚に存じます。最後になりましたが、ご協力を賜りました関係者各位に心から感謝を申し上げる次第であります。

平成2年3月

真田町教育委員会教育長

松尾一久

例　　言

1. 本書は、平成元年8月21日から12月2日の間に行われた長野県小県郡真田町長横尾四日市に所在する四日市遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、役場建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、宇賀神　恵を調査員とし、真田町教育委員会が行った。
3. 調査の整理・本書の執筆及び編集は宇賀神が主体に行ったが、石器の石質については與水太仲氏に鑑定を依頼し、縄文時代早期～後期の土器については百瀬忠幸氏に分類を依頼した。また、縄文時代晩期の土器は竹原　学氏より、石器全般は新海節生氏より特に教示を得た。
尚、「4 成果と課題-(1) 縄文時代中期後葉土器の時間的位置づけ」は百瀬忠幸氏に寄稿していただいたものである。
4. 採図の縮尺は、遺構については住居址1/60、炉・窯1/30、土坑1/30、土器については実測図1/4、拓影1/3、石器については小形石器2/3、峰の巣石・丸石・石棒1/6、それ以外は1/3を原則とした。
5. 遺構・遺物の提示に際してスクリーントーン等を多用したが、常識の範囲内と判断し、特に例示しない。
6. 調査・整理参加者（敬称略、五十音順）
飯島崇吉・一本鎗悦子・一本鎗菊枝・内海　深・内海晴子・河合容子・塙沢理恵・鈴木俊博・
田中　環・堀内千代子・松尾玉枝・三井憲正・三井正明・柳沢君代・柳沢久雄
7. 指導・助言者（敬称略、五十音順）
五十嵐幹夫・石和一夫・川崎　保・児玉卓文・郷道哲章・田中（旧姓鎌原）浩江・関　孝一・
寺島俊郎・平林　彰・広瀬昭弘・町田勝則・山辺邦彦・綿田弘実
8. 当遺跡の遺物・実測図・写真是すべて真田町教育委員会が保管している。

本文目次

序

例言

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡周辺の環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
III 調査の概要	5
1 遺跡及び調査対象地点の概観	5
2 調査の方法	5
3 調査経過	8
4 造構・遺物の概観	8
5 基本層序	9
IV 調査結果	10
1 縄文時代の造構と遺物	10
(1) 早・前期の造構と遺物	10
(2) 中期初頭～中葉の遺物	14
(3) 中期後葉の造構と遺物	15
(4) 後期の遺物	109
(5) 晩期末葉後後の造構と遺物	110
(6) 時期不明の造構と遺物	116
2 古墳時代の造構と遺物	126
3 平安時代の造構と遺物	128
4 成果と課題	142
付. 資料紹介	148

図 目 次

第1図 四日市遺跡周辺の遺跡分布図	3	第12図 3・4号住居址実測図及び出土遺物拓影(1)	18
第2図 遺跡調査範囲	6	第13図 3・4号住居址出土遺物実測図及び拓影(2)	19
第3図 造構配置図	7	第14図 5号住居址実測図	20
第4図 基本層分模式図	9	第15図 5号住居址出土遺物実測図及び拓影(1)	21
第5図 縄文時代前期の造構配置図	10	第16～18図 5号住居址出土遺物実測図(2)～(4)	22～24
第6図 3B号土坑実測図	10	第19図 6号住居址実測図	26
第7図 縄文時代早・前期の遺物実測図及び拓影(1)	12	第20図 6号住居址出土遺物実測図及び拓影	27
第8・9図 縄文時代早・前期の出土土器拓影(2)・(3)	13	第21図 7号住居址実測図	28
第10図 縄文時代中期初頭～中葉の出土土器拓影	15	第22図 7号住居址出土遺物実測図及び拓影	29
第11図 縄文時代中期後葉の造構配置図	16	第23図 8号住居址実測図	30

第24図	8号住居址出土遺物実測図及び拓影	31
第25図	10号住居址実測図及び出土遺物拓影	32
第26図	12号住居址実測図	33
第27・28図	12号住居址出土遺物火削図(1)・(2)	34・35
第29図	13号住居址実測図	36
第30図	13号住居址出土遺物実測図及び拓影	37
第31図	15号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影	38
第32図	18号住居址実測図及び出土遺物実測図	39
第33図	19号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影	41
第34図	20号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影	42
第35図	21号住居址実測図及び出土遺物実測図	43
第36図	22号住居址実測図	44
第37図	23号住居址実測図	46
第38図	23号住居址埋蔵実測図及び出土遺物実測図(1)	47
第39図	23号住居址出土遺物実測図及び拓影(2)	48
第40・42図	23号住居址出土遺物実測図(3)～(5)	49～51
第43図	24号住居址実測図	52
第44図	24号住居址出土遺物実測図	53
第45図	25号住居址実測図	54
第46図	25号住居址出土遺物実測図	55
第47図	26・27号住居址実測図及び27号住居址出土土器 実測図	57
第48図	26号住居址出土遺物実測図及び拓影	58
第49図	28・29号住居址実測図及び出土遺物実測図	60
第50図	30号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影	61
第51図	31・32号住居址実測図及び31号住居址出土土器 拓影	62
第52・53図	縄文時代中期後葉の土坑実測図(1)～(2)	66・67
第54～58図	縄文時代中期後葉の土坑出土上土器実測図 (1)～(5)	70～74
第59～66図	縄文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(1)～ (8)	76～83
第67～73図	縄文時代中期後葉の土坑出土石器実測図 (1)～(7)	84～90
第74図	1号集石土坑実測図及び出土遺物実測図(1)	94
第75図	1号集石土坑出土遺物実測図(2)	95
第76図	縄文時代中期後葉の埋蔵実測図	96
第77～86図	縄文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影 (1)～(8)	98～107
第87図	縄文時代中期後葉の遺構外出土土器火削図	108
第88図	縄文時代後葉の出土土器拓影	109
第89図	縄文時代晚期木葉前後の遺構配置図	110
第90図	縄文時代晚期木葉前後の土坑実測図及び出土 遺物実測図・拓影	111
第91図	47号土坑出土遺物実測図及び拓影	112
第92図	縄文時代晚期木葉前後の遺構外出土土器拓影 (2)	113
第93図	縄文時代晚期木葉前後の遺構外出土土器実測 図及び拓影(1)	114
第94図	縄文時代晚期木葉前後の遺構外出土土器拓影 (2)	115
第95図	縄文時代の時期不明遺構配置図	117
第96図	1号炉址実測図	117
第97～101図	縄文時代の遺構外出土石器実測図(1)～(5)	120～124
第102図	古墳時代後期の遺構配置図	126
第103図	9号住居址出土遺物実測図	126
第104図	9号住居址実測図	127
第105図	平安時代の遺構配置図	129
第106図	1号住居址実測図及び出土遺物火削図	130
第107図	2号住居址実測図	132
第108図	2号住居址出土遺物実測図	133
第109図	11号住居址実測図	134
第110図	11号住居址出土遺物実測図	135
第111図	14号住居址実測図及び出土遺物火削図	136
第112図	16号住居址実測図	137
第113図	17号住居址実測図	138
第114図	17号住居址出土遺物実測図	139
第115図	34号住居址実測図及び出土遺物実測図	140
第116図	33号住居址実測図	141
第117図	縄文時代中期後葉の土器変遷	144・145
第118図	遺物出土地点	118
第119図	中村遺跡・竹室遺跡出土遺物実測図	151
第120～124図	真田中学校所蔵遺物実測図及び拓影	152～156
第125図	北番匠遺跡出土遺物実測図	157

表 目 次

第1表	四日市遺跡周辺の遺跡地名表	4
第2表	縄文時代中期後葉の住居址内出土石器観察表	63～65
第3表	縄文時代中期後葉の土坑出土石器観察表	91～92
第4表	1号集石土坑出土石器観察表	93
第5表	縄文時代晚期木葉前後の石器観察表	116
第6表	縄文時代の遺構外出土石器観察表	125

I 調査に至る経緯

真田町の長期振興計画のうえでも重要な施策とされた役場新庁舎の建設が、昭和63年度・平成元年度において実施された。また、それに伴い、多量の埋土が必要になった。町有地であり、かつ庁舎建設地に近接し、さらに将来的に公共施設が建設される見込みのある当所が適当であるとされ、そこから土を運ぶという計画が推進されていった。

しかし該当地は、周知の四日市遺跡内に位置することから、埋蔵文化財保護を重要視した町教育委員会は、早急に県教育委員会文化課と共に対応策を練ることになった。

協議の末、止むなく記録保存という形をとることとなり、真田町の単独事業として発掘調査を実施するに至った次第である。

II 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

小県郡真田町は、上田盆地の北東に位置する。四阿山山麓西側に拡がる菅平高原を中心として、大部分を山地が占めているが、その菅平高原から南西に流れ出、いずれは千曲川と合流する神川沿岸、さらにその支流である洗馬川沿岸、神川左岸と段丘崖をもって接する本原扇状地面の地域に谷平野が発達している。これらの平坦面は、一括して神川渓谷平野とも呼ばれており、上田盆地から放射状に伸びる谷平野のひとつとして数えられる。また、特にここでは、神川が上田盆地に注ぐ際、標高672.9mの虚空藏山を西にして狭隘部となることから、上田盆地との境界を明瞭なものとしている。

四日市遺跡の位置する横尾地区は、神川による堆積平坦面、いわゆる神川扇状地面上にあるが、支流の洗馬川扇状地面とも接しており、殊に広く開けた地である。横尾山塊の南麓でもあり、用水的役割を果たす大柏木川が流下することもあって、居住するには好適な地と言えよう。

本遺跡は、横尾地区の中でも、現在の集落の中心からやや南に外れた神川右岸の河岸段丘端に位置している。

2 歴史的環境

真田町は、真田氏発祥の地として名高く、その面での歴史的考察は数多い。また、菅平高原での縄文時代早期を中心とする遺跡群は早くに注目され、今日に至るまで調査が繰り返されてきたが、ここ河谷平野での考古学的調査は、過去2遺跡が実施されたに過ぎない。加えて、踏査による遺跡分布調査もけっして充分とはいえない難く、古代以前の歴史的環境を語るのは、いささか至難

と言える。

だが、与えられた史・資料をもって考えるならば、平野での生活が花開くのは縄文時代中期中葉以降のことであろう。それ以前の遺物が採集された例は稀少であり、先土器時代に至っては皆無である。菅平高原の状況とは対照的なあり方を示している。

もっとも多く採集される中期末葉～後期の資料は、平野全域で認められ、広範かつ活発な展開が予想し得る。また縄文時代晚期の資料が、本遺跡でわずかに認められ、石舟地区屢石遺跡でも得られていることから、衰退はしながらも集落經營は確実に存続するらしいが、分布・規模等は不明である。

弥生時代の遺跡については、未だ確認されていない。当該期では、一般に標高600mを越える土地での稲作を想定していないが、それを肯定する形となっている。しかし、さらに高所の菅平高原で弥生時代の遺跡が発見されているため、平野部での存在も充分考えられる。だがいずれにせよ、小規模かつ散発的なものであろうし、經營基盤も水稲耕作以外のものを考えなければならないであろう。

続く古墳時代前期～中期についても弥生時代と同様な状況である。

再びこの地が盛行するようになるのは古墳時代も後期になってからのことである。今回の調査で住居址1棟を検出し、また、本書の中で紹介した本原地区北番匠B遺跡からも良好な一括資料を得ている。それにもまして、本原扇状地面一帯に小円墳が分布する事実から、ここを中心とした新たな開拓を想定しないわけにはいかない。同様にして、松木平や佐久平においても該期に至って集落規模及び立地を大きく拡げていくのは確かだが、それと同調する動きであることは言うまでもない。その背景には、耕作地の拡大を意図したものが大きかろうが、予想し得る耕地面積に対する古墳の絶対量の多さから考えれば、それ以上の役割をこの地に期待していたとするにはあまりに早計すぎようか。

奈良時代以降の様相もまた不透明である。今回の調査で、平安時代の遺構・遺物を検出したことを除けば情報は皆無に近い。遺跡の分布状況などは知る由もないが、本調査の成果を引用すれば、ロクロ整形甕が甕の主体になることから、土器製作の範型は北信地方に近いらしい。

繰り返すが、菅平高原を除く真田町の先史・古代の様相は、今なお充分に把握されていない。その解明は、今後の調査に委ねなければならないが、古来、群馬あるいは松代地方などに通じる交通路を提供してきたこの地の歴史的役割は多大であるに違いない。と同時に、周辺各地の文化に接触する機会も少なくなかったろうし、その中にあって独特の地域相・色を表出した場面も多々あったことであろう。真田氏発祥の地としてだけなく、今後大いに注目していかなければならない地域である。



第1図 四日市遺跡周辺の遺跡分布図

No.	名 称	時 代	所 在 地	地 命	県番号	備
1	四日市遺跡	縄・古・平	横尾四日市	畠 地	22-89	平成元年調査
2	柳又遺跡	縄 文	戸沢柳又	"	22-84	
3	松葉田遺跡	"	" 松葉田	"	22-85	
4	石舟遺跡	"	石舟石舟	宅 地	22-86	
5	雁石遺跡	"	" 雁石	畠 地		昭和49・59～60年調査
6	山道家遺跡	"	横尾山道家	"	22-88	
7	荒井古墳 (円)	古 墳	本原荒井	"	22-90	
8	的山古墳 (円)	"	" 西歛	"		
9	下塚 1号墳 (円)	"	" 下塚	"		
	下塚 2号墳 ("")	"	" "	"		
10	北臼庭遺跡	"	" 北臼庭	"	22-97	
11	南荒井遺跡	"	" 南荒井	"	22-96	
12	山崎遺跡	縄 文	" 山崎	"	22-93	
13	竹室遺跡	"	" 竹室	"	22-94	
14	表木遺跡	"	" 表木	"	22-95	
15	殿藏院古墳 (円)	古 墳	" 殿藏院	"		
16	広山寺 1号墳 (円)	"	" 中原南町上	"		
	広山寺 2号墳 ("")	"	" "	"		
17	北番匠古墳 (円)	"	" 北番匠	"	22-101	
18	北番匠B遺跡	古墳～	" 南番匠	宅 地	22-104	
19	北番匠A遺跡	"	"	畠 地	22-103	
20	鶴の子田古墳 (円)	古 墳	" 下原鶴の子田	"	22-108	
21	町下 1号墳 (円)	"	" 上原町下	"	22-106	
	町下 2号墳 ("")	"	" "	"	"	
	町下 3号墳 ("")	"	" "	"	"	
	町下 4号墳 ("")	"	" "	"	"	
	町下 5号墳 ("")	"	" "	"	"	
22	矢倉城古墳 (円)	"	" 下原東出早	"	22-110	
23	九久館 1号墳 (円)	"	" 九久館	"	22-109	
	九久館 2号墳 ("")	"	" "	"	"	
24	西出早 1号墳 (円)	"	" 西出早	"	22-111	
	西出早 2号墳 ("")	"	" "	"	"	
25	村中古墳 (円)	"	" 村中	"	22-112	
26	桜林 1号墳 (円)	"	" 上原東出早	"	22-107	
	桜林 2号墳 ("")	"	" "	"	"	
27	南町上遺跡	縄 文	" 中原南町上	"	22-100	
28	藤沢遺跡	古墳～	" 大畠藤沢	"	22-104	昭和49年調査
29	藤沢古墳	古 墳	" "	"	22-105	"
30	羽毛田古墳 (円)	"	" 下原羽毛田	"	22-113	壊滅
31	小沼長者古墳 (円)	"	" 西田	"	22-114	"
32	境田遺跡	古墳～	" 境田	"	22-115	

第1表 四日市遺跡周辺の遺跡地名表

III 調査の概要

1 遺跡及び調査対象地点の概観

本遺跡は神川右岸の河岸段丘縁に占地しており、殊、今回対象となった箇所はその沿岸の地である。しかし、遺跡範囲の詳細は確かでなく、内容物の把握も正確でない。従って、調査対象地点周辺のみの記述に留めるものの、遺跡の占據する地形及び今回の調査で得た情報によれば、広域かつ幾多の時代に渡る遺跡であることは自明である。

調査対象地点は、南に向かって緩やかに傾斜し、その端部は河岸段丘崖に接している。面積は、約1,180m²を計る。推測に過ぎないが、遺跡の南端の一部に当たるらしい。広く畠地として利用されているが、隣接する南側では真田中学校が建設され、東では主要地方道長野・真田線と町役場等で大きく地形を変化させている。さらに、散在的ながらも宅地化が進んでおり、遺跡の遺存状況はけっして良好でない。調査対象地点に限れば、細作が行われているだけであるから旧地形を留めているように見えるが、農道が横断し、しかもそれを境にして切・盛土されているらしく著しい標高差を認める。遺跡の破壊は少なからず進行しており、行政側もそれに一部加担していることを再確認した次第である。

調査の結果、旧地形が残るのは農道以北の地点、全体の2割程度に過ぎず、他は削平ないし流出を認めた。20cm内外の耕作土直下がローム層となる場合が多く、床を失った住居も少なくない。農道付近以外は、特に段差のない緩斜面であるから、多くは自然の土砂流出によるものであろう。

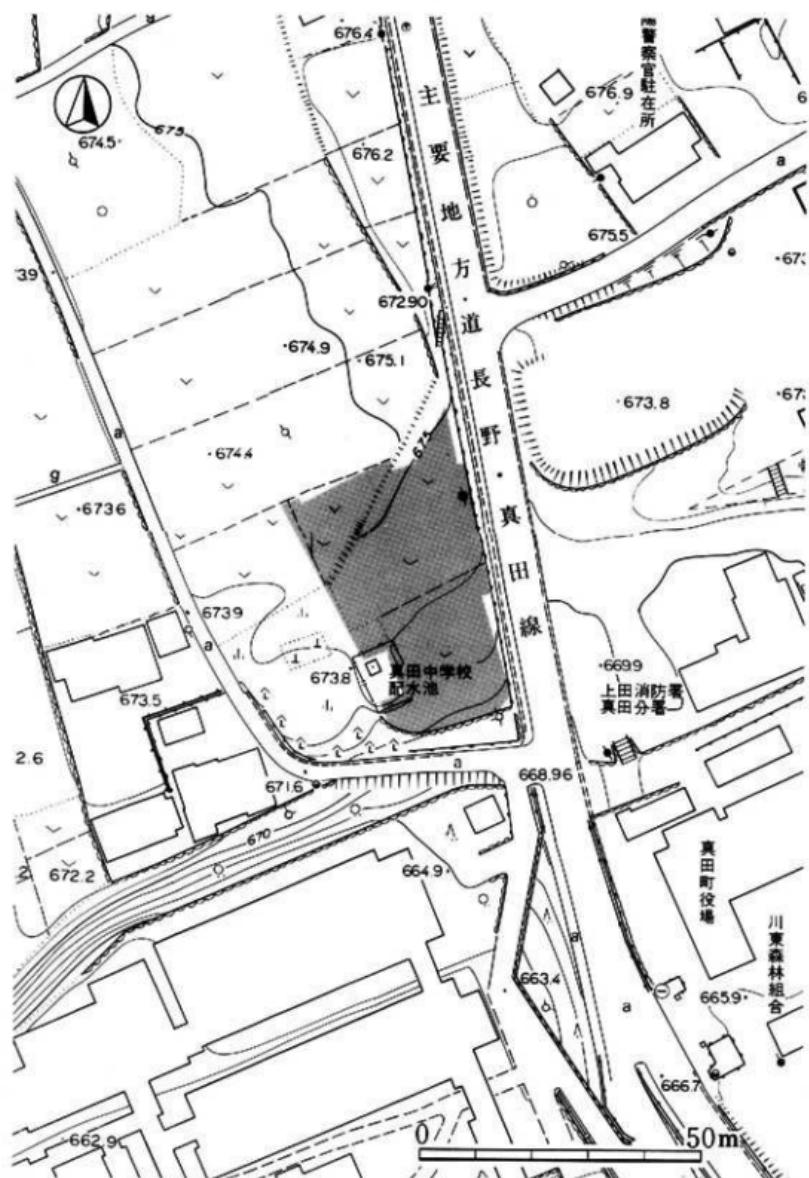
2 調査の方法

四日市遺跡は、古くから周知されており、また、長野県遺跡地図にも登録されている遺跡であったが、調査に入る以前の遺跡の情報は極限られたものであった。

聞き取りによるものでは、かつて敷石住居と思われる造構が発見されているらしいこと、調査地点に隣接する真田中学校校舎建設の際、多数の遺物が採集されていることのみである。また、事前踏査によつては、縄文時代中期後葉の土器を多数探し、平安時代の遺物もわずかに拾えていた。該期にあたる造構・遺物を予想したが、上記の如く人的破壊が行われていることは確実であり、調査期間及び費用と絡めて内容物を把握することが先決となった。従つて、面的調査前にトレンチによる試掘調査を実施し、おおよその中身を把握したうえで細かな計画、特に調査方法を決定することにした。

その結果、削平を受けながらも多数の造構・遺物が検出され、一部に遺物包含層が遺存していることも判明した。表土・耕作土の排除は、調査期間の問題から重機に頼らざるを得なかつたが、遺物包含層以下の調査は人手によることにした。

造構・遺物の固定化・取り上げには、国土地標に基づいたグリッドを設定しすべてそれに従つた。



第2図 逃跡調査範囲



1

2

3

4

5

6

7

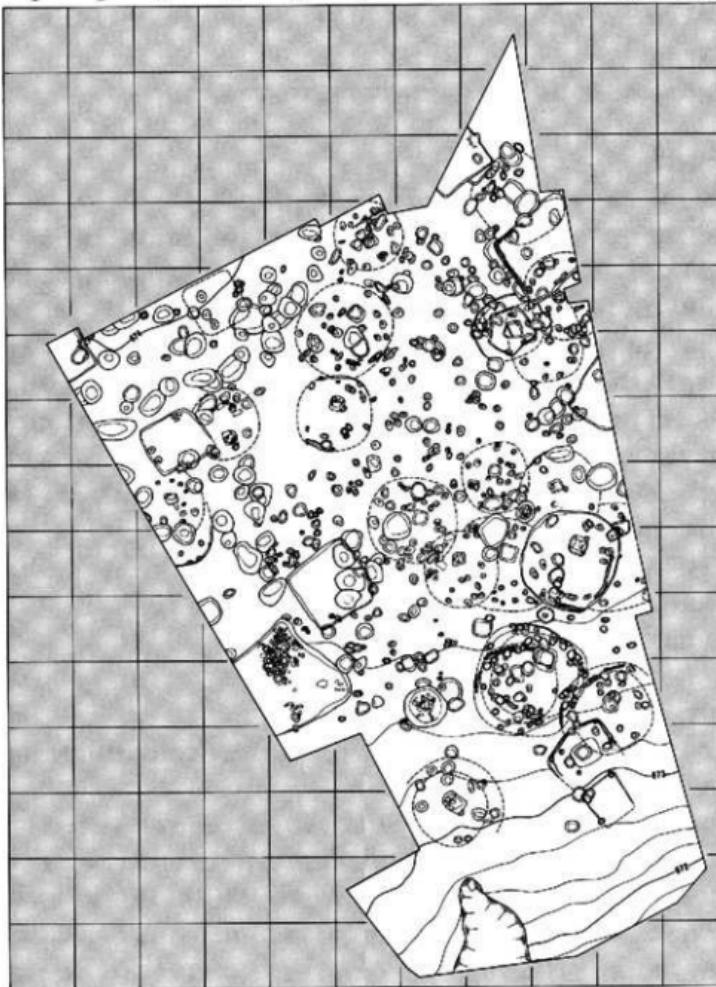
8

9

10

11

あ
い
う
え
お
か
き
く
け
こ
さ
し
す
せ
そ



0 20m

第3図 造構配図

遺跡の内容から4mメッシュが最適と考え、必要時にはさらに細分するための対応も考えた。尚、図化にはすべて簡易造り方を用い、また、包含層遺物はグリッドで一括した。

膨大な遺構数から考えて、遺構は記号化させ記録・整理の便を図った。表記は、アルファベット2文字を組合せ、時代に係わりなく性格毎に付け与えた。遺物の注記にまで生かしたが、報告では記号化を避けた。

上記以外は、遺跡の性格に係わらない一般的な方法を取っている。

3 調査経過

発掘調査は、平成元年8月21日より12月2日までの間に行った。

試掘を目的として、幅1mのトレンチを2本設定し、遺構・遺物の遺存状況、遺物包含層の有無を確認することから開始した。二日間に渡り行ったが、終了後即、調査方法を検討した上で面的調査に移った。

重機によって表土剥ぎをする傍ら、遺構検出作業を併行させ、一応の終了をみた段階で遺物包含層の調査と共に造構調査を開始した。住居址を優先させて進めていったが、途中、住居に帰属しない小ピットが多数存在することに気付き、再検出を行うことになった。しかし、それにはローム層上面をさらに削り取る必要があり、多くの時間を費やす結果になった。さらに、小ピットを検出していく過程で、床を欠失した住居址の発見が相次ぎ、調査期間を大幅に延長せざるを得ないことになったのである。

11月下旬に入り、ようやく造構調査が片付き全体写真を撮る段階にまでこぎ着けた。12月2日に平板測量によってコンタ図を作成し、三ヵ月余りに渡る調査を終了させた。

整理作業は翌週から着手し、翌年3月までに終了した。

4 遺構・遺物の概観

ここでの生活は縄文時代早期後半から始まる。だが、大きく展開するのは縄文時代中期後半と平安時代ということができる。

縄文時代では、25軒の住居址と併せておびただしい数の大小様々な土坑を検出しているが、前期関山式併行の土器を伴出した土坑1基、及び晩期末葉前後の土坑4基を除いて、時期決定可能な遺構は全て中期後半の所産であった。従って、得られた遺物も当該期のものが大部分を占める。また、空白となる期間が多く、早期後半～前期前半・中期初頭～中葉・中期後葉・後期初頭・晩期末葉前後以外はまったく確認されていない。いずれにしても、中期後半を除いては遺構・遺物共に貧弱であり、主体的な生活の場としては利用されていなかったらしい。

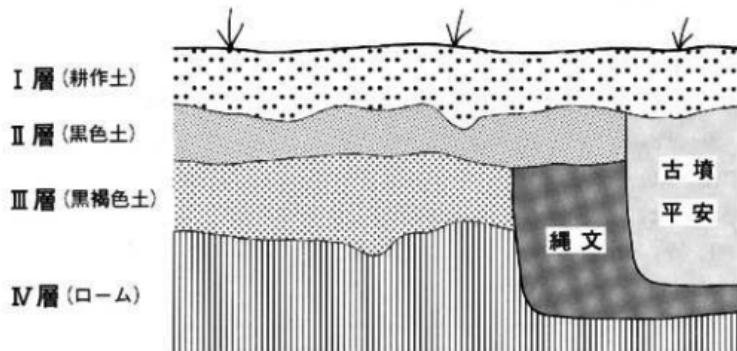
続く弥生時代は完全に空白となり、再び生活が始まるのは古墳時代後期になってからである。しかし、調査区北端に住居址1軒を検出した以外は、遺構外遺物を含めて皆無であった。

平安時代は住居址8軒を数える。調査区全体に散在しており、比較的まとまった集落が經營されていたことであろう。出土遺物は住居址内に限られたが、良好な一括資料を得ている。

5 基本層序

もっとも多いところで4層に細分できた。I層が表土ないし耕作土・II層（黒色土）及びIII層（黒褐色土）が堆積腐食層・IV層がローム層であり、それぞれの層界は明瞭であった。I層～III層は、いずれも20cm前後の層厚を保つ。III層中には大小の円礫が多量に含まれている。平安時代の造構はII層上面から、縄文時代中期後半の造構はIII層上面から掘り込んでおり、また、III層及びII層下部が縄文時代の包含層となる。しかし先述したように、調査区内は削平・流出が顕著であるため、北端を除いてはI層直下にIV層（ローム層）が続いている。

上記とは別に、調査区北西隅より、IV層上面で南西に流下する自然流路を確認した。規模は不明だが、巨礫を多分に含んでいることからけっして小さな河川ではないようだ。III層中に含まれる礫の多くはこれに関連するものであろう。



第4図 基本層序模式図

IV 調査結果

1 繩文時代の遺構と遺物

(1) 早・前期の遺構と遺物

遺構は、土坑1基を検出したのみである。遺物は、それ以外の遺構からも出土しているが、該期以降の土器と共に伴しているため、その場合は遺構外遺物として扱った。

当該期の土器は70片程度が出土したにすぎない。そのうちの50片以上が、前期初頭～同前半期に位置づけられる繩文施文を特徴とする一群である。早期後半から前期前半に及ぶ土器を含んでいるが、量的に少ないこともあり、ここでは早・前期を一括する。

① 土坑

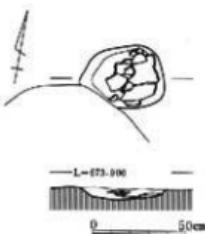
38号土坑（第6図、第7図1）

こー5グリッドに位置し、東壁の一部を1号集石土坑が切っている。径45～33cmの楕円形を呈し、深さは6cmを計る。坑底に密着して横倒し、且つ潰れた状態で土器が出土している。

土器は口径推定38.8cmを計る深鉢形土器であり、胴上半の1/2程が出土した。外傾する口縁下が若干くびれ、底部へはほぼ直線的に移行する。R LとL Rの縄を結束した原体による羽状繩文帯が器面全体に重層施文される。部分的に菱形構成をとるが規則的な施文とはい難い。器厚5～7mmと薄手のつくりであり、胎土には砂粒及び白色・褐色の粒子、さらに若干量の植物纖維を含む。内面には横方向を中心とするナデ調整がくわえられるものの、指頭状の凹凸が著しい。関山式に併行する在地的な土器であろう。



第5図 繩文時代前期の遺構配置図



第6図 38号土坑実測図

② 造構出土土器 (第7~9図2~56)

2~4は早期後半、貝殻条痕文系土器に比定されるものであり、2・4は表面のみ、3は表裏面に条痕文をとどめる。2は胎土中に石英の粗粒を多く含んでおり、鶴が島台式の新しい段階に伴うものかもしれない。5は絡条体压痕文系土器の口縁部破片で、小さな波状を呈する。斜位ないし山形状を構成する絡条体压痕文が施され、施文は口唇から内面にも及ぶ。器厚14mmと厚手。胎土には多量の植物纖維が混入されている。施文原体はRの繩を軸に巻き付けたものであろう。

6は早期後半~末葉に伴う縄文施文の土器。RL単節縄文が横位・斜位に施文される。7・8は沈線により文様が描かれるもので、図示した2点以外は出土していない。7は半截竹管の内側を用いた「コ」の字状の押し引き文を横位にめぐらし、その下部に多条の短沈線を山形状に施文する。ともに植物纖維を若干胎土に含み、さらに6には雲母や石英が混入される。器厚7mmを計り、堅緻なつくりの土器である。

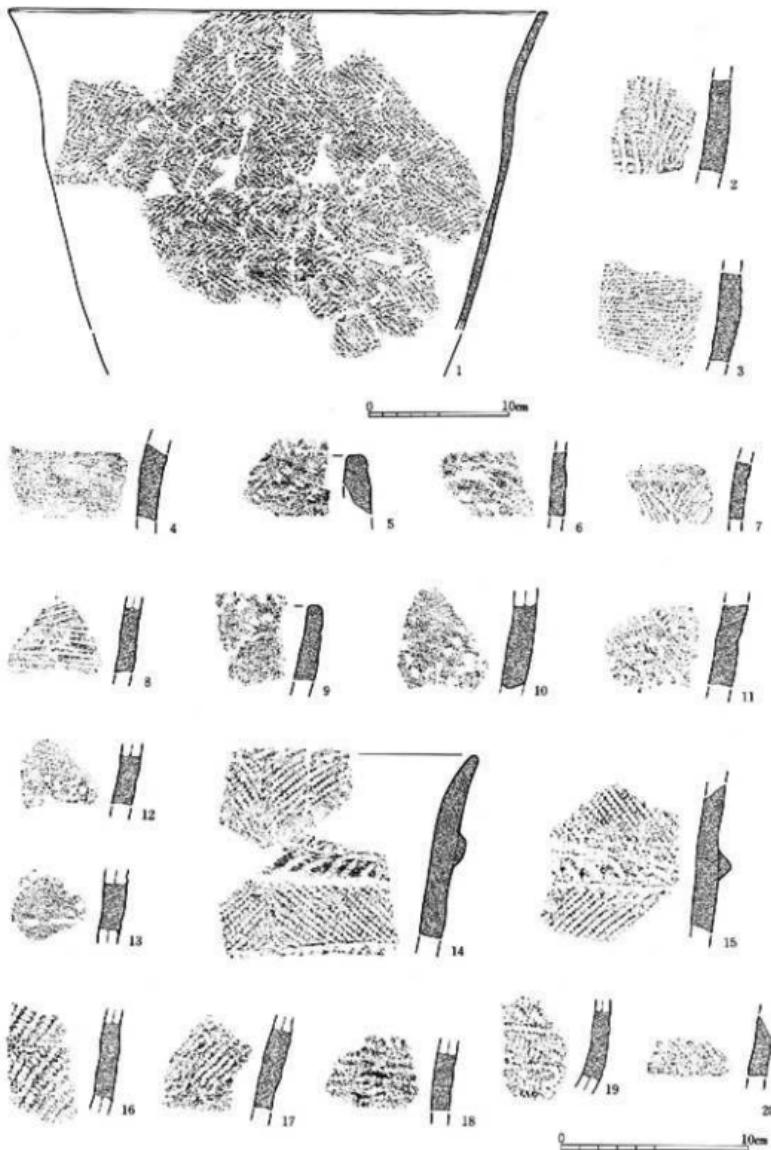
9~13は竹管による円形刺突文を特徴とする。1ないし2条の列点状連続刺突文を山形状に施文するほか、11のように3本を束ねて刺突したものもある。9は唯一の口縁部破片であり、平線の口唇部にも刺突文を加えている。器面には擦痕状の調整痕をとどめる。総じて胎土に植物纖維を含むほか、個体によっては石英・長石などが混入される。11は燃糸文を地文として有するようである。類例を知らず編年的な位置づけに苦慮するが、一応早期末葉あたりに帰属するものと理解しておきたい。

14は口縁下にタガ状の陰帯をめぐらすものであり、15は同一個体破片。隆帯上及び内殺ぎ状に細まる口縁端部には、棒状工具による斜位のキザミが加えられる。器面にはRLとLRの繩を用いた羽状縄文が横帶施文されるが、施文単位の天地並びに両側縁は稜を形成するほど意識的に描えられる。原体端部には小さなループが付く可能性がある。胎土中には植物纖維のほか、砂粒や石英・褐色粒子などを多く含む。16~18は同種の胴部破片と思われる。

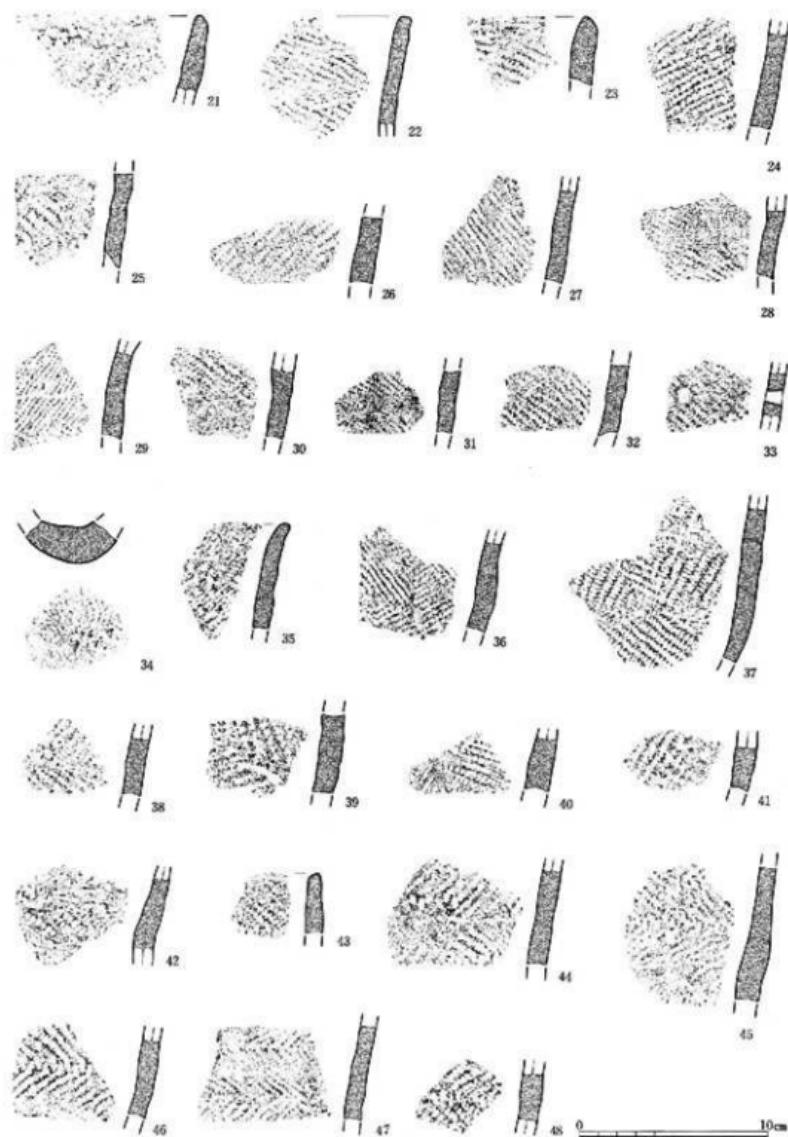
19は繩の側面压痕と絡状体压痕とが交互に組み合わされる。くすんだ明褐色を呈し、器面には調整時の擦痕をとどめている。胎土中に含まれる植物纖維の量は比較的少ない。20はL原体2本揃え軸巻き回転施文による燃糸文が施されるもの。調整・胎土等19と近似する。それぞれ一点のみが出土したにすぎない。

21~48は前期初頭に位置づけられそうな縄文施文の土器であり、それぞれ21~34は斜縄文が、35~41は羽状斜縄文が、42は端部を結節した原体による縄文が、43~48は異原体結合による羽状縄文が施される。24は附加条の縄文であろう。34は唯一の底部破片で、丸底状を呈する。35は0段多条の原体を用い、異なる2種類の縄による羽状縄文を構成する。総じて胎土中に含まれる植物纖維の量は多めであるが、28や29・36のように植物纖維が少なく石英などを多く含むものも存在する。時間的に細分される余地を残した一群と言えよう。

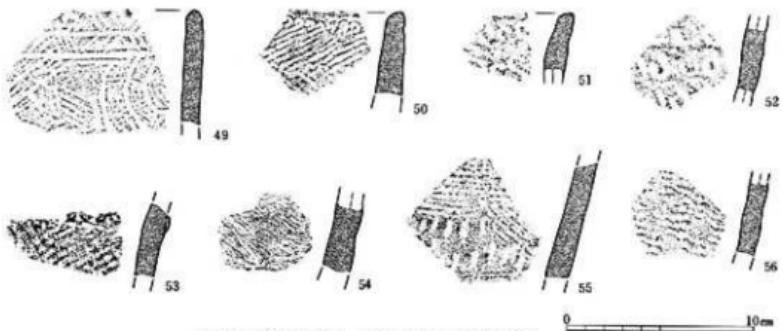
49~54は前期前半、関山式に比定されると思われるもの。49は小波状を呈す口縁部破片であり、



第7図 縄文時代早・前期の出土土器実測図及び拓影(1)



第8図 縄文時代早・前期の出土土器拓影(2)



第9図 繩文時代早・前期の出土土器拓影(3)

口端は内斜ぎ状に鋭がる。文様は棒状工具による太沈線で主要モチーフを描き、空間を細い短沈線で埋めることにより構成される。胎土に植物繊維のほか砂粒・石英などを含み、器面はていねいなナデツケ調整が加えられて平滑である。50はループ文を伴う幅広の斜縄文帯を有する口縁部破片。51・52は多段ループ文が施されたもの。調整が粗く関山式に比定してよいか疑問を残している。53は単節斜縄文、54は無筋斜縄文がそれぞれ施された胴部破片。

55・56は神ノ木式土器の範疇に入る。55は柳歯状工具による連続刺突文を有する。胎土中に含まれる植物繊維の量は極微量にとどまり、それに替わって砂粒や石英などが多量に混入されている。56は斜縄文が施される。55同様に胎土中への植物繊維の混入は極めて少ない。

(2) 中期初頭～中葉の遺物

該期の遺構は確認していない。遺物はすべて包含層より出土したものである。

① 造構外出土土器 (第10図)

提示したもの以外はほとんど出土していない。

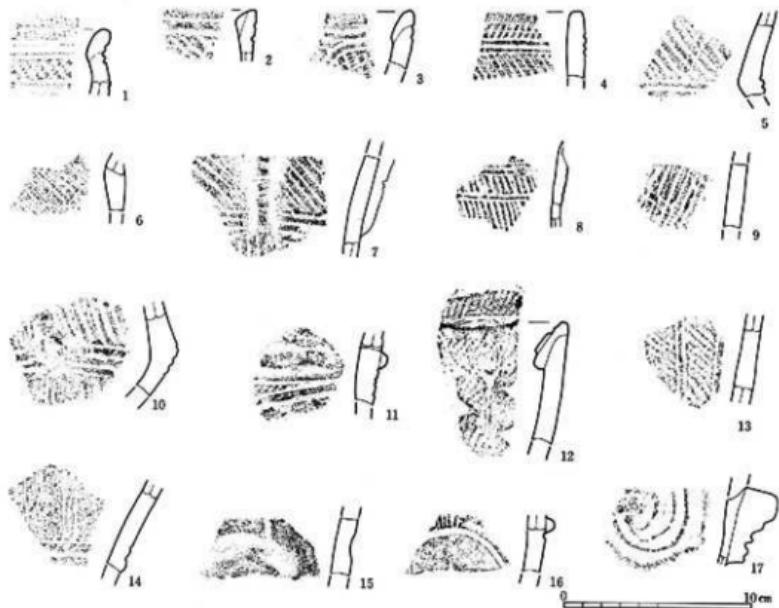
1～14は中期初頭、15・16は中期中葉にはほぼ帰属する。17については中期後葉の古い段階にまで下る可能性を残すが、便宜上ここで扱っておきたい。

1は逆「く」の字状に内傾した口縁の端部がさらに外傾する。口端には半截竹管状工具による連続刺突文が、口縁下には半截竹管による平行沈線をヘラ状工具で格子目に切るモチーフがそれぞれ施される。2・3も口縁下に同様のモチーフが描かれるものの、器形等に若干の相違が認められる。4はほぼ直立する口縁部に半截竹管で横走する平行沈線をひき、空間を1～3同様に格子目文で埋めている。7は格子目文帯に連続爪形文が加えられた短い隆帯を垂下させるもの。

12～14は縄文を地文としてもつ一群。12は半截竹管による継位平行沈線と印刻状の三叉文が施された口縁部破片であり、施文は断面三角状に肥厚させた内面上部にも及ぶ。13・14は半截竹管

状の工具で縦位平行沈線を間隔をおいて施文するもの。13が管内痕をとどめるほど深く施文されるのに対し、14は浅く幅広で地文の縄文も不明瞭でありやや後出的。中期前葉まで下るかもしれない。10・11も中期初頭の中でも新しい段階におかれよう。

15は偏平な低い隆帯によって曲線的なモチーフが描かれる。16には三叉文が加えられているようである。17は肥厚する渦巻状文が施されたもの。胎土に白色砂粒を多量に含んでおり、他とは趣を異にしている。日本海側の土器であろう。



第10図 縄文時代中期初頭～中葉の出土土器拓影

(3) 中期後葉の遺構と遺物

敷石住居址3軒を含め住居址25軒を検出したほか、埋甕及び膨大な数に上る土坑等を検出している。住居址の多くは床面を欠失したもので、炉址や埋甕の検出に端を発して確認したものも少なくない。さらに多くの住居址が分布していたことも充分に考えられるだろう。事実、屋外単独のものとしか扱えなかった埋甕2基については、実際には住居内に帰属していた可能性が高い。また、該期の遺物を伴出した土坑は全体の1割にも満たないが、覆土の状態から考えて土坑のはとんどが縄文時代の所産であることから、その多くは当該期に帰属するものであろう。



第11図 縄文時代中期後葉の遺構配置図

① 穹穴住居址

3・4号住居址（第12・13回）

きー3グリッドに位置する。炉址と考えられる方形の土坑及びそれを取り囲む小ピット、かつ周溝状の溝を検出したことで住居址として認定した。当初1軒の住居と考えたが、小ピットの配置と周溝の周り具合から後に2軒と想定した。両住居は重複するらしいが、ともに床レベルはほぼ等しいらしく、旧河川最上層の砂礫層上端に床を設けている様子であった。調査区西壁に掛かることから、住居の新旧関係とそれぞれの規模を確認するために調査区壁を観察したが、礫が邪魔をして覆土すら確認しえなかった。止むをえず平面的観察から、炉及びその周辺の小ピットを3号、周溝の状況で4号住居址とした。

3号住居址は規模・主軸とともに不明である。また遺存状況も良好でなく、北及び東側に溝状の擾乱があり、さらには平安時代の2号住居址、土坑等と重複している。炉址の主軸から察して調査区内に埋甕が存在したことも予想されるが、その場合は土坑による破壊を想定したほうがよいだろう。炉址からは焼土及び施設らしきものをまったく確認しておらず、形体的特徴からそれと判断した。

4号住居址も規模・主軸とともに不明である。周溝の一部と住居に帰属するであろうピット以外は何ら検出していない。

出土遺物の内、1～3が3号住炉より、4・5が4号住周溝より出土した。すべて加曾利E式土器によって占められる。6～18は上部のグリッドより出土したものであり、遺存状況などから両住居址の覆土中遺物と判断される。土器は、唐草文系土器に比定される16を除き、他は加曾利E式土器。四日市第4段階に位置づけられよう。

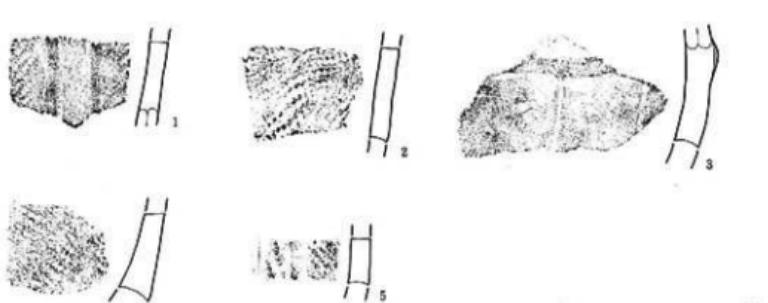
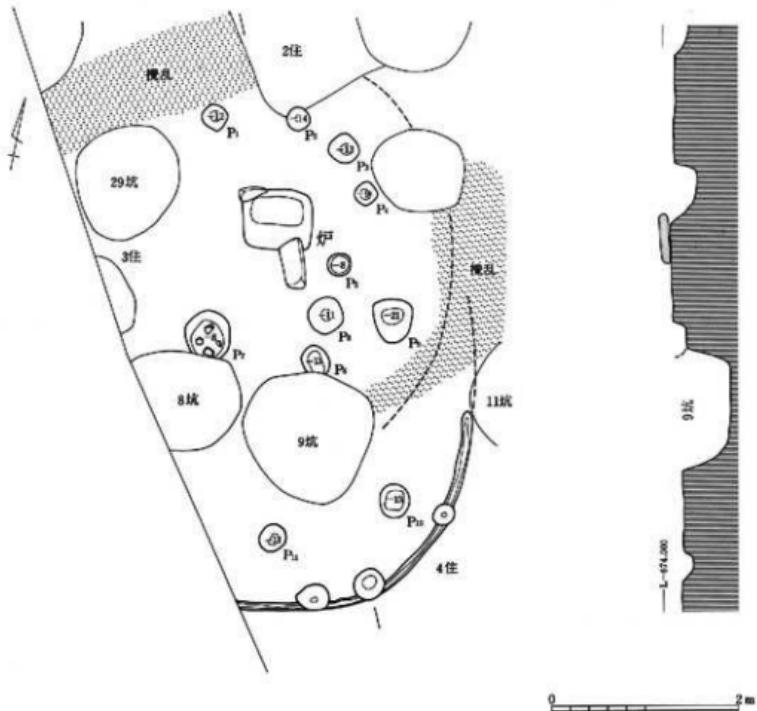
5号住居址（第14～18回）

きー4グリッドの旧河川上に位置する。敷石住居であるが、敷石部分は北壁沿いに一部が残存するに留まる。それ以外の床面は既に削られており、また壁は完全に欠失している。さらに2号住居址と擾乱で一部が破壊されるなど、遺存状況はけっして良好でないが、敷石をはじめとして炉・埋甕・丸石・石柱・柱穴等を検出した。

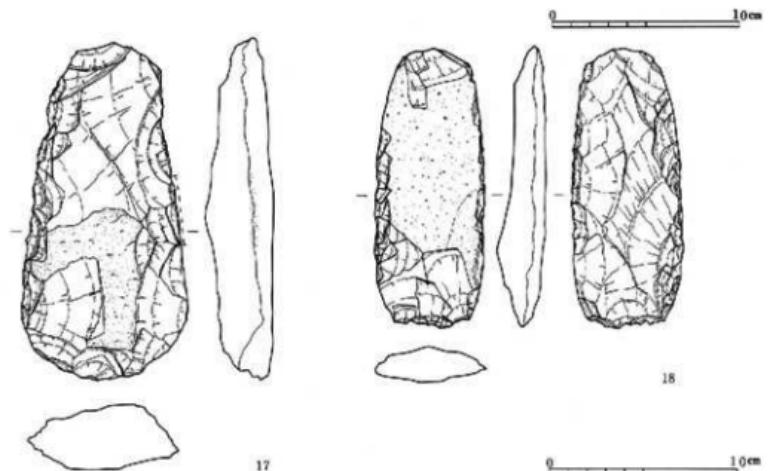
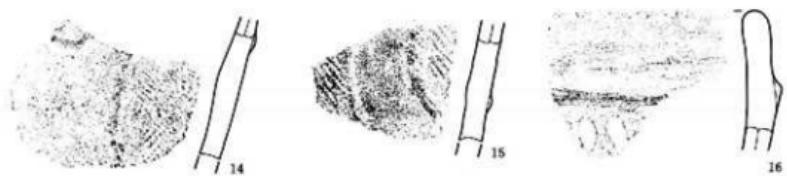
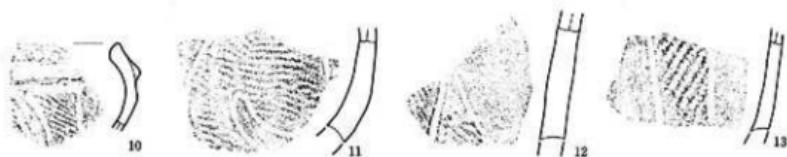
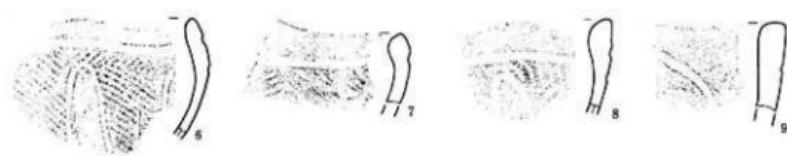
敷石は基本的に平石を配するものであるが、隙間に円礫を埋め込んだ箇所も認められる。炉・埋甕との位置関係から、敷石残存部は恐らく奥壁に位置しよう。直上には2個の丸石が置かれており、また対峙して石柱が立てられている。

炉は方形の掘方を持つもので、南壁沿いには拳大の円礫を配した痕跡がある。炉に間違いなかろうが、焼土は認められなかった。

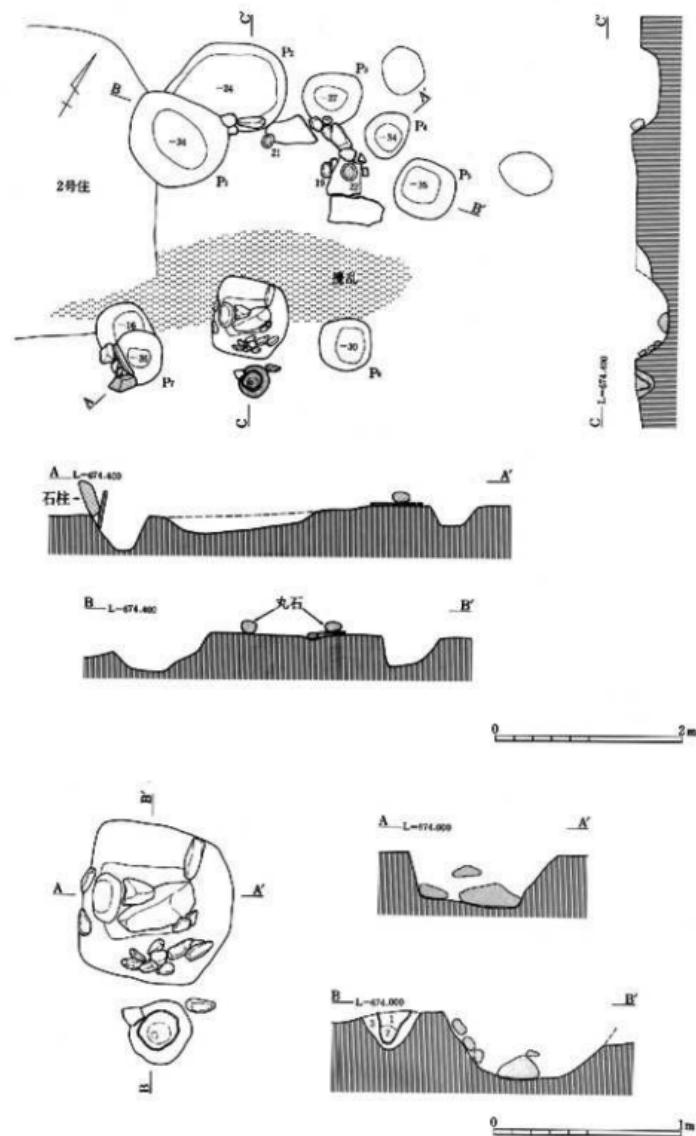
埋甕は、炉の南側に隣接して設けられている。ほぼ完形品を正位に埋設しているが、わずかに奥壁側に傾斜している。



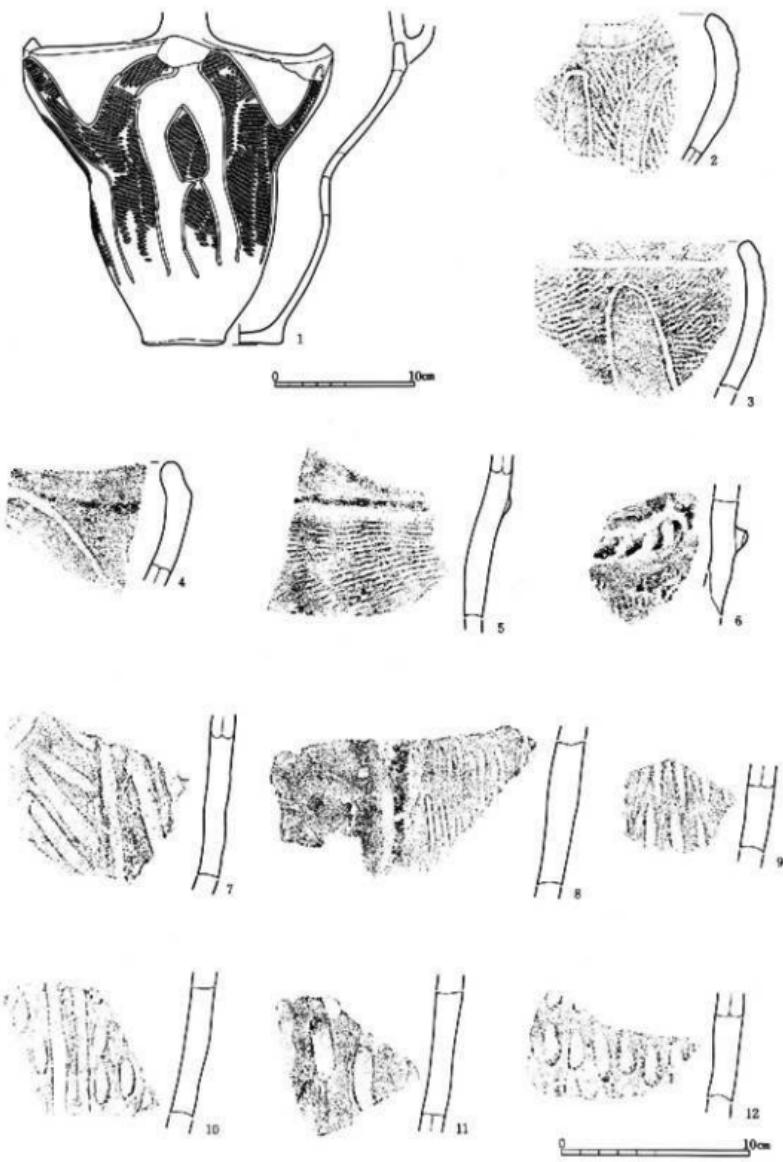
第12図 3・4号住居址実測図及び出土遺物拓影(1)



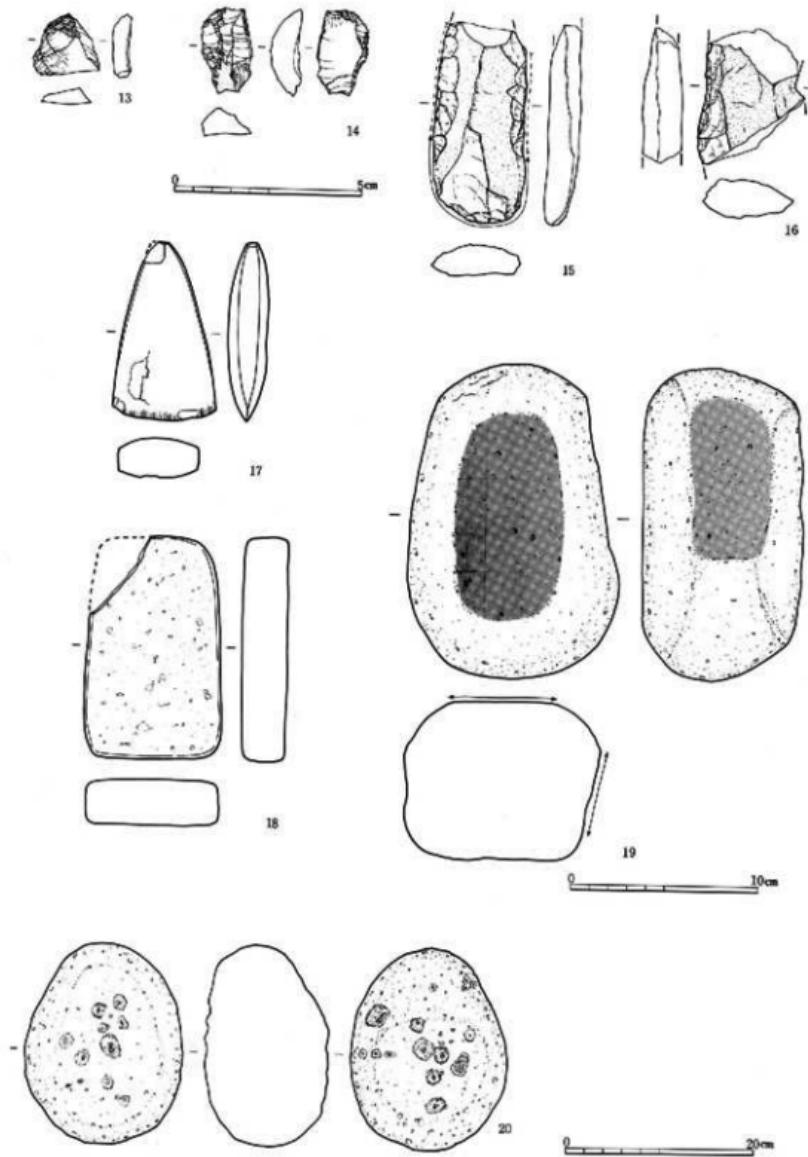
第13図 3・4号住居址出土遺物実測図及び拓影(2)



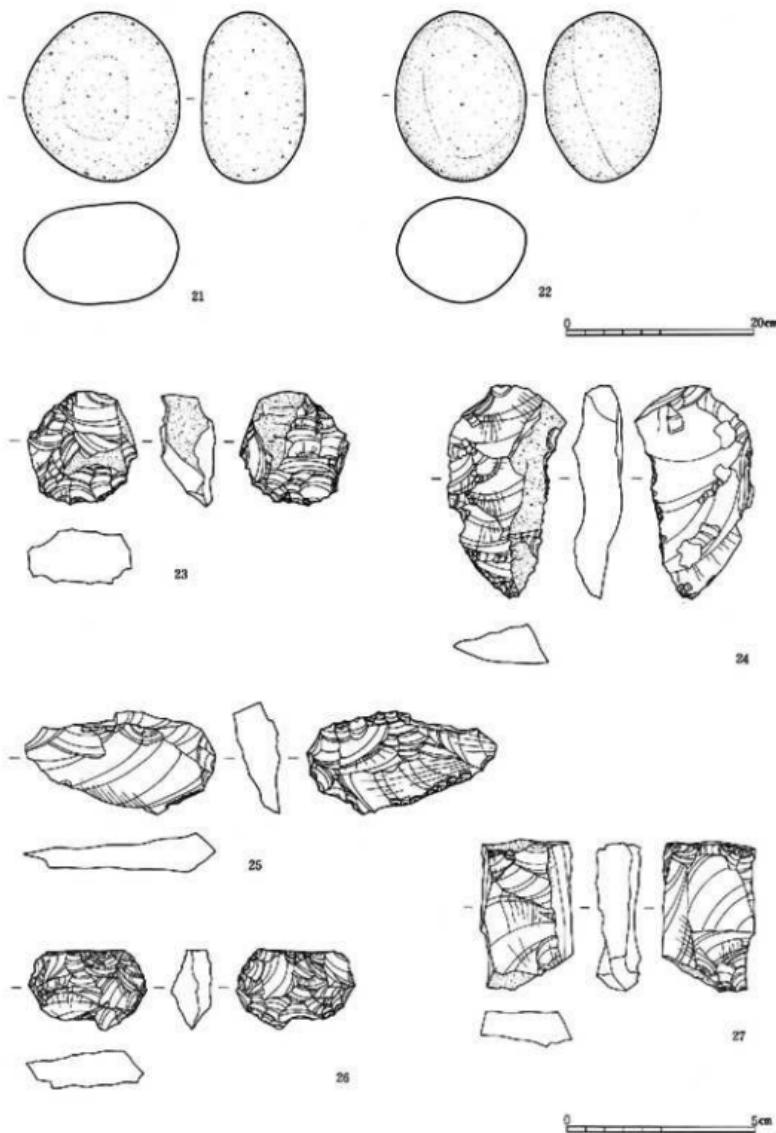
第14図 5号居住址実測図



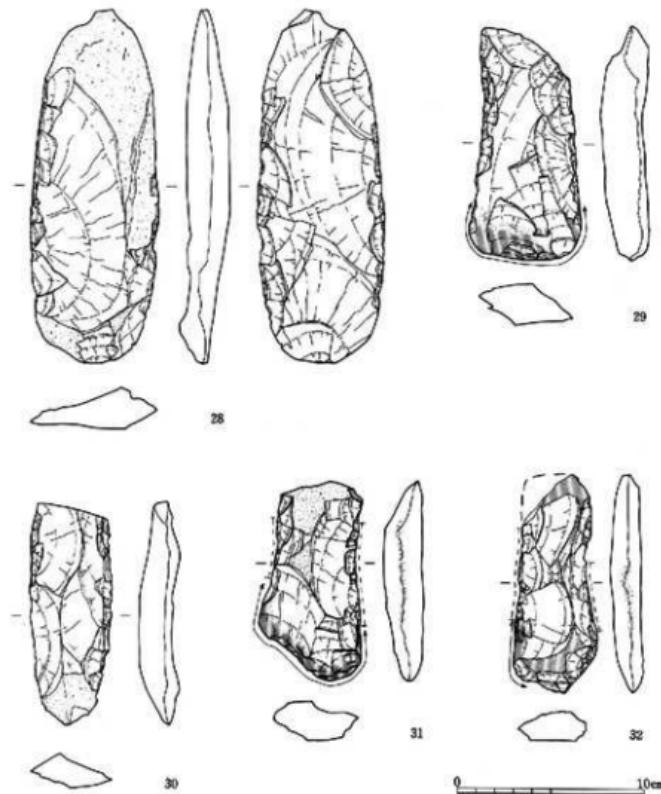
第15図 5号住居址出土遺物実測図及び拓影(1)



第16图 5号住居址出土遗物实测图(2)



第17図 5号住居址出土遺物実測図(3)



第18図 5号住居址出土遺物実測図(4)

遺物は、1が埋甕、16が砂³、他は敷石部周辺からの出土である。土器は、1～5が加曾利E式土器、6は隆帶上に棒状工具によるキザミを加える圧痕隆帶文系土器、7～12は唐草文系土器である。四日市第4段階に比定される。

6号住居址 (第19・20図)

き～5・6グリッドに位置する。奥壁部と考えられる北壁付近を除いて、壁及び床は欠失している。入口側には周溝状の溝が走り、それを住居南端と考えれば、一辺が4.7m内外の規模になるらしい。

炉は、中央奥寄りに存在する。長大な礫を用いた石囲炉だが、奥壁側ではなく、また全体に倒れている。礫・炉底ともによく焼けており、特に南西隅に焼土が厚く堆積していた。なお、西壁上端に石棒の欠損品を埋置している。

埋甕は出入口部に存在する。胴部以下を欠いたものを逆位に、かつやや奥壁側に傾かせて埋設している。

遺物は、1が埋甕、8が炉、7がP2、他は覆土内からの出土である。1は、縄文を地文とするものの、唐草文に特有なモチーフで文様を描くもの。後出的な4・5を除き、他の土器は四日市第2段階に相当する。

7号住居址（第21・22図）

おー6グリッドに位置する。壁と床は完全に欠失しているが、炉の存在、及びそれを取り巻く小ピットの検出を以て住居と認定した。ただし、出入口部埋甕は確認していない。炉石の遺存状況からすれば、床面の削平もレベル的にはわずかなものであると考えられ、埋甕については後世の土坑により破壊された可能性が高い。

炉は、方形で底部すり鉢状の掘方を呈する石囲炉である。ロームブロックを主体にした土を、厚さ15cm前後で充填し火床を設けている。周囲上方には割り石を配し、掘方埋土で固定しているようだが、多くは遺存していない。練石を含めて顯著に焼けており、火床上面には厚く焼土が堆積していた。

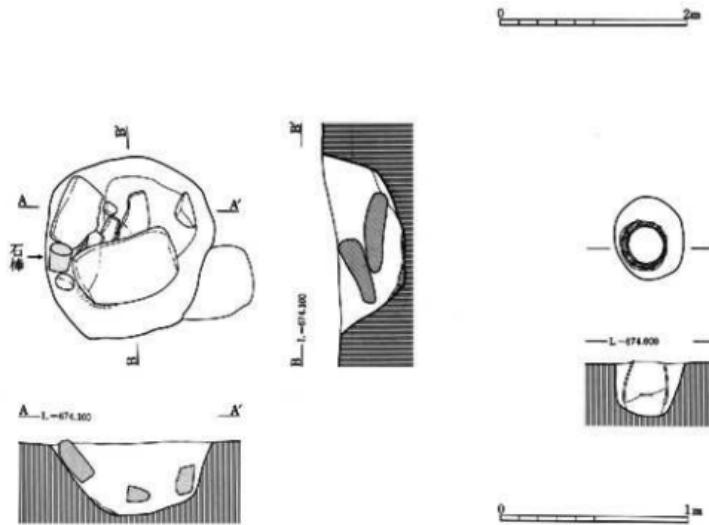
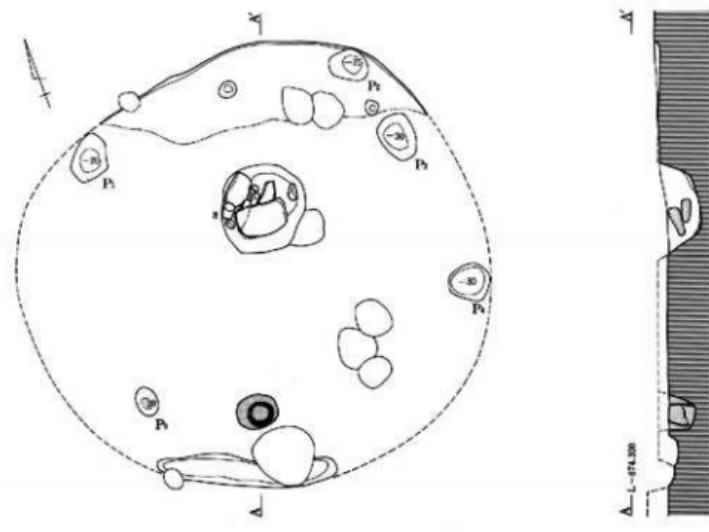
炉周辺には多数のピットを認めたが、位置関係からP1～P6を主柱穴と想定してみた。妥当なら、一辺5m強の規模の住居であったとることができよう。

遺物はすべて炉内出土である。1～3の土器のうち、1・2は唐草文系、3は压旗隆帯文系土器だが、細かな時期については言及しない。

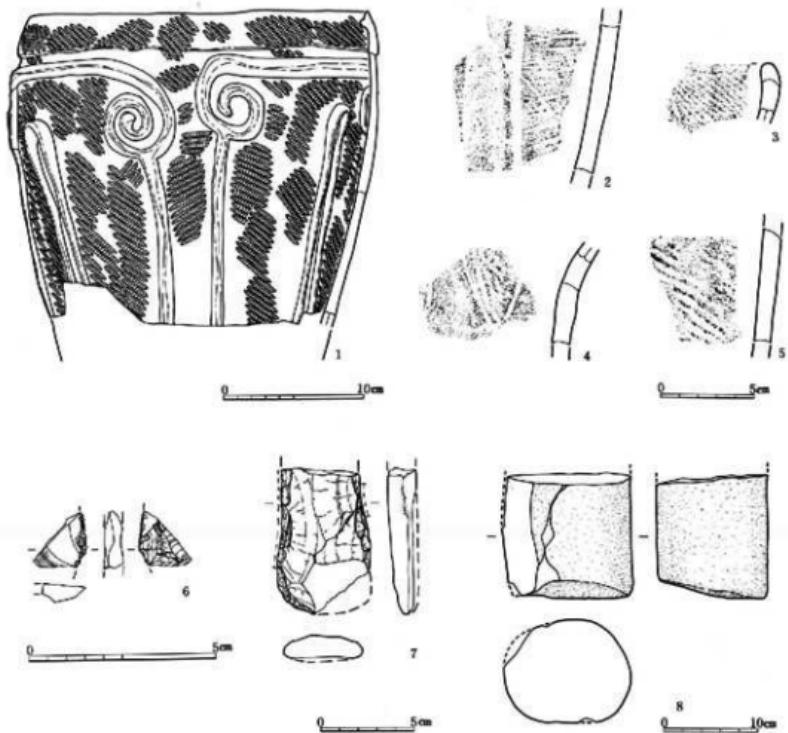
8号住居址（第23・24図）

えー6グリッドに位置する、配石を伴う住居址である。壁は完全に欠失しているが、炉・埋甕・配石及びそれらを取り巻く小ピットを検出したことで住居址と認定した。炉北側から配石部分に掛けてわずかながらの堅緻面を確認しており、床面が残存していたことがうかがえる。しかし炉近辺からは南方方向に徐々に傾斜しており、ここでの床は削平を受けている。規模は不明だが、P1～P6を主柱穴と考えれば一辺が4.5m内外の住居であったとことができよう。また、屋外単独埋甕としか扱わざるを得なかった1号埋甕が南方に位置するが、これをも帰属させて柄鏡型住居を想定することも可能だが慎重な態度を取りたい。

配石は住居の奥壁側にあり、炉の北およそ1mの所に直線的に配列されている。細長い石を利用する傾向を看取するが、すべて円礫で構成されている。



第19図 6号住居址実測図

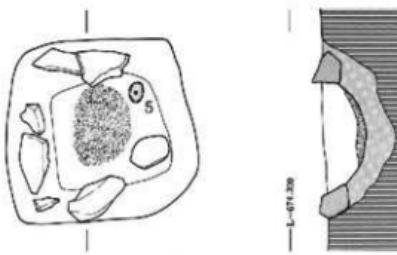


第20図 6号住居址出土遺物実測図及び拓影

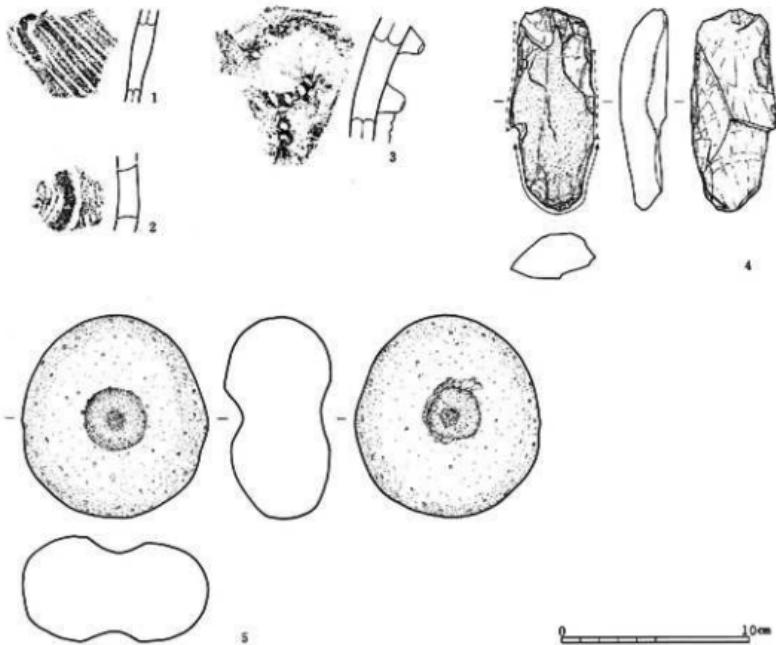
炉は、主柱穴の配置からすれば住居中央付近に位置していたと考えられる。方形の掘方を呈するが、副軸方向がわずかに長い。石圓炉だが、南及び東側に縁石ではなく、また奥壁側のものも炉底に転落している。焼土をまったく認めなかったものの、炉石は顯著に焼けていた。

埋甕2基が炉南側に存在する。ともに出入り部埋甕であろう。主軸に直交する形で、かつ切り合って並列しているが、その新旧をつかむことはできなかった。两者とも、底部を残したものを正位に埋設しているようだが、床面の削平もあってか底部のみを確認したに留まり、埋甕Aにおいては1/2破片に過ぎなかった。

遺物は、3が埋甕A、2が埋甕Bであり、1・4・5が炉内、他は配石周辺からの出土である。唯一完形に近い1の土器は、口縁下に隆帯をめぐらし、以下胴部を縱位に分割する小形の深鉢形土器。4～7は加曾利E式土器。底部付近のみが現存する2・3も含めて、土器はすべて四日市



第21図 7号住居址実測図



第22図 7号住居址出土遺物実測図及び拓影

第4段階に比定されるものであろう。

10号住居址（第25図）

う・えー・8グリッドに位置する。壁及び床は完全に消失しており、炉とその周辺の小ピットを検出したことで住居と認定した。P 1～P 4を主柱穴と考えたが、妥当なら主軸長約5.5m、副軸長約4.8m前後の規模になり、東壁の一部は調査区外に及んでいるらしい。また、北で古墳時代の9号住、南で平安時代の11号住と絡み、さらにはいくつかの土坑と切り合うなど遺存状況は良好でない。出入口部埋甕も11号住により破壊されてしまったものと考えれる。

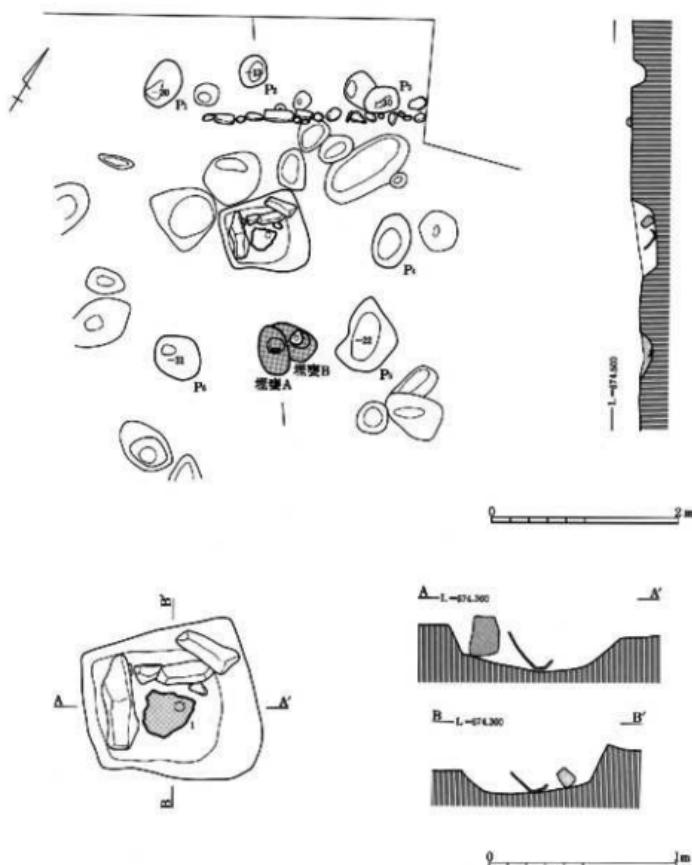
炉は、中央奥寄りに存在する。南壁を27号土坑及び擾乱坑で壊されているが、住居住主軸方向をわずかに長く取る長方形を呈するようだ。掘方平面形は大きく、また床面が削平されているにも関わらず深さも45cmと深い。炉底は顯著に焼けていた。

遺物は土器に限られる。すべて炉の覆土から出土している。1～3が加曾利E式土器、4・5が唐草文系の土器である。四日市第4段階に比定される3を除き、他は同第3段階に位置づけら

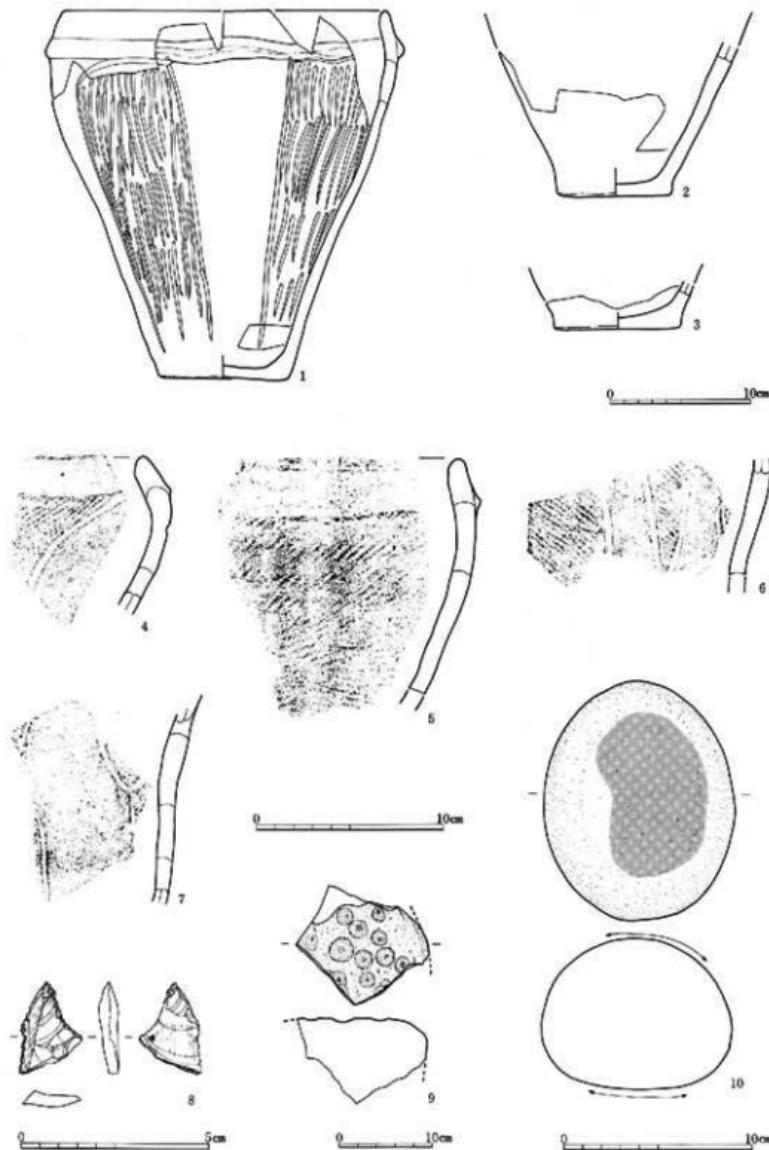
れよう。

12号住居址（第26～28図）

おー9グリッドに位置し、住居東側は調査区外に及んでいる。床・壁ともに欠失するだけではなく、住居北半を平安時代の11号住が大きく削り、かつ南西側では同期の13・15号住と重複している。炉と埋甕、そして壁沿いに回るであろう柱穴を検出したことで住居と認定した。柱穴の回りからすれば、規模 $5.5 \times 4.5\text{m}$ 前後の南北に長い住居であったと考えられる。



第23図 8号住居址実測図

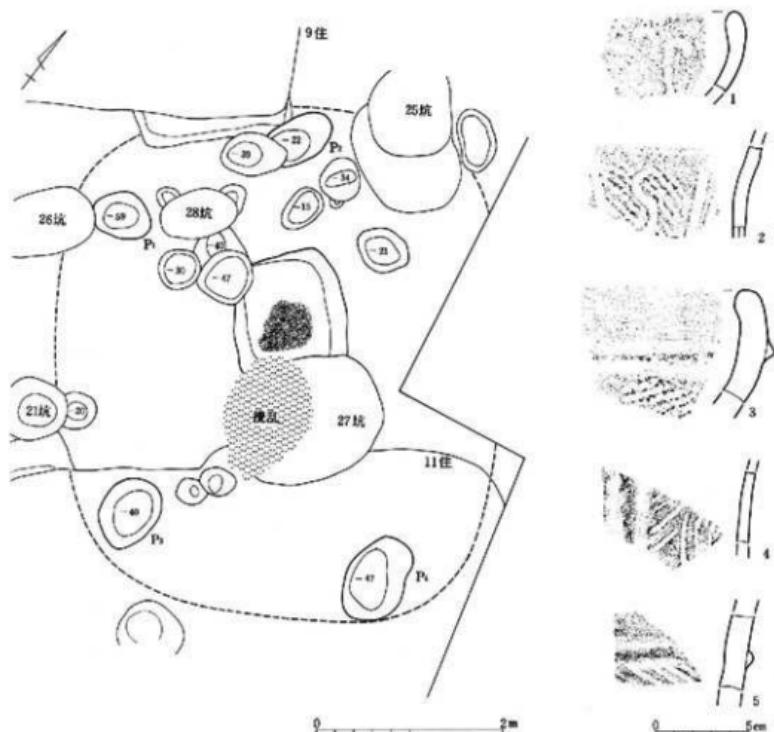


第24図 8号性居址出土遺物実測図及び拓影

炉³は、住居中央に存在する。東西に長い長方形の掘方を持ち、北西隅にのみ縁石が残る。しかも、1/3～半身程の底部を欠く土器片を炉底に敷いて火床としている。土器は3個体分を認め、すべて内面を利用している。土器の配列の仕方、及び埋蔵の位置を考えれば、住居の主軸は東にあつた可能性が高い。

埋蔵は炉の南西に位置し、15号住の炉を切って設けられている。底部付近のみを正位に埋設し、その上方を偏平な円碟で蓋をしている。出入り部に埋設されたものであろう。

遺物は、1が埋蔵、2～4が炉底に割り敷かれた土器であり、5～9の石器は皆炉内からの出土である。3は口径推定38cmを測る大型の深鉢形土器であり、幅広の繩文帯と幅狭の無文帯を交互に配している。4は両耳広口壺であり、同部に逆「U」字状文をめぐらす。1・2を含めて、土器はすべて四日市第4段階に比定される。

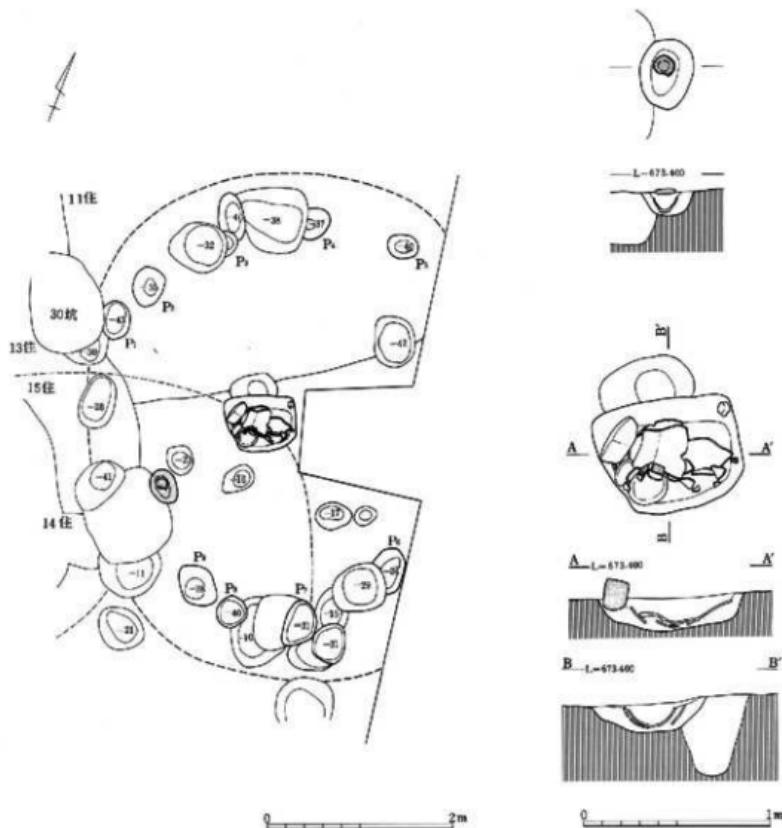


第25図 10号住居址実測図及び出土遺物拓影

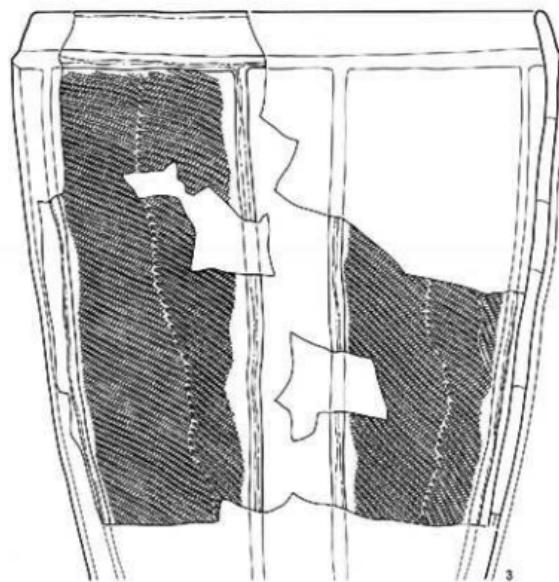
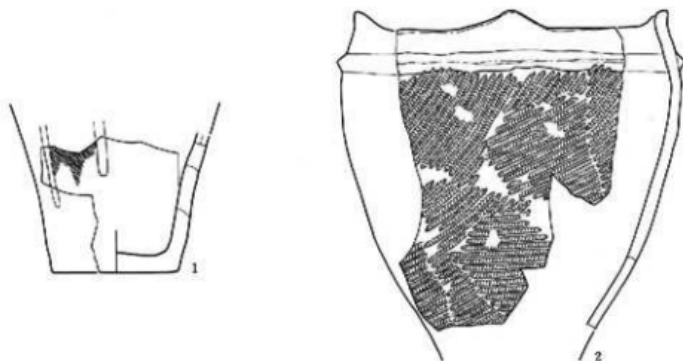
13号住居址（第29・30図）

お・かー8グリッドに位置する。主軸長約3.9m、副軸長約4.5m程度の規模が推定される敷石住居であるが[†]、平安時代の14号住に住居中央を破壊され、加えて同期の12・15号住及びいくつかの土坑と重複しているため、壁・床の残る範囲は北半縁辺部に限られる。また、耕作が一部床面にまで達していることから、床が遺存するところであっても敷石の残る範囲は一部であった。尚、壁高は最大でも5cmを測るに過ぎないものであった。

敷石は、一応原位置を留める形で北西隅に、そして散在的に北東隅に残存している。すべて平石を利用するものであった。

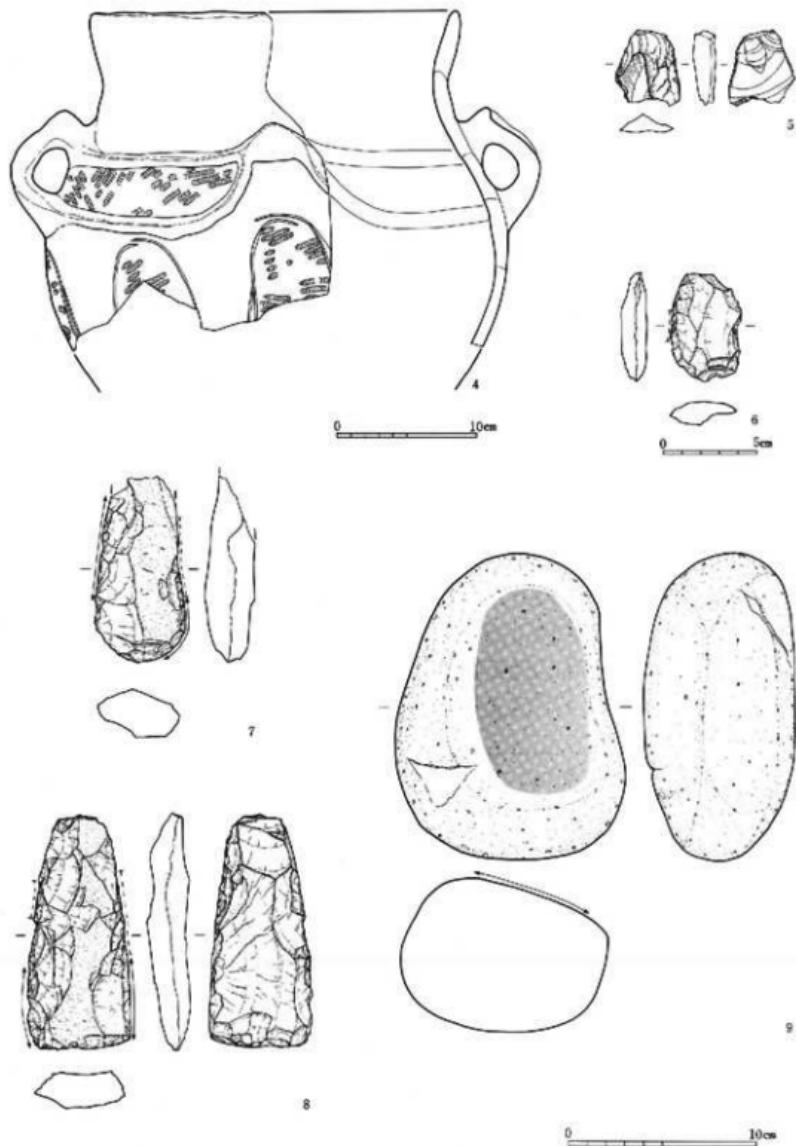


第26図 12号住居址実測図

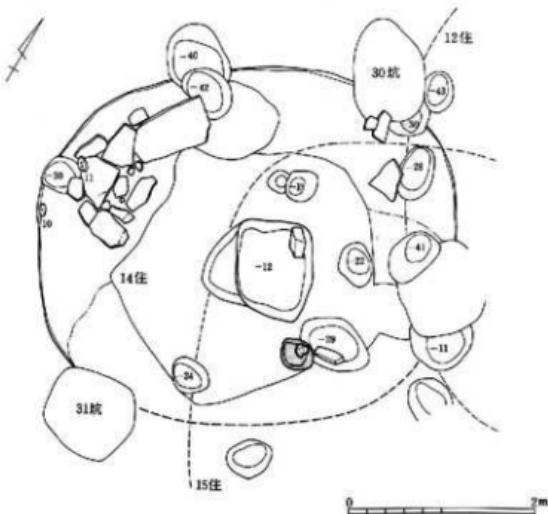


0 10cm

第27図 12号住居址出土遺物実測図(1)



第28図 12号住居址出土遺物実測図(2)



第29図 13号住居址実測図

炉は住居中央に存在する。主軸長をわずかに長く取る長方形の掘方を持ち、北東隅に綠石がひとつだけ残っている。14号住に上端を削られていることから、12cm前後で炉底に達したが、実際には25cm程の深さを有するものであろう。焼土はほとんど確認できず、炉底の焼け具合も極めて微弱なものであった。

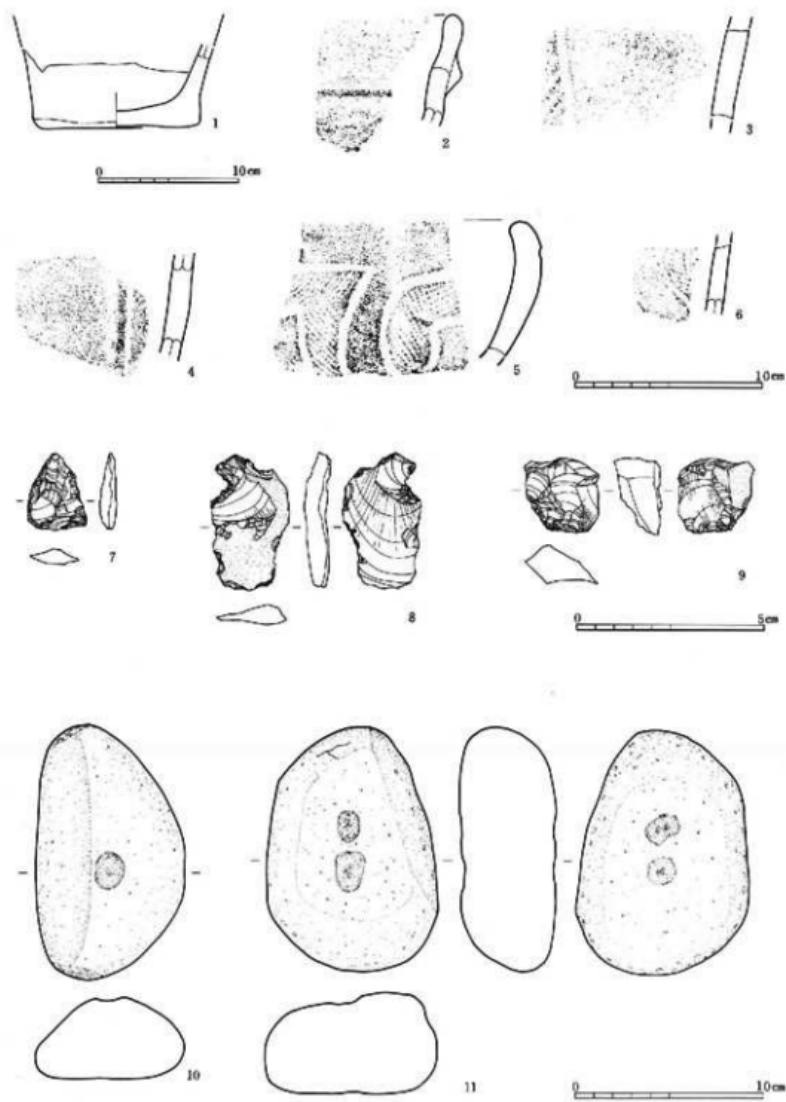
埋甕は、炉のすぐ南側に設けられている。出入口部に埋め込まれたものであろう。底部を残すものを正位に埋設したようだが、炉址同様、上端を10cm以上削られていることから底部のみが残存しているに過ぎない。

遺物は、1が埋甕、2～9が覆土内、10・11が床面から出土した。1は底部破片のため時期不明だが、2～4は四日市第4段階の加曾利E式土器、5・6は後期初頭の称名寺式土器である。

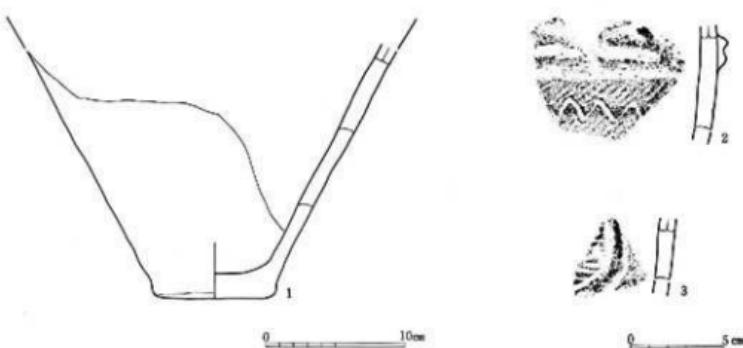
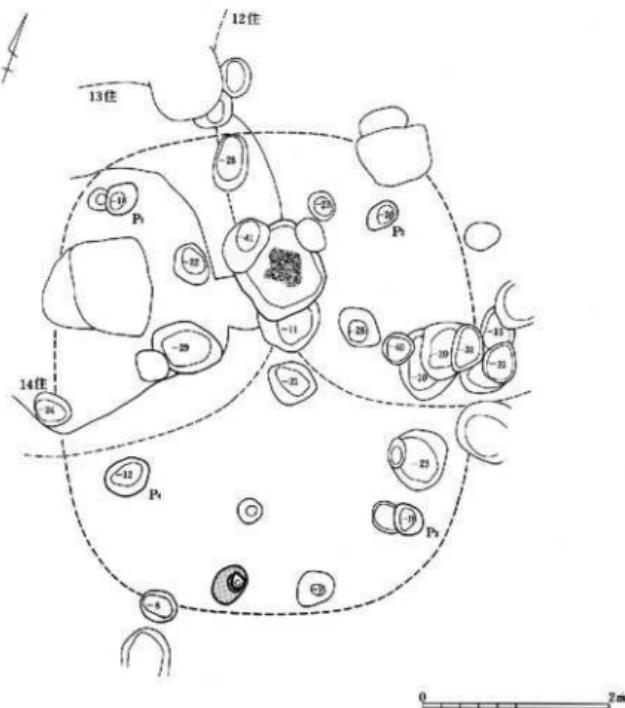
15号住居址（第31図）

お・かー8・9グリッドに位置し、同期の12・13号住、平安時代の14号住と北半で絡んでいる。これら切り合いの中では本址がもっとも古い。壁・床ともに完全に欠失しているが、炉と埋甕の位置関係、またそれに関連させてP1～P4を主柱穴と想定し、主軸長約5.2m・副軸長約4.5m程度の規模になるものと考えた。

上記の推定が妥当なら、炉は中央奥寄りに位置することになろう。方形の掘方を持ち、深さは



第30図 13号住居址出土遺物実測図及び拓影



第31図 15号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影

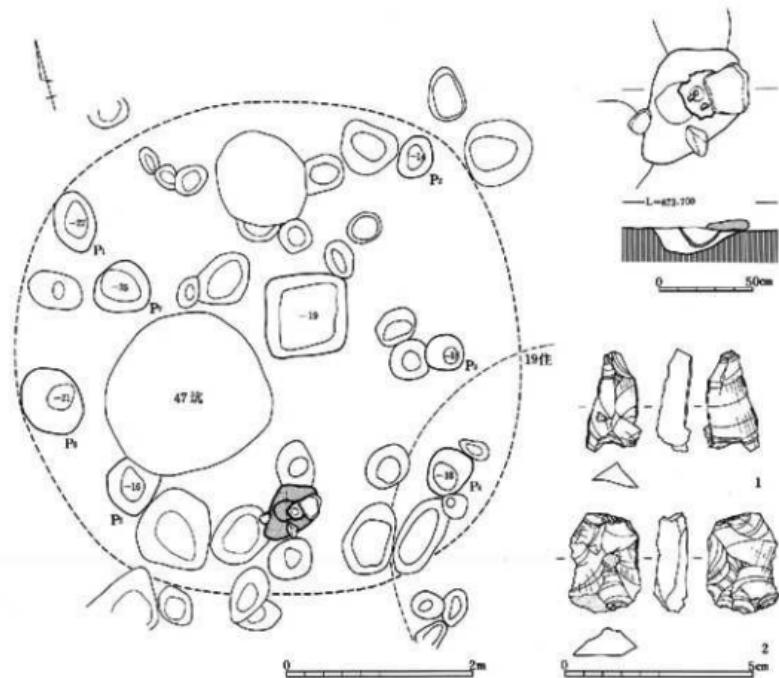
遺存高だけで28cmを測る。火床は中央が頗著に焼けていた。付随する施設はない。

炉の南、約3m離れたところにある埋甕を、本址の出入口部に設けたそれと想定した。底部を残すものを正位に埋設している。上方を削平されていることもあって、底部付近のみが現存するに過ぎない。

出土遺物は微量である。1が埋甕であり、2・3が炉から出土した土器片である。これ以外、帰属を確定しえるものはない。2は加曾利E式(系)、3は唐草文系土器であろうが、時期は特定しえない。

18号住居址(第32図)

く・けー6・7グリッドに位置し、南東隅で19号住と重複する。19号住の敷石の残り方から考えれば、本址の方が古い可能性が高い。壁・床とともに欠失するが、埋甕、炉と考えられる方形の土坑、及びその周辺に数多く分布する小ピットを検出したことで住居と認定した。小ピットのうち、特にP1～P7を主柱穴としたが、等を得たものなら一辺5.3m内外の住居とすることができ



第32図 18号住居址実測図及び出土遺物実測図

よう。

炉は、中央奥寄りに位置する深さ19cmを測る方形の土坑をそれとした。だが、焼土はまったく検出できなかった。

埋甕は、炉址から南に約1.7m離れたところに存在する。出入口部に設けられたものであろう。胴上半を欠き、底を抜いたものを正位に埋設している。土器上端の一部に偏平な円環が掛かっているが、蓋としたものであろうか。

遺物は、埋甕以外にはP1から出土した1、P7から出土した2の小形石器だけである。埋甕は、極めて状態が悪く脆弱であったことから復原に至らなかつたが、四日市第2段階に伴う唐草文系土器を用いていた。

18号住居址（第33図）

けー7・8グリッドに位置し、北西隅で本址より古い18号住と、東半で20号住と重複している。敷石住居だが遺存状態が悪く、壁を完全に欠失するほか、床も敷石が残る部分を除いて耕作を受けている。柱穴と思われる小ピットの配置から主軸長約4.6m副軸長約4.3m程度の規模を想定した。

敷石は、北西隅にのみ残存している。すべて平石を利用したものである。敷石上面にまで耕作が及んでいるが、一応、原位置を保つものと理解したい。

炉は、中央奥寄りに存在する。深さ約30cmの方形の掘方を持ち、炉底及び周壁にローム混じりの土を10~15cm程充填させて火床としている。炉内には、敷石に用いた石と同種のものが奥壁と炉底に認められた。良く焼けていることから炉石に利用したものであろうが、奥壁だけが本來の位置を留めるものであろう。火床は中央のみが焼けていた。

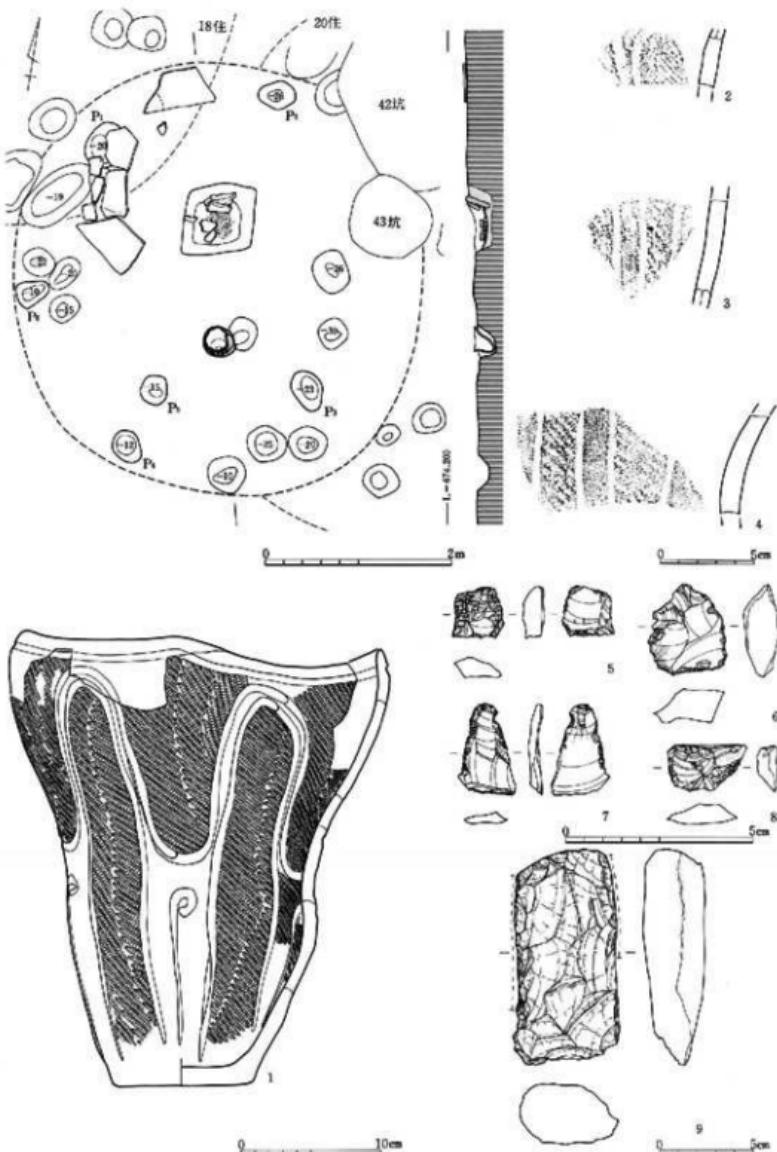
埋甕は、炉址の南、約1mのところに存在する。ほぼ完形の土器を正位に、かつ若干奥壁側に傾かせて埋設している。出入口部埋甕と考えられる。

遺物は、1が埋甕、6が炉、7がP6から出土したものであり、他は敷石周辺に散在していたものである。1は4単位の小波状口縁をなし、波状沈線文を主とするモチーフが施された加曾利E式土器。2~4の土器は同様の脇部破片。土器はすべて四日市第3段階に位置づけられる。

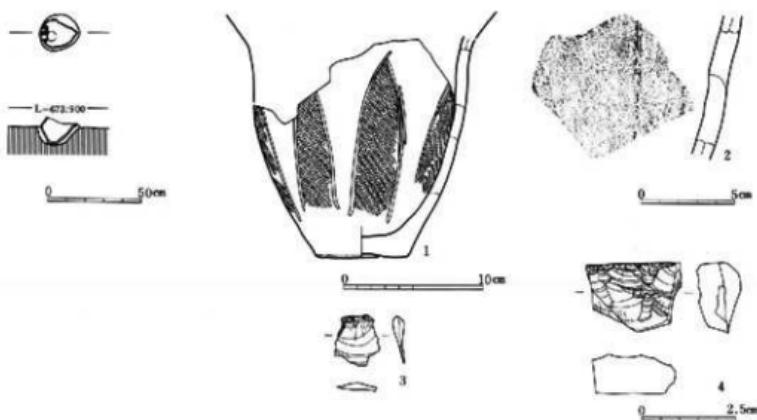
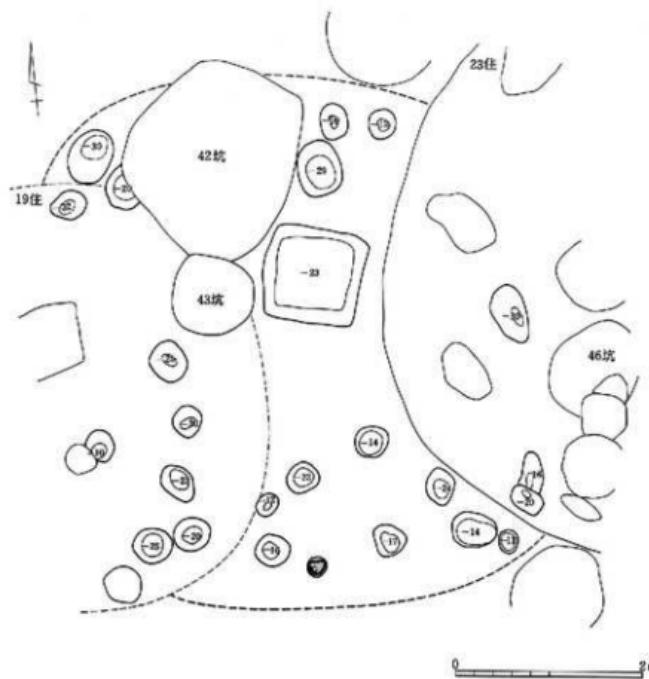
20号住居址（第34図）

けー8グリッドに位置し、19号住と西側で、23号住と東側で重複している。壁と床は完全に欠失しており、炉と考えられる方形の土坑、埋甕、及び周辺に散らばる小ピットを以て住居と認定した。妥当なら、主軸長は6m弱程度を測るであろう。

炉と考えた方形の土坑は、一边が約1m、深さが現存高で23cmを計る。炉とすれば人形の部類に入るが、焼土はまったく検出していない。



第33図 19号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影



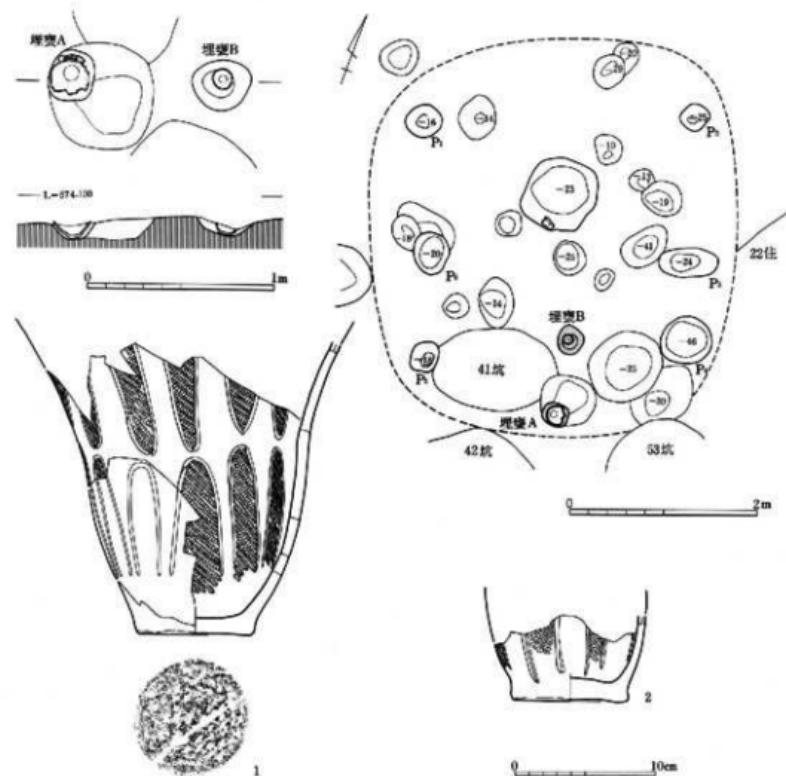
第34図 20号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影

埋甕は、炉址の南、約2mのところに存在し、出入口部埋甕と考えた。底部を残したまま正位に埋設しているが、床が削平されていることから胴上半を欠損している。

遺物は、1が埋甕であり、他は炉址から出土している。土器は1・2とも加曾利E式である。

21号住居址（第35図）

くー8グリッドに位置し、南側で22号住と重複する。壁・床ともに欠失しているが、約80cmの間をおいて南北に並ぶ埋甕を検出し、かつ並びの北側延長上に炉と考えられる土坑を認めたことで住居と認定した。周辺には小ピットが散在し、特にその中のP1～P6を主柱穴と考え、結果、主軸長約4.3m・副軸長約3.9mの住居を想定するに至った。



第35図 21号住居址実測図及び遺物実測図

炉は、中央奥寄りに位置する。焼土は認められなかつたが、入口側に焼けた割り石が遺存していた。

2個の埋甕は、ともに底部を残したまま正位に埋設されたものである。出入口部に設けられたものだろう。床を削平されていることにより底部付近のみが残存している。

遺物は埋甕以外出土していない。1が埋甕A、2が埋甕Bであり、両者とも四日市第4段階に位置づけられる。

22号住居址（第36図）

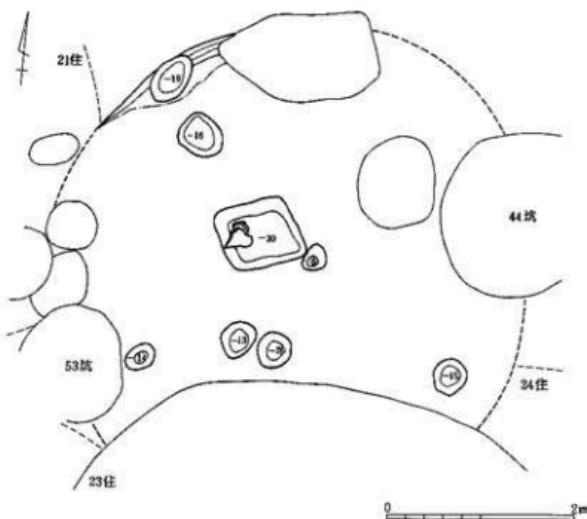
く—9グリッドに位置し、20・21・23・24号住とそれぞれ重複する。特に北側を23号住が深く削り込み、本址の出入口部を破壊している。壁・床・周溝の一部が北西隅に残存するが、主柱穴が明瞭でなく規模・プラン等は不明である。

東西に長軸を持つ深さ30cmの長方形の土坑を炉と考えた。焼土は皆無であったが、炉底西側に焼けた割り石が2個遺存している。

出土遺物はない。

23号住居址（第37~42図）

け—9グリッドに位置し、20・22・24号住と重複する。唯一、壁と床が完存する住居址である。



第36図 22号住居址実測図

概ね橢円形を呈し、主軸長約6.2m・副軸長約5.8mを測る。壁高は15cm前後である。拡張住居の可能性がある。

床は、炉周辺から出入口部に掛けて広く「たたき」状の堅緻面が擴がるが、壁に近づくにつれ次第に軟質となり、壁際では掘り込んだローム面をそのまま床としている。基本的には平坦であるが、硬化部分は凹凸が目立つ。

東壁と南壁の一部に周溝を検出した。深さは5~10cmを測る。

壁近くに多くのピットを検出した。柱穴と考えられるが、埋甕南側の小ピットについては出入口に関連する施設かもしれない。

炉は、中央奥寄りに存在する。方形の掘方を持つ大形の石囲い炉である。長大な自然礫を四方に配した姿を今に留めるが、東側の炉石のみが割れ落ちている。ローム混じりの土を周囲に充填することで、炉縁石を固定し、かつすり鉢状の火床を設定している。火床中央には厚く焼土が堆積していた。

南壁中央直下に出入部埋甕2基が存在する。主軸上に切り合って並び、より外にある埋甕Aが新しい。ともに胴下半を故意に欠損させたものを逆位に埋設しており、また埋甕A上には蓋状の偏平な円礫をかけている。

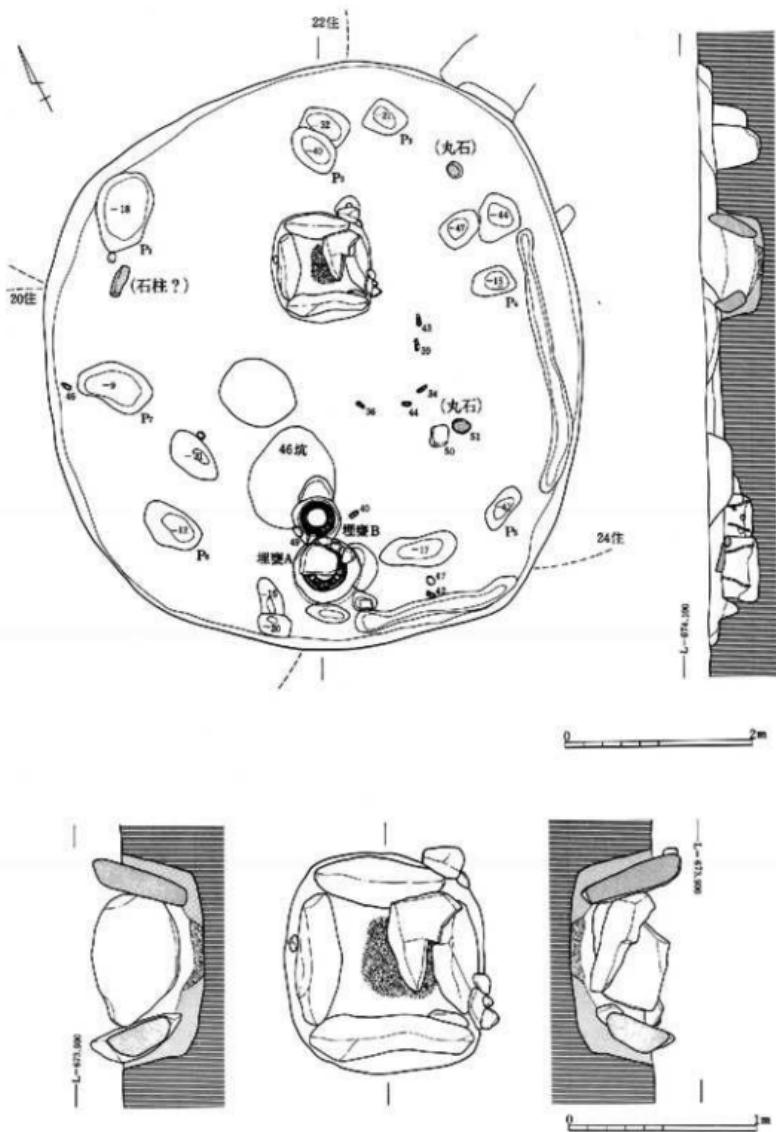
東側に、やや離れて丸石2個が置かれていた。两者床面出土である。またそれと対峙する側に長さ35cm程の細長い自然礫が床面上に倒れており、これについては石柱的役割を果たしていたものとの可能性がある。

遺物は、上器・石器とともに豊富であったが、埋甕を除き土器は破片に限られた。1~8の土器は、1が埋甕B、2が埋甕Aであり、他は床面からの出土である。1・2は加曾利E式土器、6~8は唐草文系土器に伴う胴部破片。これらは四日市第2段階の土器群である。石器は、16・17・19が炉の覆土、12がP3、9・18・22・25・28・30~33・45・46・49・51が床、他は覆土中から出土している。

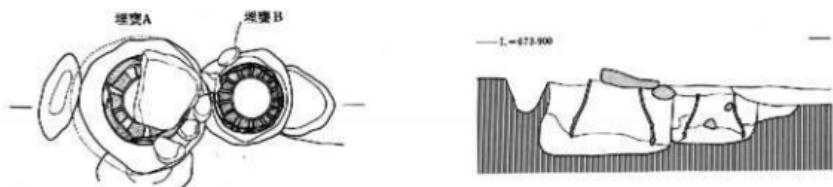
24号住居址（第43・44回）

けー9・10グリッドに位置し、西半で22・23号住と重複する。また、東壁側は調査区外となり既に破壊されている。壁・床を欠失するが、炉と埋甕を検出したことで住居と認定した。しかし炉址自体は2基を数えるため、必然的に2軒の住居を想定すべきだが、主柱穴の配置が不明瞭であるため別の1軒を抽出できなかった。ここでは一括して扱う。なお、土器の接合状況から考えて、より新しい側の炉と埋甕がセットになることは確実視される。

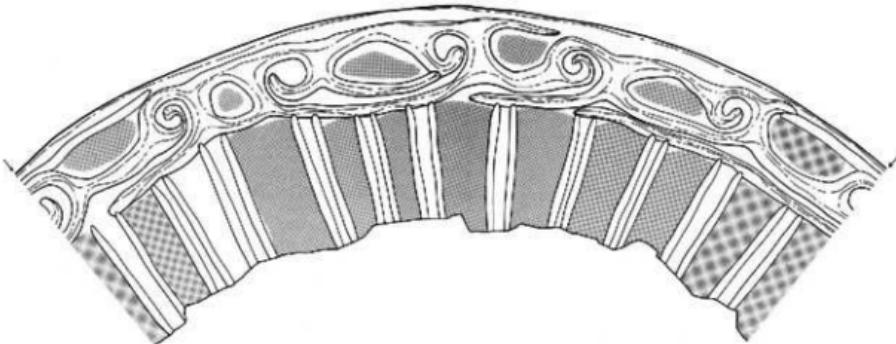
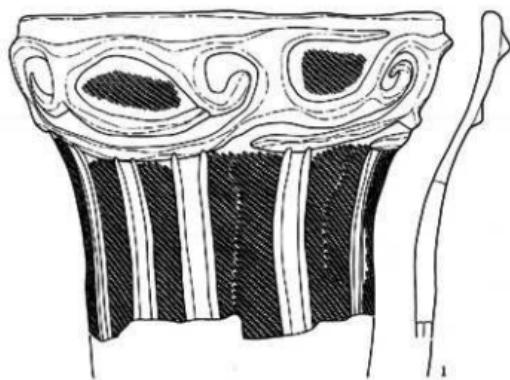
炉は、埋甕との位置関係から奥壁寄りに位置する可能性が高い。2基が東西に切り合うが、西側の炉から出土した土器破片が埋甕と接合していることから（第44回-1のアミ部）、上記の点を絶対視した。西側の炉は、東西に長軸を取る長方形の掘方を呈し、東壁に沿って石を配している。



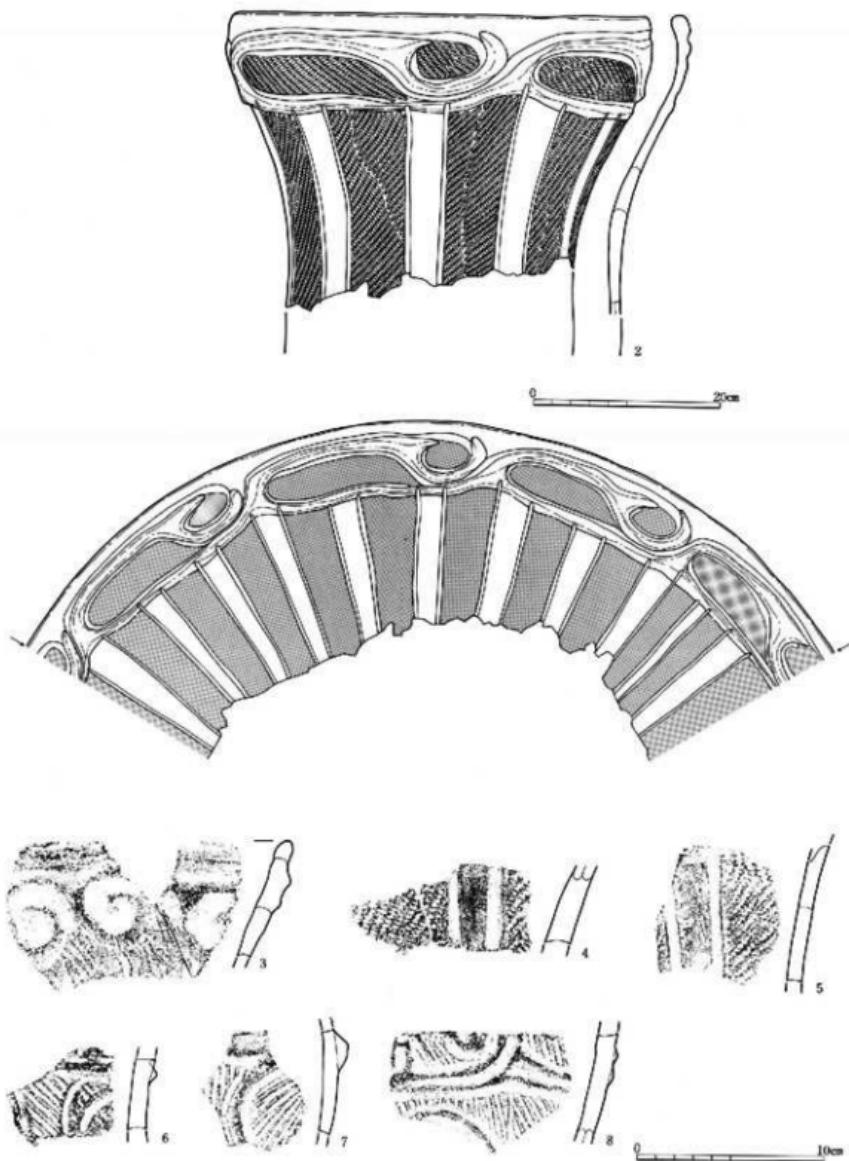
第37図 23号住居址実測図



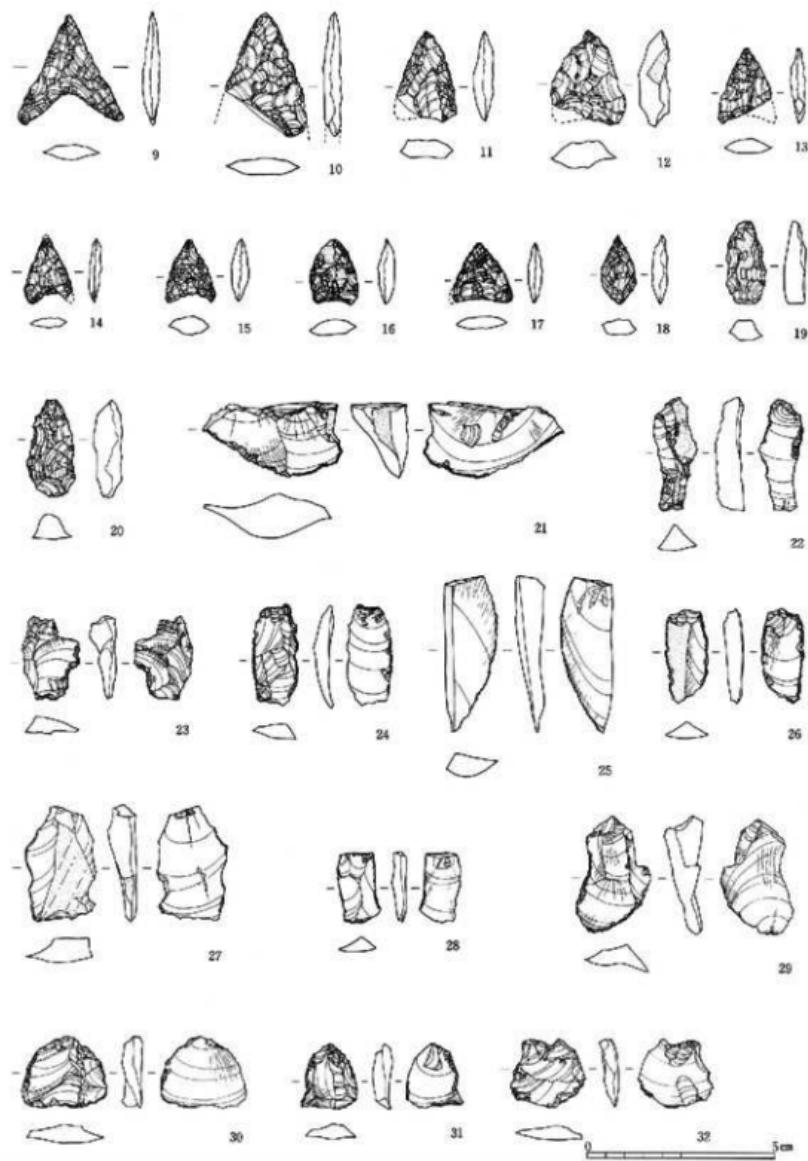
0 1m



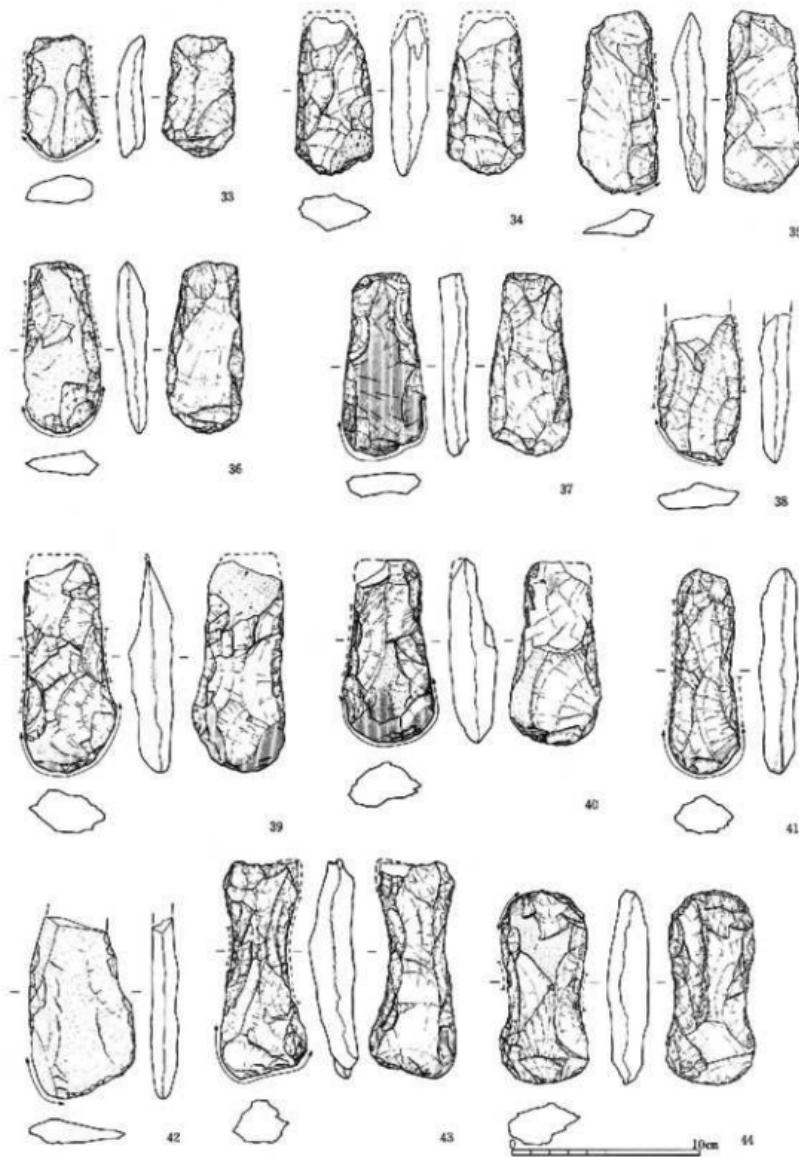
第38図 23号住居址埋甕実測図及び出土遺物実測図(1)



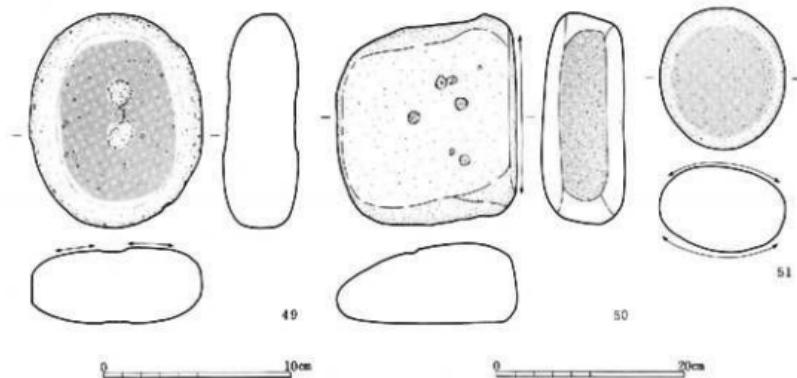
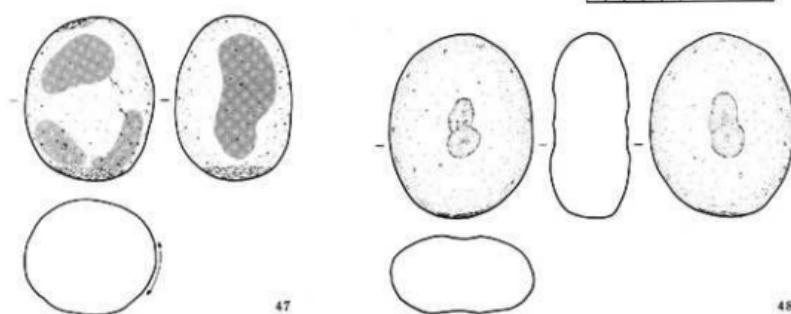
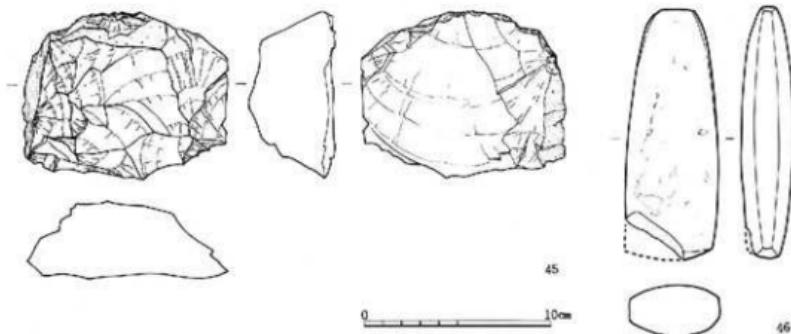
第39図 23号住居址出土遺物実測図及び拓影(2)



第40図 23号住居址出土遺物実測図(3)



第41图 23号住居址出土遗物实测图(4)



第42图 23号住居址出土遗物实测图(5)

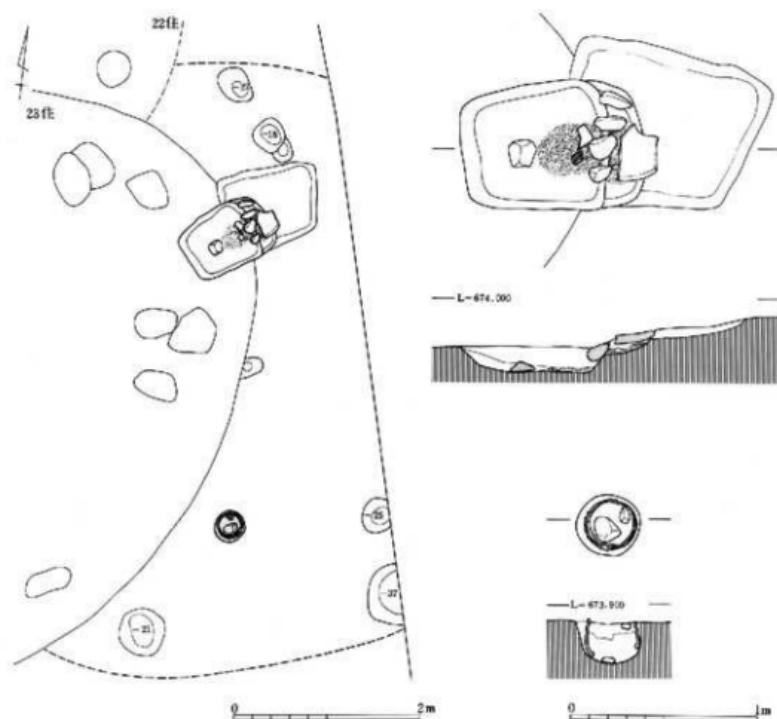
火床は顯著に焼けており、特に東寄りで焼上の堆積を認めた。東側に位置する炉は一部が残存するに過ぎないが、これも良く焼けていた。これからは遺物の出土をみていない。

埋甕は出入口部に設けられたものであろう。炉から約2.7m南に離れたところに存在する。胸部中位以下を欠いたものを逆位に埋設していた。

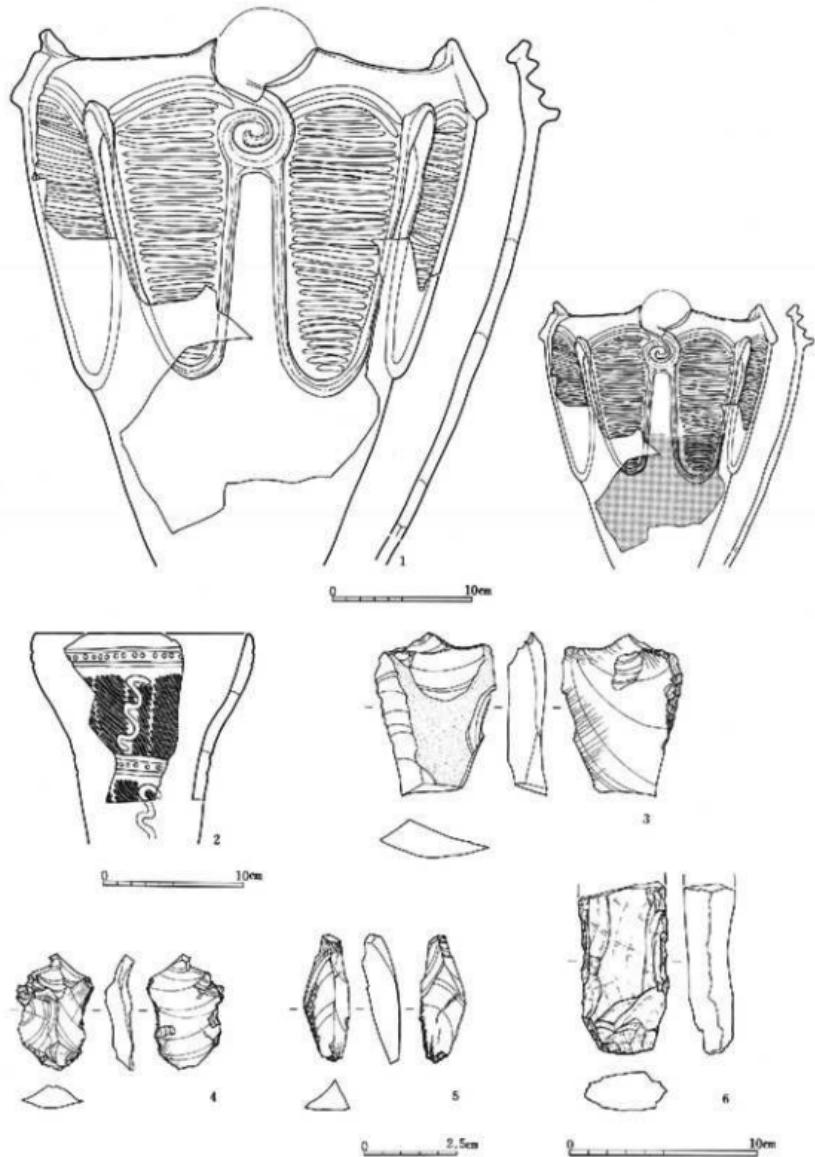
提示した遺物は、1が埋甕であり、他は西側の炉から出土したものである。1の土器は唐草文系土器、2は加曾利E式（系）土器であり、ともに四日市第2段階に位置づけられる。

25号住居址（第45・46図）

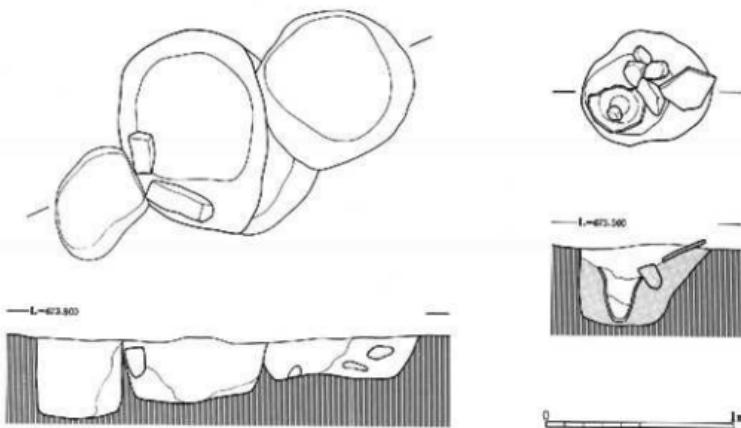
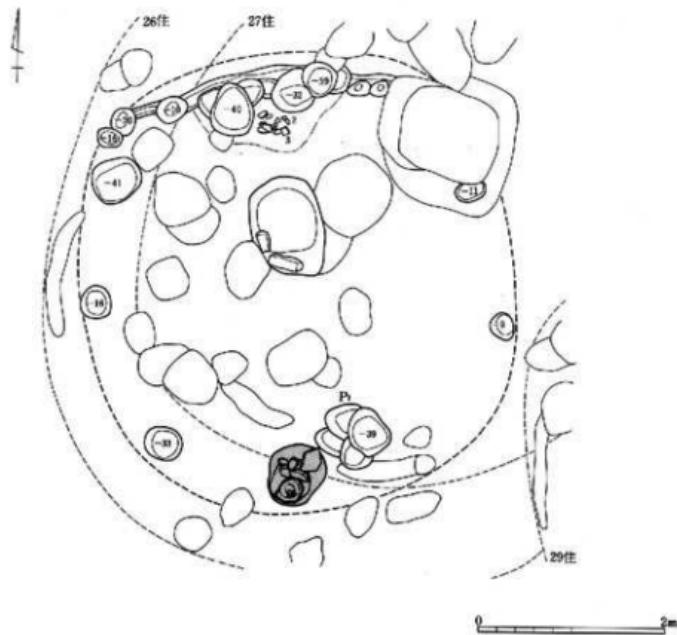
さー8グリッド、斜面部に位置する。同期の26・27号住内にあるが、本址が最も新しく、高位にある北側で壁・床の一部が残存している。住居出入口部に2基の埋甕が存在するが、土器そのものがもつ時期差及び住居の新旧関係を考えて、ここに提示したものを本址に帰属させた。柱



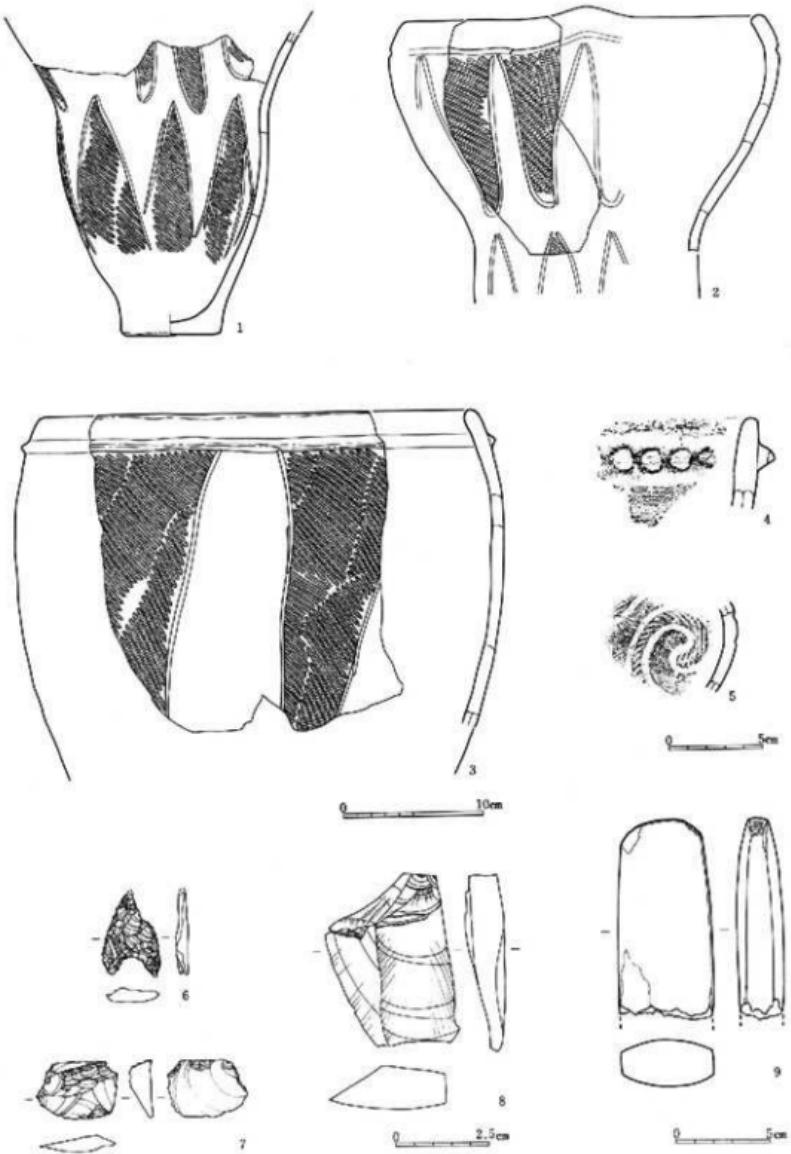
第43図 24号住居址実測図



第44図 24号住居址出土遺物実測図



第45図 25号住居址実測図



第46圖 25号住居址出土遺物実測図

穴の配置も考えて、主軸長約5.0m・副軸長約4.7m程度の規模が想定できよう。

炉は、中央奥寄りに存在する。方形の掘方を持つもので、一部に焼けた炉縁石が残る。しかし、焼上はまったく認められなかった。

埋甕は、炉の南、約2m離れたところに設けられている。底部を残したものと正位に埋設しており、北側上方には掘方埋土中に円環を埋め込んでいる。さらに上部には平石が認められるが、これについては、本来床面上に位置していた可能性がある。

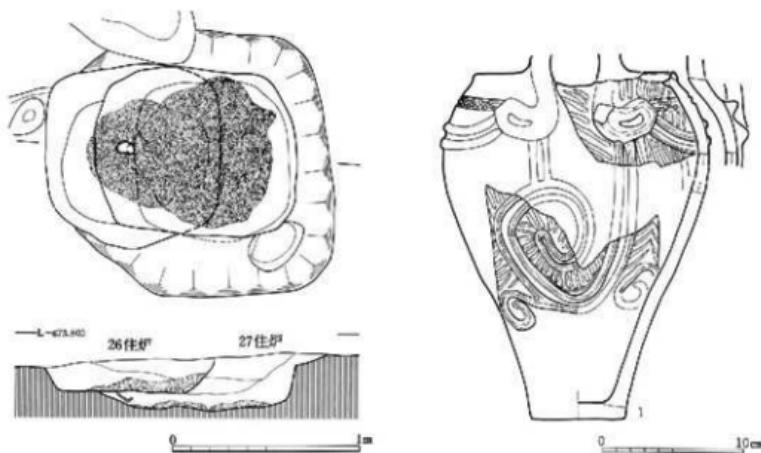
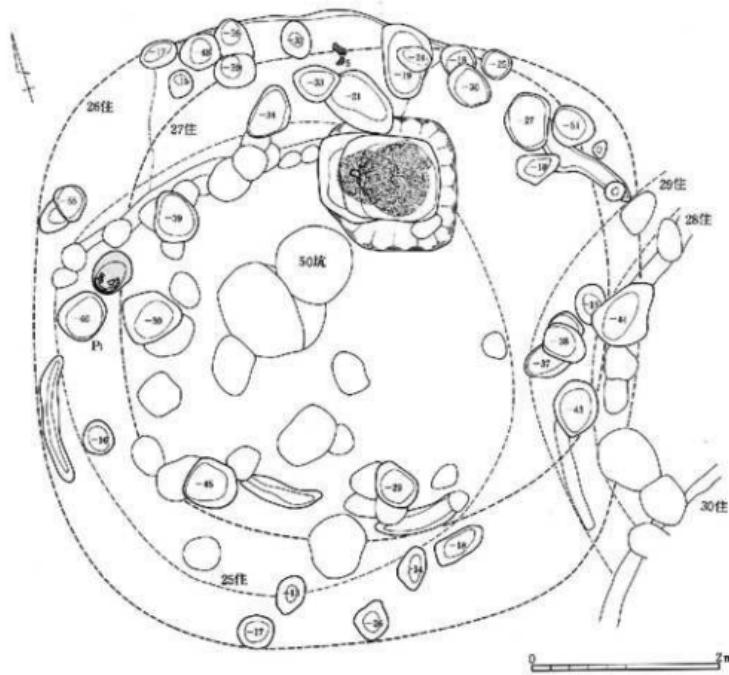
出土遺物は微量である。1が埋甕として用いられたものであり、2~6が床面、7・8が炉から出土している。9の磨製石斧はP1坑底から出土したもので、確実に本址に帰属するとはいえない。5点の上器の内、1~3は加曾利E式、4は圧痕隠帯文系土器と思われるが地文に朱線を用いたものであり、これらは四日市第4段階に位置付く。5のみが後期初頭、称名寺I式に比定される。

26・27号住居址（第47・48図）

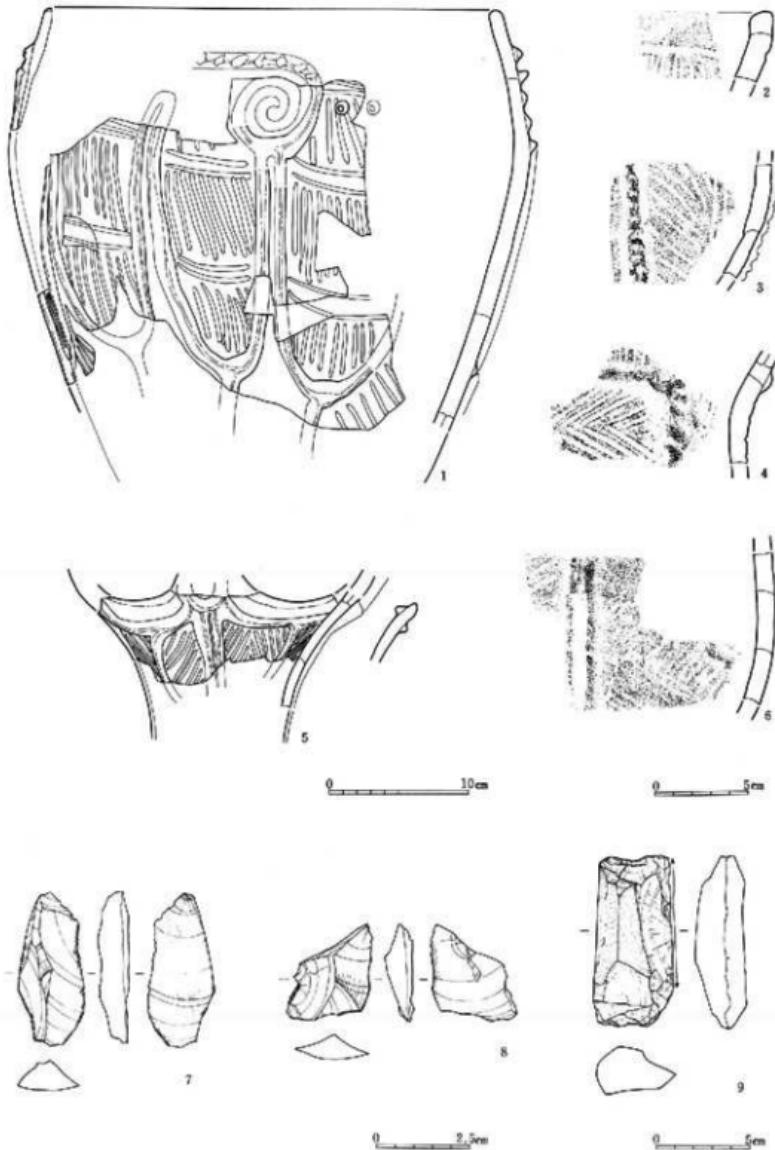
さー8・9グリッド、斜面部に位置し、25・28・29号住と絡む。切り合う炉を検出したことで当初から2軒の重複を考えていたが、両住居は25号住とともにまるまる重複していることから、それぞれを認定するのに困難を來した。北側の一部で壁・床が遺存するが、これと新しい側の炉とがセットになると考え、さらに柱穴の周り共合も考慮して2軒の住居プランを図のように割り出した。26号住が新、27号住が古である。また、埋甕は1基のみの検出であったが、27号住炉から出土した土器と対比してこれを26号住に帰属させた。

26号住は、主軸長6.8m・副軸長6.3m程度の比較的大形の住居であると想定した。25号住に切られながらも、北側に壁と床をわずかに残している。壁高は最大でも5cm、また床はローム面をそのまま利用するもので特に硬化した部分はない。炉は方形の掘方を呈し、深さは18cmを測る。厚く焼上が堆積していた。埋甕は、出入口部に設けられたものであろう。正位に埋設している様子を看取したが、遺存状況は良好でない。遺物は、1が埋甕であり、2・3・5が床面、4・6・7・9が炉、8がP1から出土した。上器の内、1は胴の張る唐草文系土器に共通する器形を呈するが、文様・モチーフには在地的な要素を色濃くもつ。5も唐草文系土器と思われるが、それに特徴的な器形・モチーフを呈す。ともに四日市第2段階の中でも新しい時期の所産であろう。

27号住は、一辺が5.3m程度の住居と想定した。壁と床は完全に欠失している。炉は長方形の掘方を呈し、現存高で28cmの深さを測る。火床全体が顯著に焼けていた。周辺のなだらかな傾斜は本炉址に付随するものと考えられる。第47図-1が炉内に遺存していた。四日市第1段階に位置づけられる唐草文系土器である。



第47図 26・27号住居址実測図及び27号住居址出土土器実測図



第48図 26号住居址出土遺物実測図及び拓影

28・29号住居址（第49図）

さー9・10グリッド、斜面部に位置し、西側で26・27・30号住と重複する。両住居とも壁・床を欠失する。2基の炉、及びその北側で二重に取り巻く周溝・ピットを検出したことにより、同心円状に切り合う2軒の住居を想定した。内を28号住、外を29号住としたが、炉址の帰属は不明である。また斜面に占地することから、出入口部と考えられる南側は大きく削られており、深い柱穴がわずかに遺存するだけであった。したがって、プラン・規模等は不明である。

炉は、南北に重複して存在する。南側のものがより深く、かつ新しい。これには焼土を認めることができなかつたが、焼けた礫が遺存していた。北側の炉には厚く焼土が堆積しており、掘方埋土及び縁石の一部も確認した。

遺物は、すべて南側の炉から出土している。1は口縁下に隆線をめぐらす深鉢形土器であり、直立する口縁から丸みを帯びつつ胴下半へ移行する。四日市第4段階からそれに後続する時期にかけての所産であろう。

30号住居址（第50図）

しー9・10グリッドに位置し、東側で28・29号住と重複する。周溝と床の一部が遺存するが、傾斜のきつい斜面に占地することから南半は大きく削られており、出入口部埋土も既にない。周溝の状況から方形に近いプランが予想され、また規模は東西軸で約4.3mを測る。

周溝は、幅約20cm、深さ5~10cmを以て途切れなく周り、内に小ピット（P1~P4）を点在させている。

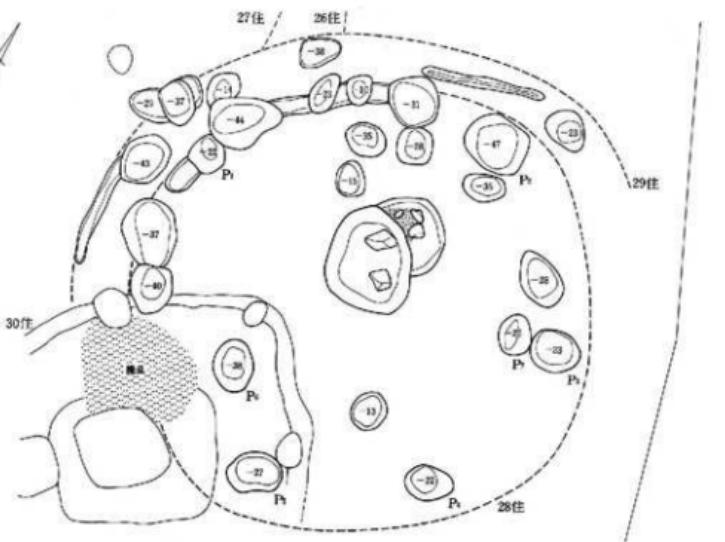
床は、炉から北壁にかけて残存する。ほぼ平坦に仕上げられている。堅鐵面ではなく、ローム上面をそのまま床としていた。

炉は、中央奥寄りに位置するものであろう。深さ約28cm、方形の掘方を呈し、縁石などは認められない。火床はおおむね平坦で、北側にのみ焼土が堆積していた。周囲が浅く皿状に盛り上がり、炉に付随するものだろう。

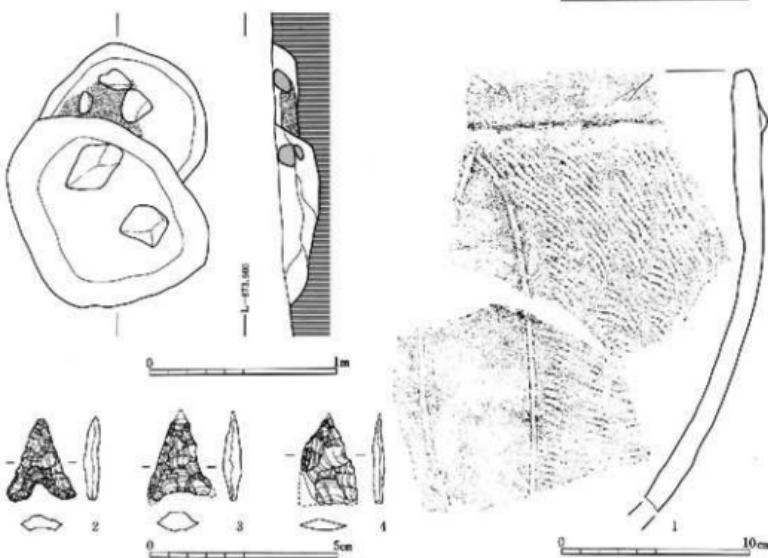
遺物は、提示したこの3点以外出土していない。1がP8、2が床上、3が炉覆土中から出土した。1は唐草文系土器の口縁部破片。溝巻状の隆帶文を横位に連続した口縁部文様帶を有し、区画内に連続交互刺突文を加えている。2は加曾利E式土器。とともに四日市第1段階の土器である。

31・32号住居址（第51図）

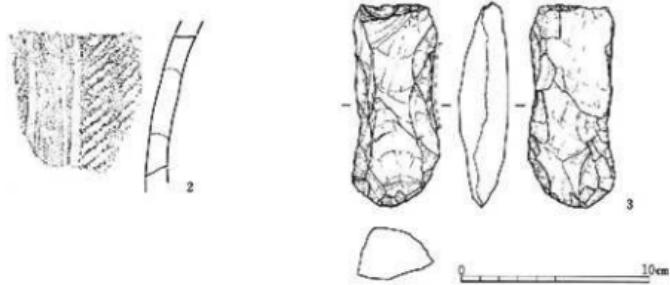
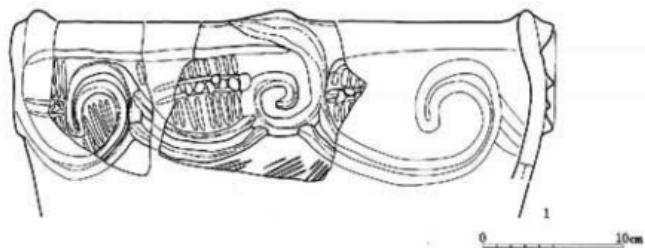
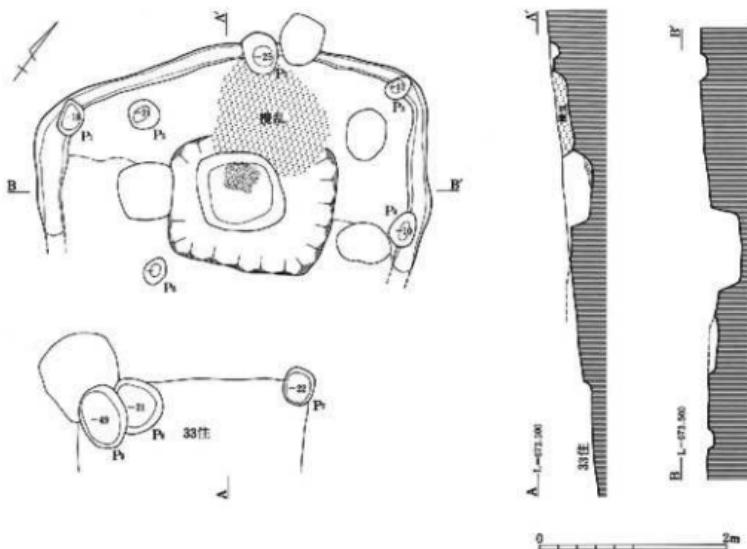
しーすー7グリッド、最も傾斜のきつい斜面に位置する。切り合う2基の炉址を検出したことで2軒の住居を想定したが、壁・床を完全に欠失していることから、周囲をめぐる柱穴の位置関係及びそれらと炉の組み合わせは判断できない。したがって、とりあえずより新しい炉を帰属さ



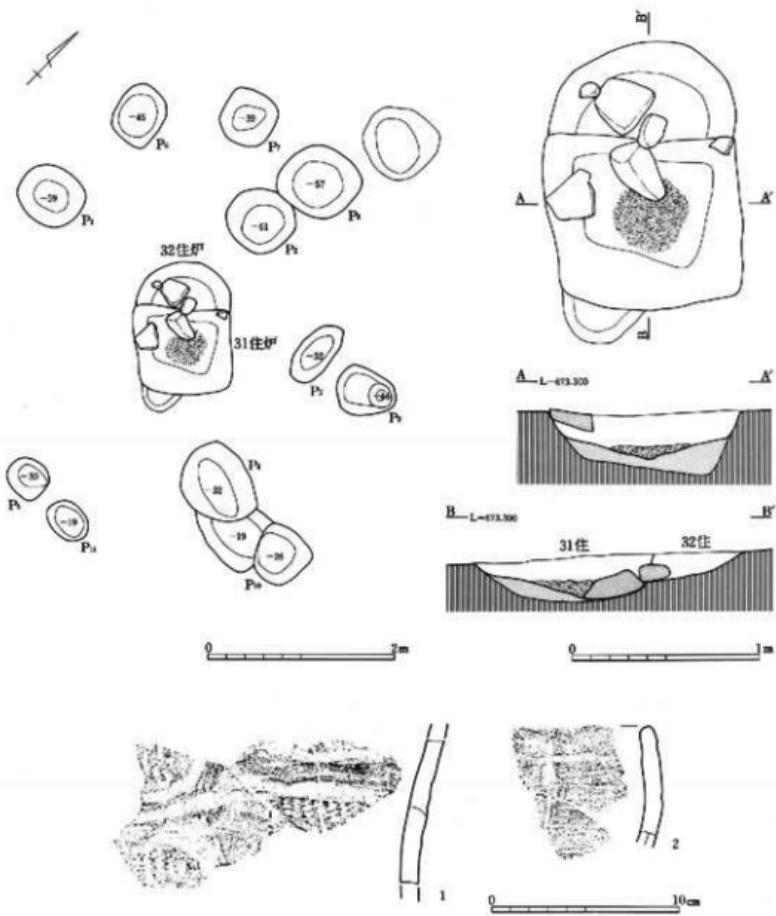
0 2m



第49図 28・29号住居址実測図及び出土遺物実測図



第50図 30号住居址実測図及び出土遺物実測図・拓影



第51図 31・32号住居址実測図及び31号住居址出土土器拓影

せる住居を31号住、古い方を32号住と命名した。

炉は東西に重複し、31号住とした南側のものが、より深く新しい。31号住の炉は、方形の掘方を呈し、深さは最大20cmを測る。32号住のものは北半のみが遺存している。ともに焼けた礫を含んでいるが、焼土は31号住だけに認められた。

遺物は、31号住の炉から土器2片が出土している。1は幅広の浅い沈線により、「U」字状、逆

「U」字状の文様が構成される。2は無文の口縁部破片。四日市第3段階に比定されよう。

第2表 織文時代中期後葉の住居址内出土石器観察表

団-No	出土遺構	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
13-17	3号住	打製石斧	II a	18.1	9.0	3.7	582	完形	玄武岩
-18	"	"	I b	15.0	6.0	2.6	220	"	"
16-13	5号住	剥片石器	II b	1.7	1.8	0.5	1.4	"	黒曜石
-14	"	石棒	II	2.3	1.4	0.9	2.1	"	"
-15	"	打製石斧	I a	(10.6)	5.0	1.7	(124)	上一部欠	玄武岩
-16	"	"	?	(7.3)	(5.7)	(2.2)	(81)	上下欠	"
-17	"	磨製石斧	定	9.6	5.5	2.1	(161)	ほぼ完形	"
-18	"	輕石製品		12.0	8.0	2.5	(148)	一部欠	輕石
19	"	磨石		16.8	11.4	8.7	2770	完形	玄武岩
-20	"	峰の巣石		21.5	16.8	13.5	5121	"	"
17-21	"	丸石		18.0	16.7	11.0	5062	"	輝石安山岩
-22	"	"		18.2	14.2	12.7	4650	"	斑駁岩
23	"	テウスク		3.0	3.0	1.4	13.4	"	赤色チャート
-24	"	剥片石器	I b	5.7	3.2	1.7	16.1	"	黒曜石
-25	"	スクレイ		2.8	5.1	1.2	12.5	"	メノウ
-26	"	ビエス		2.2	3.2	1.1	5.9	"	黒曜石
-27	"	石棒	II	4.0	2.5	1.1	13.4	"	"
18-28	"	打製石斧	I b	18.9	6.9	2.7	280	"	玄武岩
-29	"	"	"	12.3	6.0	2.7	192	"	"
-30	"	"	I a	12.0	4.4	2.1	98	"	"
-31	"	"	I b	10.8	5.5	2.2	129	"	"
-32	"	"	I c	(11.8)	4.5	1.7	(90)	上一部欠	"
20-6	6号住	剥片石器	II a	(1.5)	(1.4)	(0.5)	(0.7)	一部残	黒曜石
-7	"	打製石斧	I b	(7.9)	(5.0)	(1.5)	(52)	上1/3欠	玄武岩
-8	"	石棒		(13.4)	(13.5)	(12.0)	(3550)	一部残	花崗岩
22-4	7号住	打製石斧	I a	10.9	4.6	2.5	118	完形	玄武岩
-5	"	圓石		10.8	9.9	5.7	701	"	輝石安山岩
24-8	8号住	剥片石器	II a	2.5	1.7	0.5	1.3	"	黒曜石
-9	"	峰の巣石		(12.6)	(14.3)	(9.2)	(899)	一部残	角閃石安山岩
-10	"	磨石		12.8	10.1	8.0	1655	完形	玄武岩
28-5	12号住	剥片石器	I a	2.1	1.7	0.6	1.6	"	黒曜石
-6	"	打製石斧	I b	5.8	3.8	1.3	26	"	玄武岩
7	"	"	"	(10.0)	5.0	2.7	(129)	上1/4欠	"
-8	"	"	II a	12.5	5.6	2.2	161	完形	"
9	"	磨石		16.4	12.3	8.2	1960	"	輝石安山岩
30-7	13号住	石礫	平基	2.1	1.5	0.4	1.0	"	黒曜石
8	"	石匙		3.7	2.2	0.7	4.2	"	"
-9	"	ビエス		2.0	2.1	1.2	4.0	"	"
10	"	圓石		13.8	8.0	4.3	532	"	輝石安山岩
-11	"	"		13.1	9.2	5.4	837	"	角閃石輝石安山岩
32-1	18号住	剥片石器	I b	2.7	1.5	0.9	2.0	"	黒曜石
-2	"	ビエス		2.7	1.9	0.9	4.2	"	"

図 No	出土遺構	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
33-5	19号住	スクレイ		1.3	1.4	0.6	1.0	"	"
-6	"	剥片石器	I b	2.4	2.0	0.9	4.1	"	"
-7	"	"	"	2.4	1.6	0.4	0.9	"	"
-8	"	"	II b	1.3	2.1	0.6	1.4	"	"
-9	"	打製石斧	I a	11.5	5.8	3.3	280	"	玄武岩
34-3	20号住	剥片石器	"	1.3	1.2	0.3	0.2	"	黒曜石
-4	"	石核	III	1.8	2.5	1.1	6.2	"	"
40-9	23号住	石鎌	凹基	3.0	2.9	0.5	1.8	"	メノウ
-10	"	"	?	(3.4)	(2.2)	(0.5)	(2.3)	脚部欠	黒曜石
-11	"	"	凹基	(2.5)	(1.6)	0.5	(1.6)	脚一方欠	"
12	"	"	"	(2.6)	(2.0)	0.9	(2.8)	"	"
-13	"	"	"	(2.0)	(1.4)	0.4	(0.8)	"	"
-14	"	"	"	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.4)	脚一部欠	"
-15	"	"	"	1.7	1.3	0.5	0.6	完 形	"
-16	"	"	"	1.7	1.3	0.4	0.9	"	"
-17	"	"	"	(1.6)	(1.6)	0.4	(0.6)	脚一部欠	"
-18	"	"	尖基	1.9	0.9	0.4	0.5	完 形	"
19	"	"	凸基	2.2	1.1	0.6	1.3	"	"
-20	"	"	"	2.6	1.3	0.7	2.4	"	"
-21	"	剥片石器	I a	2.0	3.8	1.6	7.0	"	"
-22	"	"	"	3.1	1.2	0.8	1.7	"	"
-23	"	"	"	2.3	1.6	0.7	1.4	"	"
-24	"	"	I b	2.7	1.3	0.5	1.2	"	"
-25	"	"	"	4.2	1.4	0.7	3.5	"	"
-26	"	"	"	2.6	1.2	0.5	1.2	"	"
-27	"	"	"	3.1	1.9	0.7	3.5	"	"
-28	"	"	"	1.8	1.1	0.4	0.6	"	"
-29	"	"	"	3.2	2.0	1.1	2.8	"	"
-30	"	"	"	1.9	2.3	0.6	1.9	"	"
-31	"	"	"	1.7	1.6	0.6	1.0	"	"
-32	"	"	II a	1.8	2.0	0.5	1.2	"	"
41-33	"	打製石斧	I b	6.6	3.9	1.5	35	"	玄武岩
-34	"	"	"	(8.5)	4.2	2.0	(82)	上一部欠	"
-35	"	"	"	9.7	4.1	1.8	59	完 形	"
-36	"	"	"	9.2	4.1	1.7	60	"	"
-37	"	"	"	9.8	4.4	1.5	74	"	"
-38	"	"	III b	(11.2)	7.3	1.5	(113)	上1/3欠	"
39	"	"	I c	(11.3)	4.8	2.3	(130)	上一部欠	"
-40	"	"	I b	9.8	4.9	2.4	(112)	一部欠	"
-41	"	"	"	11.0	3.9	2.1	96	完 形	"
-42	"	"	II a	(9.7)	(5.7)	(1.4)	(80)	上1/3欠	"
-43	"	"	III a	(11.7)	4.0	2.3	(119)	一部欠	"
-44	"	"	"	10.4	4.7	2.2	130	完 形	"
42-45	"	砾石器		9.0	10.7	4.7	504	"	"
-46	"	磨製石斧	定	(18.3)	(5.0)	2.8	(321)	刃一部欠	輝緑岩
-47	"	磨 石		8.9	7.0	6.2	536	完 形	輝石安山岩
-48	"	四 石		9.9	7.7	4.2	413	"	"

図 - №	出土遺構	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
42-49	23号住	圓 石		11.5	9.2	4.0	652	"	角閃石安山岩
-50	"	峰の巣石		22.6	19.5	8.5	6210	"	"
-51	"	丸 石		15.3	13.5	9.0	2552	"	斑紋岩
44- 3	24号住	剥片石器	I a	4.4	3.3	1.0	11.7	"	黒曜石
- 4	"	"	I b	3.1	2.1	0.8	3.0	"	"
- 5	"	"	"	3.4	1.2	1.0	2.7	"	メノウ
- 6	"	打製石斧	I a	(9.2)	(4.6)	(2.2)	(145)	上1/3欠	玄武岩
46- 6	25号住	石 鐵	凹基	(2.2)	1.6	0.4	(0.8)	一部欠	黒曜石
- 7	"	剥片石器	II b	1.6	2.2	0.6	1.8	完 形	"
- 8	"	"	I a	4.6	3.5	1.1	13.0	"	"
- 9	"	磨製石斧	定	(10.8)	(5.0)	2.5	(251)	刃1/4欠	緑泥片岩
48- 7	26号住	剥片石器	I b	4.2	1.8	0.9	4.5	完 形	黒曜石
- 8	"	"	"	2.6	2.3	0.7	2.5	"	"
- 9	"	打製石斧	I a	9.1	4.4	2.7	115	"	玄武岩
49- 2	28・29住	石 鐵	凹基	2.2	1.8	0.4	0.8	"	黒曜石
- 3	"	"	"	(2.2)	(1.7)	0.5	(1.2)	一部欠	"
- 4	"	"	平基	(2.3)	(1.5)	0.3	(0.8)	脚・方欠	"
50- 3	30号住	打製石斧	I c	10.8	4.7	2.7	154	完 形	玄武岩

② 土坑

該期の遺物を伴出した土坑は、計59基を数える。しかし前記したように、検出した土坑のはほとんどが、実際には当該期の所産である可能性が高いと考えられる。本米ならば、分類を通してそれぞれの特徴を抽出し、さらに分布にまで目をやらなければならないところだが、時間及び紙数の制約から、ここでは特殊な土坑を提示するに留める。これについての批判は甘んじて受けたいが、出土遺物については極力提示するよう努めた。なお、遺構と遺物は個別に記述する。

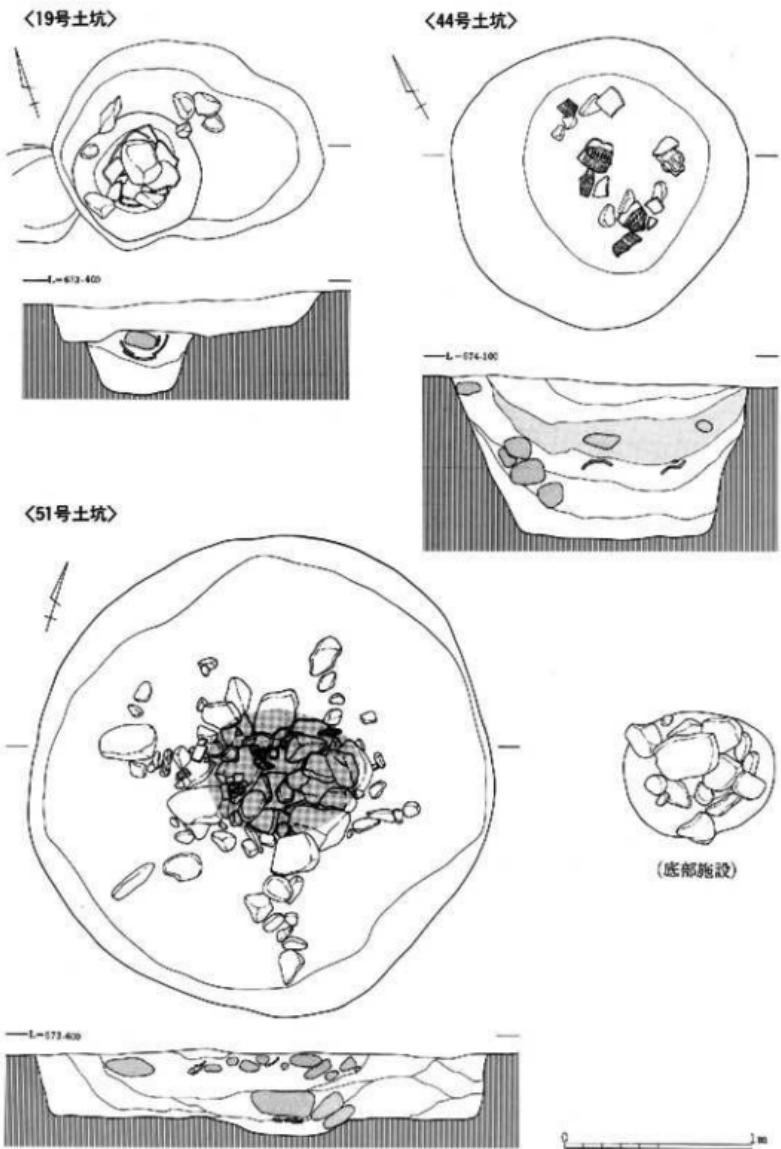
ア 遺構 (第52・53回)

19号土坑

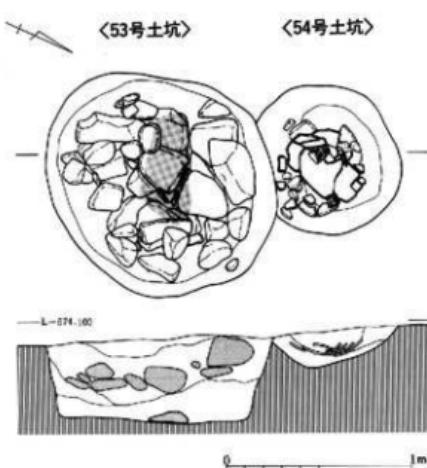
お-7グリッドに位置し、時期不明の浅い土坑下に存在する。径65cm前後の不整円形を呈し、深さは遺存高で35cmを測る。2層に分層できたが、その上層に火形土器破片を二重～三重敷き並べ、さらにその直上に礫を置いている。土器5個体のそれぞれ一部を利用しており、またすべて内側を上方に向けていた。焼土はなく土器も焼けていない。したがって、土器敷き炉の可能性はない。

44号土坑

く-10グリッドに位置する。径約1.5m、深さ90cmを測る大形の土坑である。埋土は、6層に分層でき三角堆積を基本とするものであるが、中層にロームブロック主体上が堆積しており(岡アミ部)、人为的に埋め戻された可能性も考えられる。礫が全体に入り込んでいたが、特に火形のものが坑底近くに多く認められた。また両耳広口壺1/2個体分が覆土中層に散在していた。



第52図 繩文時代中期後葉の土坑実測図(1)



第53図 繩文時代中期後葉の土坑実測図(2)

底はほぼ平坦に仕上げられているが、中央に径70~80cm、深さ10cmの小坑を設けている。その上面には底部を欠いた小形の深鉢形土器（第57図-12）を横位に置き、さらに上方を疊で覆っている様子がうかがえた。

53号土坑

く-8グリッドに位置する。径1.2m前後の円形を呈し、深さは最大で47cmを測る。中層全体に大形の疊を密に詰め込み、また坑底中央に長大な疊を置いていた。

54号土坑

く-8グリッドに位置し、南端を53号土坑によって切られている。径約80cmの円形を呈し、深さは10~20cmを測る。坑底に凹凸はないが南に大きく傾斜している。坑底そばに折り重なる土器を検出したが、これには大形の深鉢形土器の胸上半1/2程が使われていた。基本的には土器内面を上方に向け、皿状になるように割り敷いたのだろう。焼土は皆無であり、器面も二次焼成を受けた痕跡がない。少なくとも土器敷き炉ではなさそうだ。

イ 遺物（第54~73図）

1号土坑 (1~3・177~185・221~223・226)

土器3個体を提示したが、1・3が坑底より、2が覆土中より出土したものである。1は一对の把手をもつ深鉢形土器。沈線により区画された繩文帯により、渦巻状のモチーフを中心とする文様が施される。3は大きく内湾する4単位の波状口縁をなし、文様は隆起線により器面を縱方

なお、本址の形態及び埋土堆積状況は、晩期末葉前後の47号土坑に近似する。事実、最上層から当該期の遺物の出土をみたが、両耳広口壺の出土により中期末葉に位置づけるを得ず、晩期末葉前後の遺物については帰属する造構の見落としと考えた。しかし、晩期末葉前後の所産である可能性も、なお充分に残っている。

51号土坑

く-7グリッド、やや傾斜のきつい斜面に位置する。径2.5m前後の大形の土坑で、むしろ「小豊穴」と称したほうが適切かもしれない。

深さは、現存高で約35cmを残す。覆土最上層には疊と土器を多量に認めた。坑

向に分割する。2を含め、すべて四日市第4段階の土器である。他に、打製石斧9、磨製石斧1、磨石2、凹石1を図示した。

2号土坑 (16・17)

土器破片2が覆土中より出土した。ともに四日市第4段階に比定される加曾利E式土器。

3号土坑 (18~24・186・224)

土器はすべて加曾利E式土器である。18・23・24は隆起線により、19~22は沈線によりモチーフが描かれる。四日市第4段階に相当する。他に打製石斧1・磨石1を提示した。

5号土坑 (25・26)

25は口縁下に丘頂隆帯文をめぐらす波状口縁の土器。26は垂下する隆起線を境に縄文帯と無文帯を交互に配す。ともに四日市第4段階の土器であろう。これ以外に出土遺物はない。

6号土坑 (27・28・187・188)

27・28はともに加曾利E式(系)土器であり、四日市第3段階に比定される。打製石斧2点が伴出している。

7号土坑 (29・30)

覆土中からの出土である。29は幅広の沈線により、30は細い沈線により文様を構成する。四日市第3段階から四日市第4段階にかけての土器である。

8号土坑 (31~38・189・190)

坑底付近から出土した。31~37は加曾利E式土器、38は唐草文系土器である。33・34・36は同個体。37は広口壺の肩部破片であろう。38は雨垂れ状の短沈線を地文としている。これらは四日市第3段階の中でも新しい時期の所産であろう。他に打製石斧2点を図示した。

9号土坑 (39~46)

土器の破片のみが出土している。39~41は沈線、42~44は隆起線によりモチーフが描かれる。39は条線を地文とする。45・46は条線のみの粗製的な土器。四日市第4段階に比定される。

10号土坑 (47・48)

土器の破片のみが覆土中から出土している。47は沈線区画による曲線的な縄文帯が施されるもの。48は地文に刺突文をもつ土器。47の特徴から四日市第4段階に伴うものと考えられる。

11号土坑 (49・50)

土器の破片のみが覆土中から出土している。ともに四日市第4段階に比定される加曾利E式土器である。

13号土坑 (51・52・192)

51は口縁下に隆起帶をめぐらし、胴部には渦巻状の文様が施される。52も含め、四日市第4段階に比定される。打製石斧1点が共伴している。

14号土坑 (4・175)

坑底から上器 1、石核 1 が出土している。土器は 4 単位の大きな把手をもつ深鉢形上器。口縁下から胸部にかけて横円ないし渦巻状の文様が施され、間を「S」字状の沈線文で埋めている。胸下半は逆「U」字状文と「S」字状沈線文とを交互に配す。四日市第 4 段階に相当する可能性が高い。

15号土坑 (53・54・158)

土器 2 片と剥片石器 1 を提示した。53・54 は同一個体。口縁部文様帯をもつ加曾利 E 式土器であり、四日市第 2 段階に位置づく。

16号土坑 (55・56)

55 は胸部、56 は底部の破片。55 の存在から四日市第 4 段階に比定されよう。

18号土坑 (57~59・151)

57 は崩れた口縁部文様帯を残す土器。59 は唐草文系土器であろう。58 が四日市第 3 段階に伴う土器であることから、57・59 も同第 2 段階から第 3 段階にかけての所産と考えられる。他に石鍬 1 が覆土巾より出土している。

19号土坑 (5~9・60・61・194)

5 ~ 8 は加曾利 E 式土器。6 に口縁部文様帯の名残が認められるほかは、口縁部文様帯を喪失する傾向にある。5 は隆帯の脇に回線様の沈線を伴う。9 は圧痕隆帯文系土器。60 は条線を地文とする大形の土器。61 は唐草文系土器に伴う胸部破片。5 ~ 9 の土器から、四日市第 3 段階に比定される。その他に打製石斧 1 点が伴出している。

20号土坑 (62)

62 の唐草文系土器の胸部破片のみ出土している。四日市第 1 段階から第 2 段階に相当しよう。

21号土坑 (63~65・152)

図示した土器はすべて唐草文系土器。63 は口縁下に幅広の無文帯を有する。時期比定はむづかしいが、四日市第 1 段階ないし第 2 段階に置かれよう。他に石鍬 1 点を提示した。

22号土坑 (66)

小破片 1 点が図示できるのみ。加曾利 E 式 (系) 土器であろう。

23号土坑 (67)

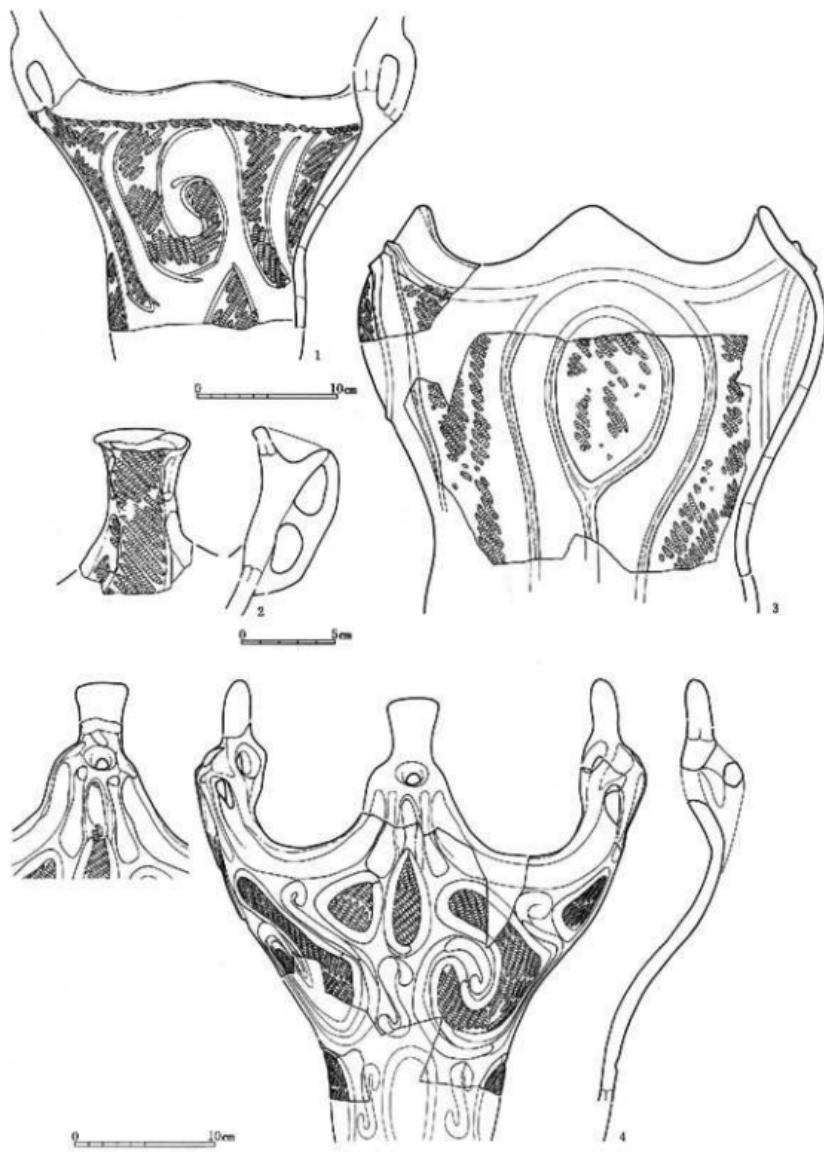
67 は渦巻状文と「S」字状沈線文とが施されるもの。4 に類似する土器であり、四日市第 3 段階に伴う可能性が高い。

24号土坑 (68・69・163)

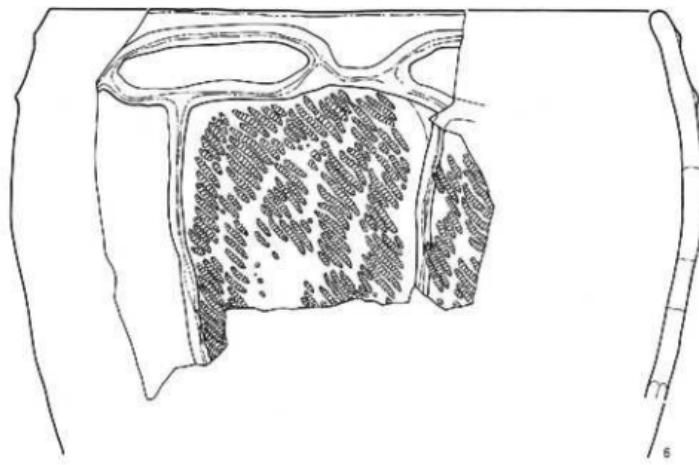
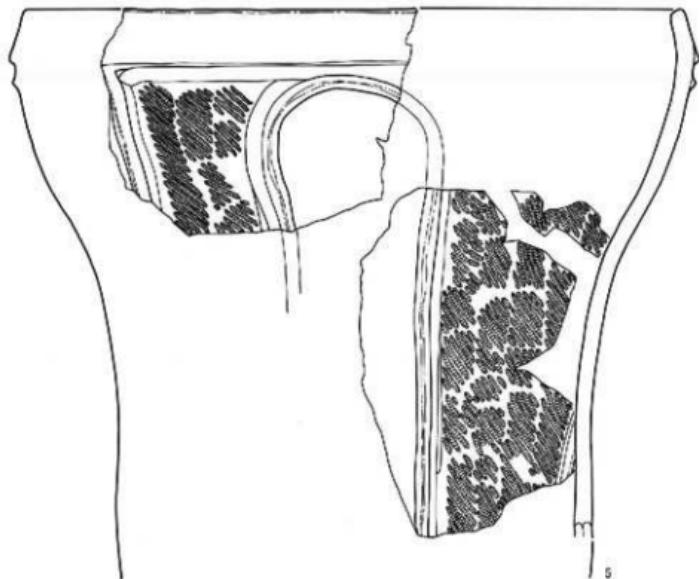
68 は唐草文系土器の口縁部破片、69 は加曾利 E 式土器の一部であろう。68 の口縁下に見られるモチーフから、四日市第 1 段階の土器と考えられる。他に剥片石器 1 点を図示した。

25号土坑 (70・71・191・227)

土器はともに唐草文系土器と思われるが、70 は縄文を地文としている。71 はくびれる頸部を無

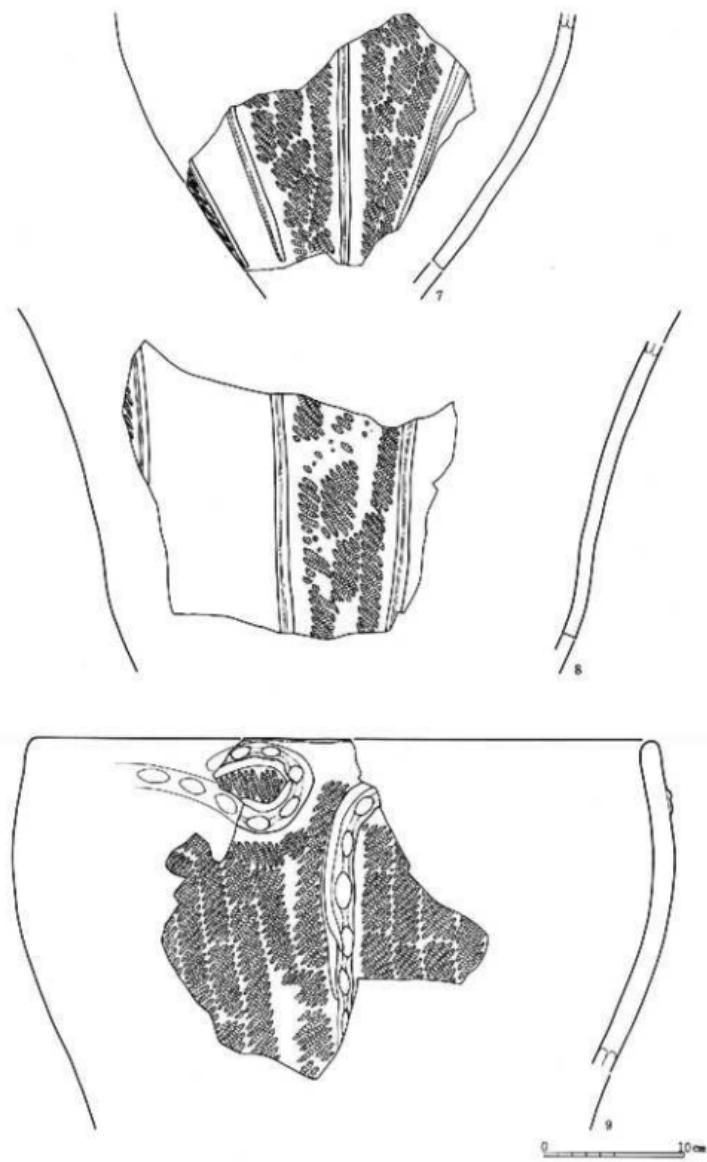


第54図 縄文時代中期後葉の土坑出土土器実測図(1)

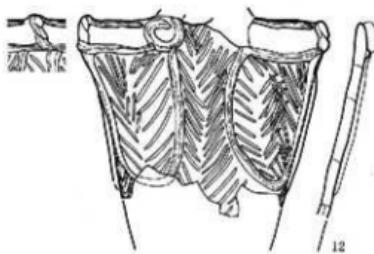
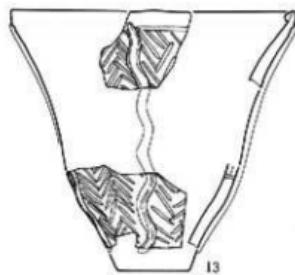
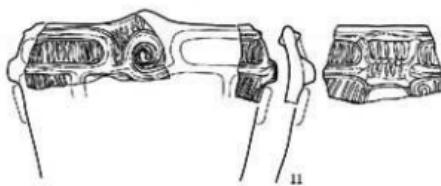
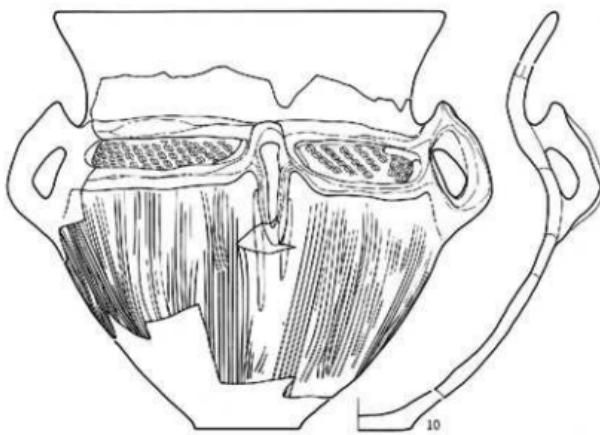


0 10cm

第55図 桶文時代中期後葉の土坑出土土器実測図(2)

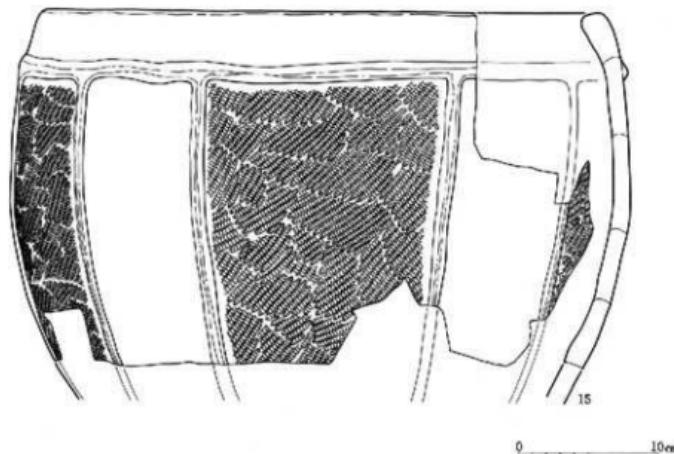


第56図 純文時代中期後葉の土坑出土土器実測図(3)



0 10cm

第57図 縄文時代中期後葉の上坑出土土器実測図(4)



第58図 繩文時代中期後葉の土坑出土土器実測図(5)

文帯として残す。四日市第2段階の所産であろうか。他に打製石斧1、圓石1が出土している。

26号土坑 (72~74・196)

72はラッパ状に聞く把手を有する土器であり、縄文を地文として蕨手状の懸垂文を垂下させる。73・74を含め、四日市第3段階から第4段階にかけての土器と思われる。打製石斧1点が伴出している。

27号土坑 (75~85・153・154・171・172・197~203・229)

覆土中層から出土した。土器はすべて加曾利E式土器によって占められる。75~81は沈線によりモチーフが構成されるもの。82~85は垂下する降起線により器面を分割する。85が条線を地文とするほかは、すべて縄文が施される。文様・モチーフの特徴から、四日市第4段階に比定される。石器は石鏃2、ピエス・エスキュー2、打製石斧7、峰の巣石1を図示した。

28号土坑 (86~90)

土器破片のみが出土した。86・87は加曾利E式、88~90は唐草文系土器であろう。88・89は压痕隆文帯を有しており、第124図-31に好例をみることができる。四日市第4段階に位置づけられる。

29号土坑 (91・92)

91は無文の口縁部破片。92は同様の胴部破片。時期は特定しえない。

30号土坑 (93・204)

唐草文系土器の胴部破片1と打製石斧1が出土したのみ。93は四日市第2段階に含まれよう。

32号土坑 (94)

土器 1 点のみが出土した。唐草文系土器と思われるが判然としない。重層する沈線文と刺突文が施される。

33号土坑 (95・195)

細く弱々しい沈線により「U」字状のモチーフが描かれるもの。縄文は施文されていない。加曾利E式末期の上器であり、四日市第4段階の新しい部分、ないしはそれに後続する時期の所産であろう。打製石斧 1 点が伴出している。

35号土坑 (96・97)

土器破片 2 を提示した。ともに加曾利E式土器。モチーフや幅広の沈線を用いている点などから、四日市第3段階に位置づけられる。

38号土坑 (98・99・160・205)

土器の98は口縁下に連続刺突文をめぐらす。四日市第4段階に比定される。他に剥片石器 1 、打製石斧 1 が出土した。

37号土坑 (100~102)

土器破片のみが出土した。すべて加曾利E式に伴うものであり、四日市第4段階に比定される。

39号土坑 (103・161)

103 は口縁下に隆起線をめぐらすもの。四日市第4段階の土器である。剥片石器 1 が出土した

40号土坑 (104)

山形に突出する口縁頂部下を中心に渦巻状のモチーフを施し、口縁部文様を形成する。胸部懸垂文は上端で連結し、逆「U」字状をなす。四日市第2段階から第3段階にかけての所産である。

41号土坑 (107・108)

土器片 2 が出土した。ともに四日市第4段階に含められる加曾利E式土器である。

42号土坑 (109~114・162・176・206・207)

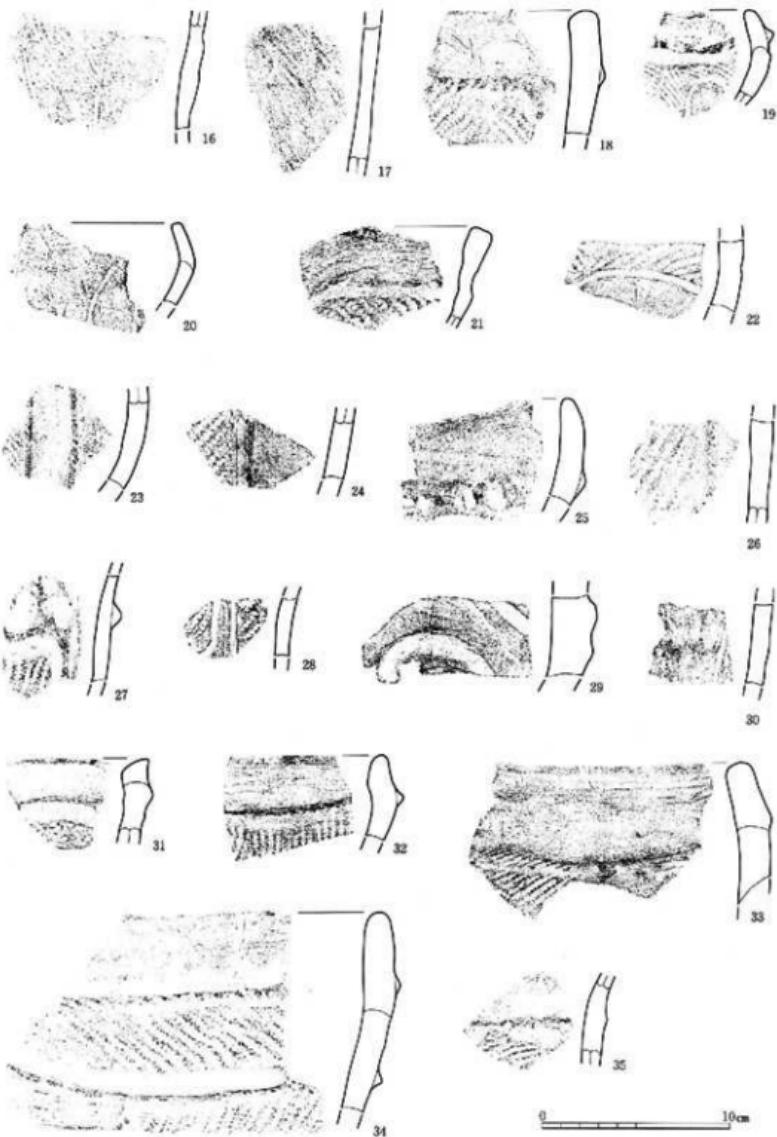
109~113は加曾利E式土器。109~111は沈線文により文様が構成され、112・113は口縁下に隆起線をめぐらす。114はキザミを加えた縦帯文を有する。近頃縦帯文系土器であろうか。すべて四日市第4段階に位置づけられる。他に剥片石器 1 、石核 1 、打製石斧 2 を提示した。

43号土坑 (115・116・208)

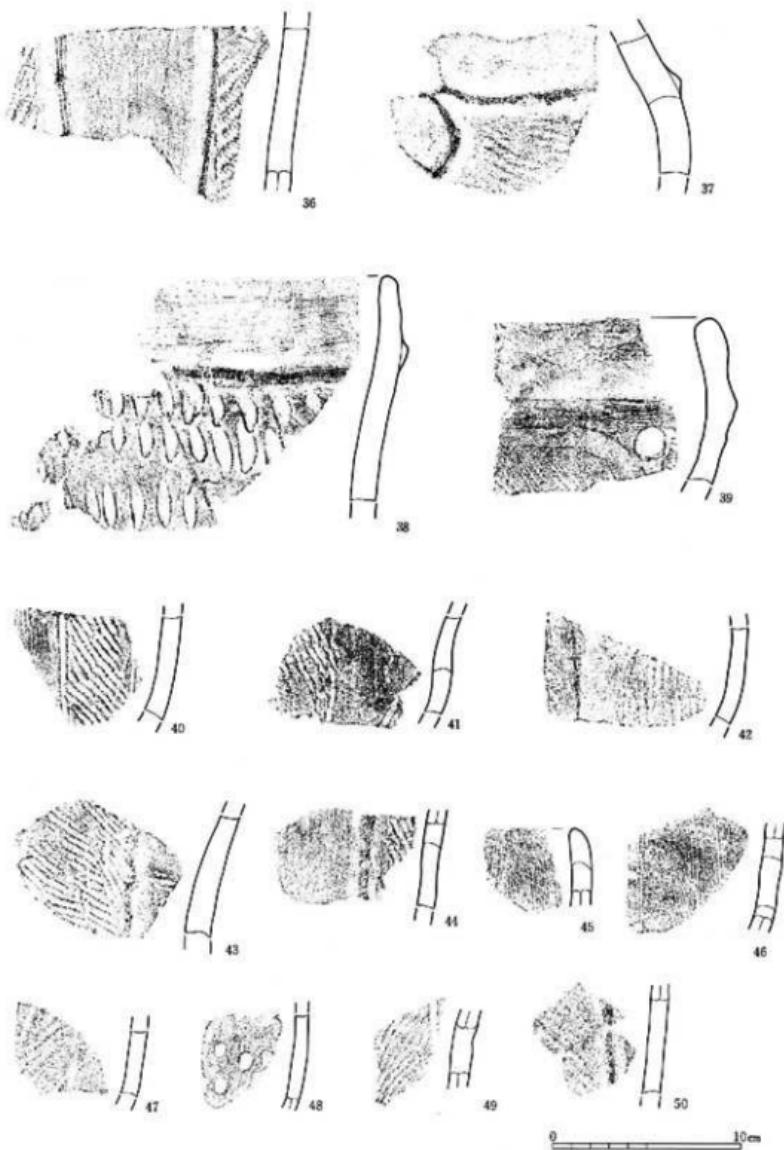
上器破片 2 、打製石斧 1 を図示した。土器はともに四日市第4段階の加曾利E式(系)土器。

44号土坑 (10・156・157・165・209・230)

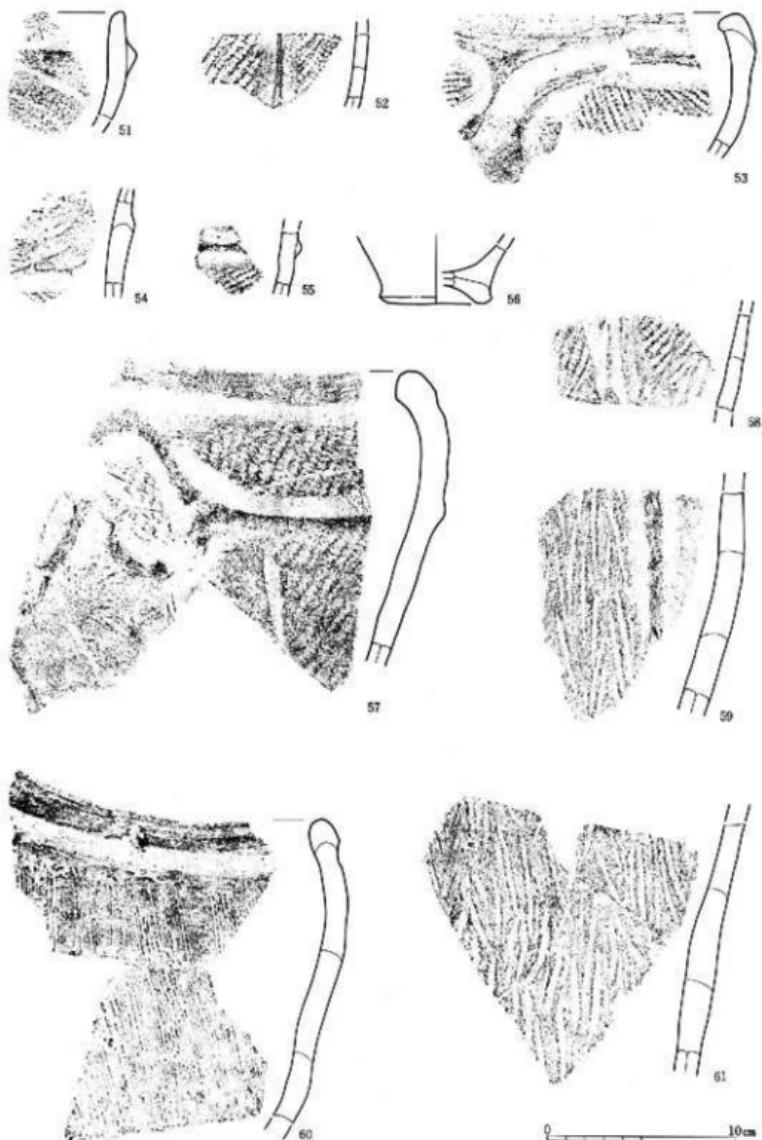
10は両耳広口壺。口縁と底部を欠き、胸部の1/2程が現存する。肩部に横帶する区曲文を有し、[内]内には縄文を、以下胸部には縦位の条線文を施す。四日市第2段階の上器であろう。他に石鏃 1 、石匙 1 、剥片石器 1 、打製石斧 1 、峰の巖石 1 を図示した。土器を含め、すべて覆土中層から出土している。



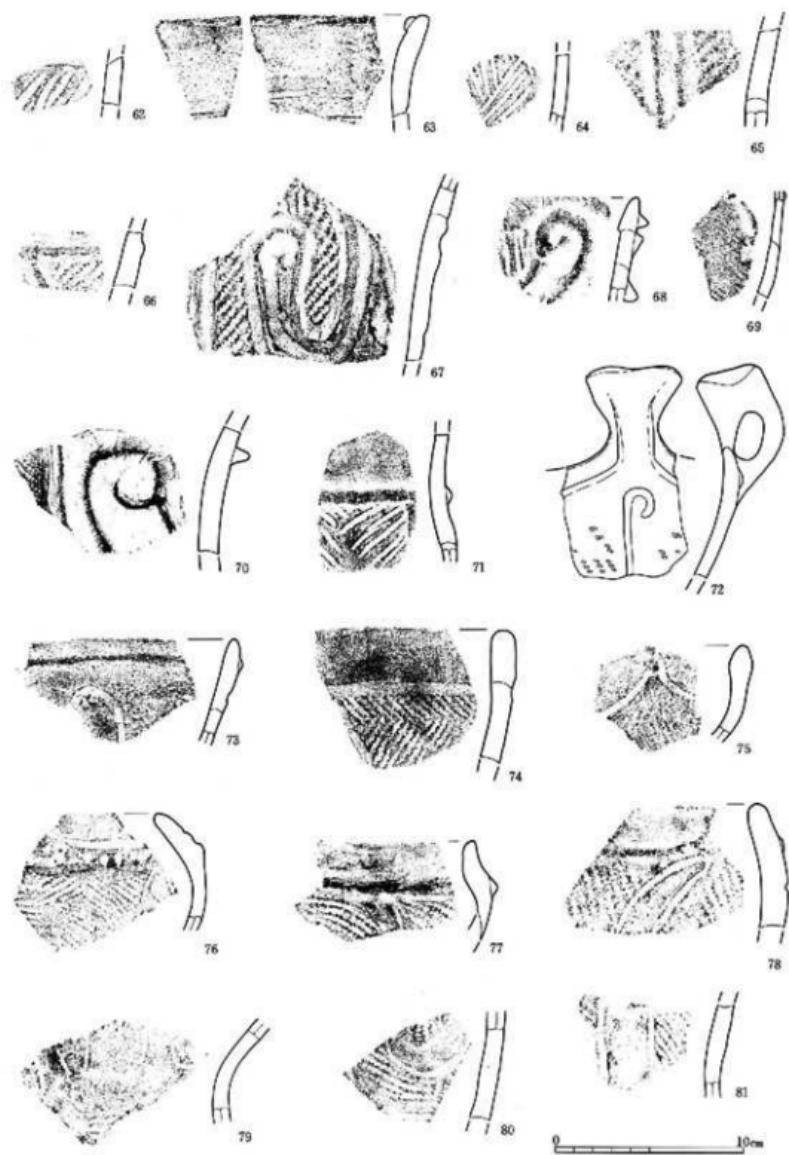
第59図 繩文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(1)



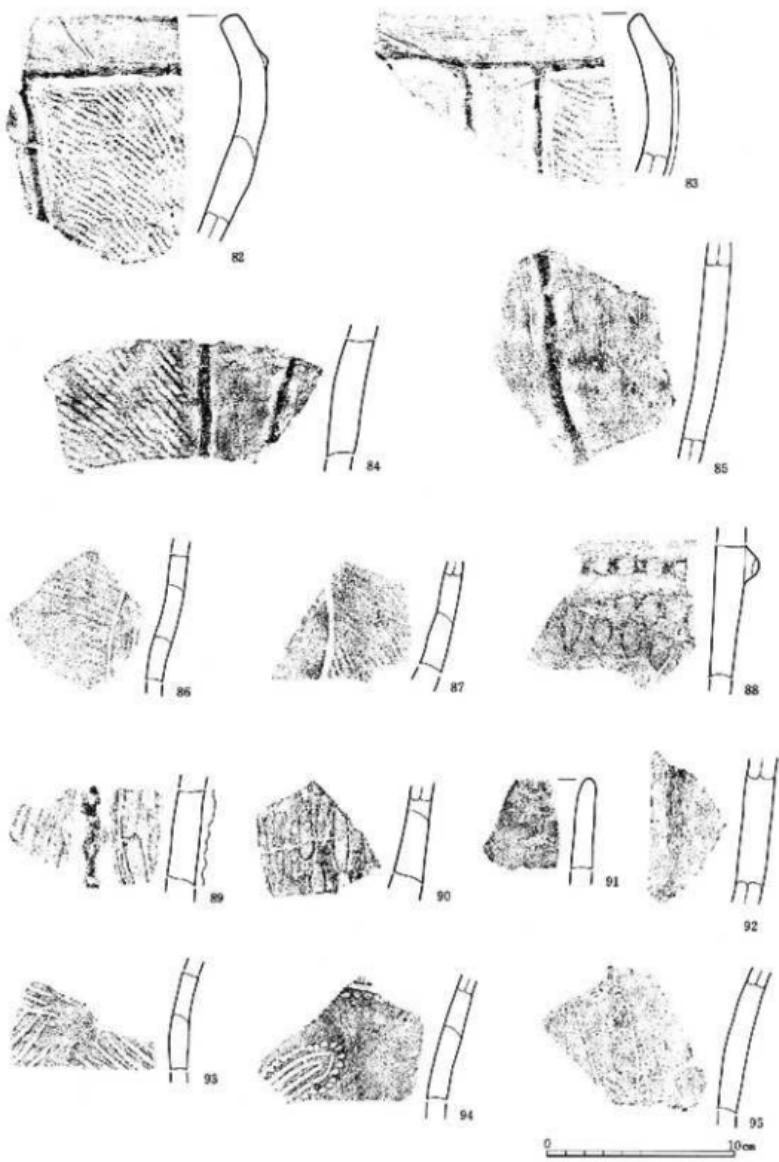
第60図 縄文時代中期後葉の土坑出土土器器形(2)



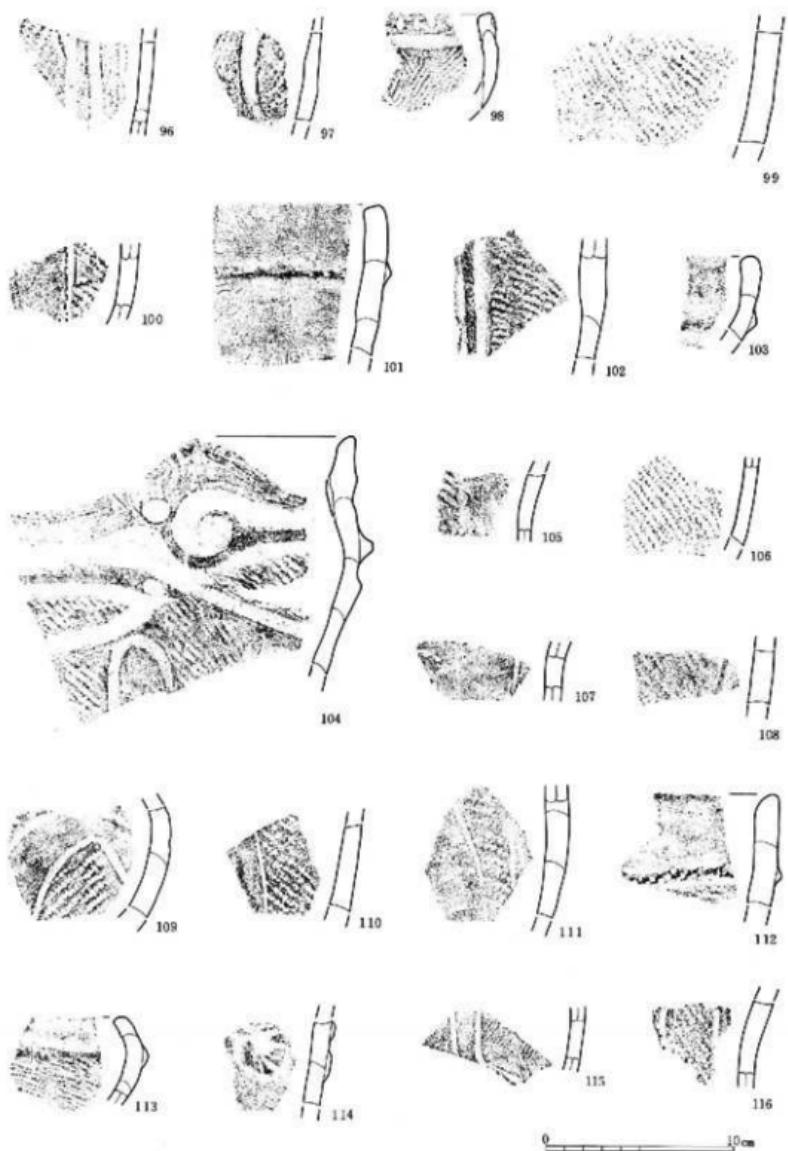
第61図 縄文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(3)



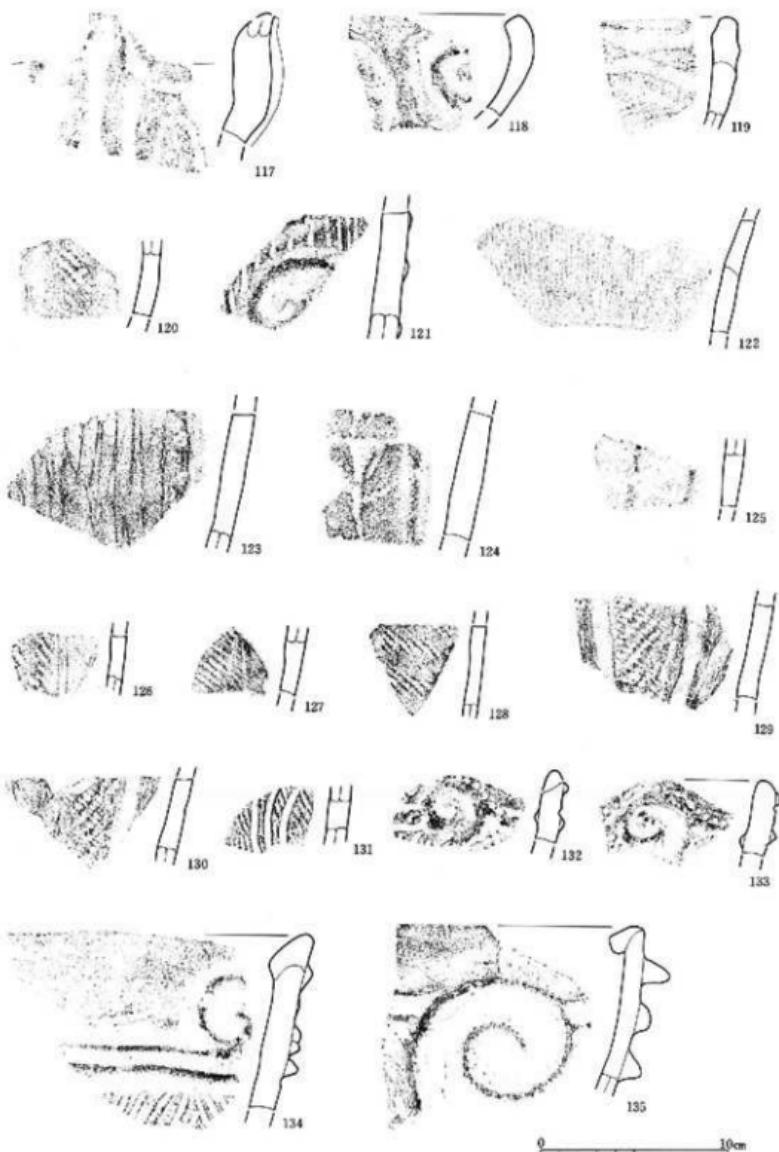
第62図 純文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(4)



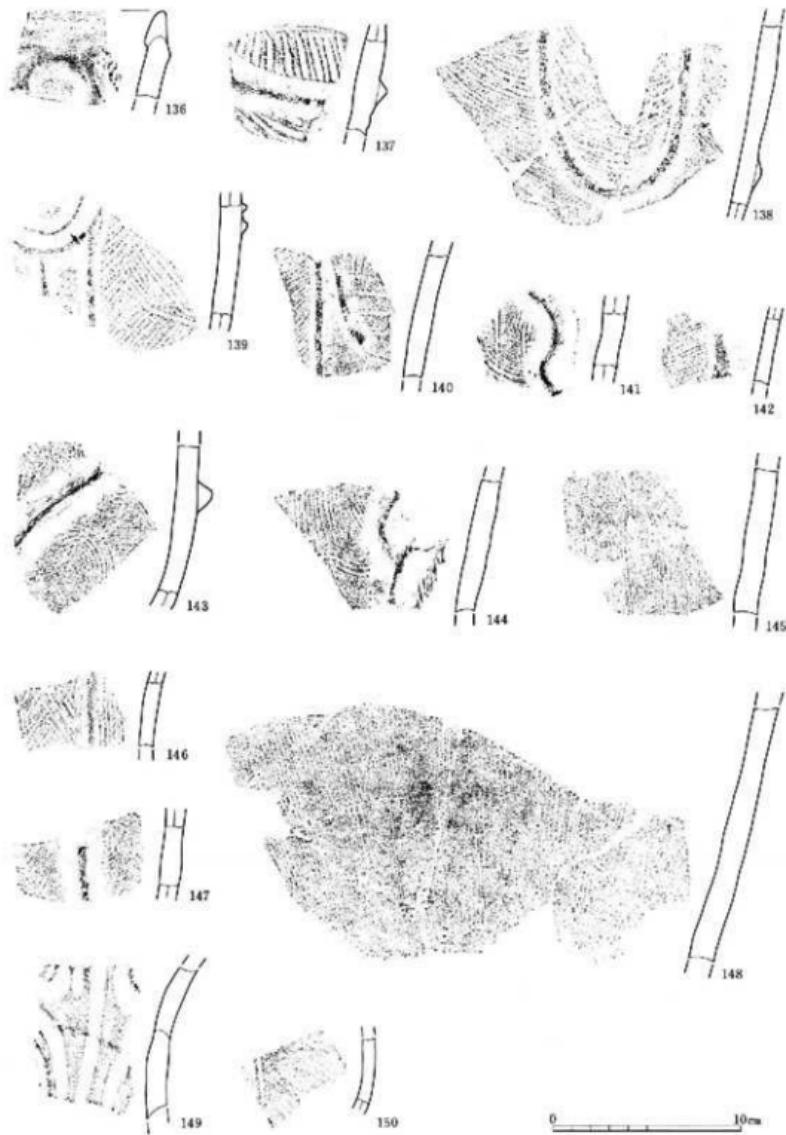
第63図 縄文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(5)



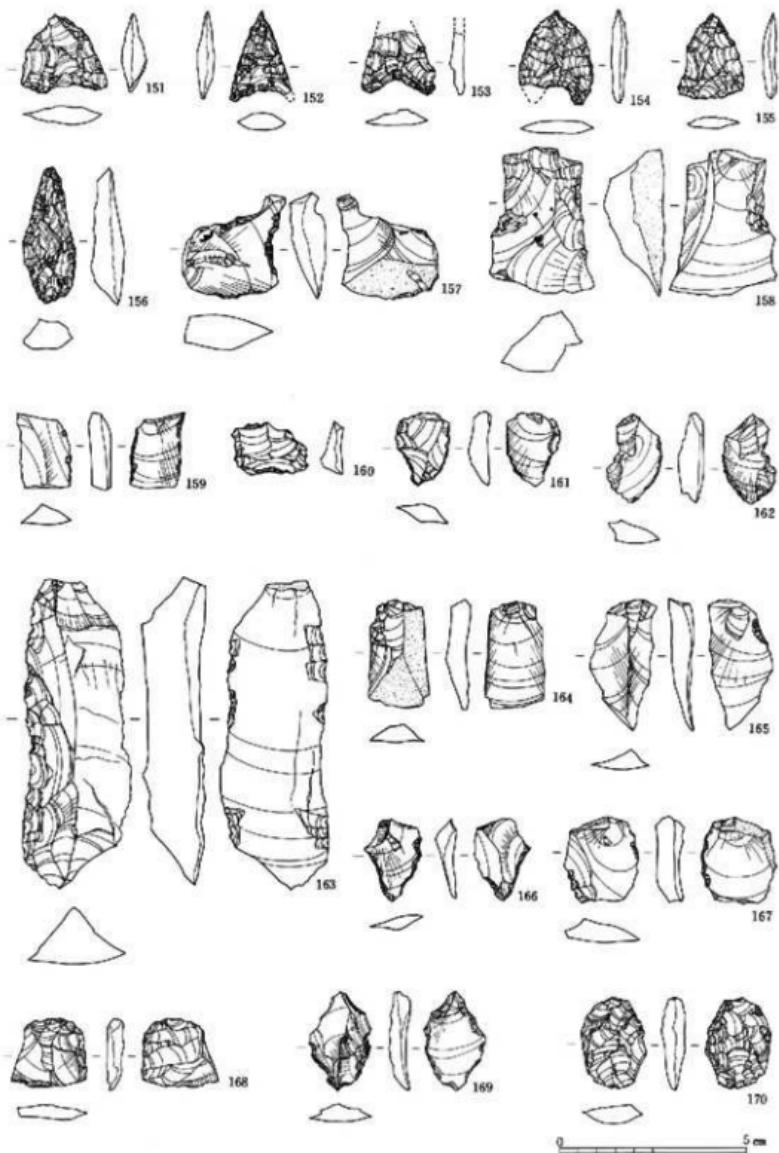
第64図 繩文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(6)



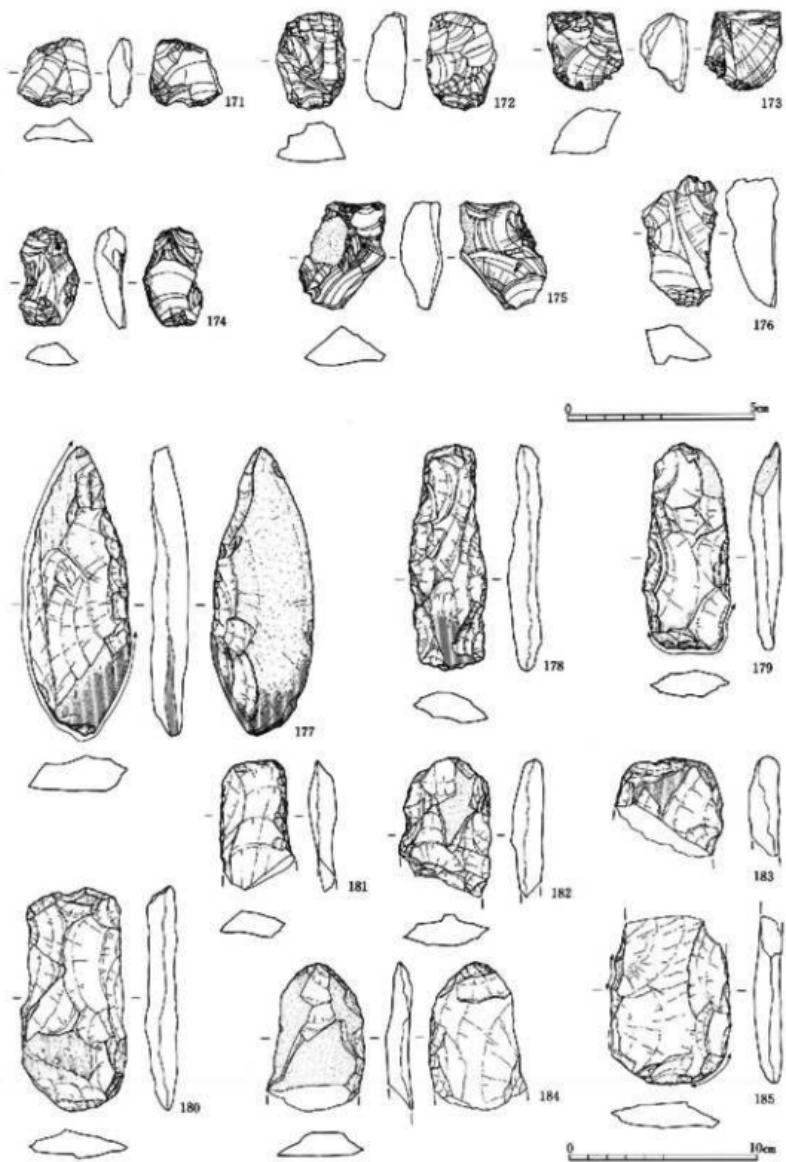
第65図 繩文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(7)



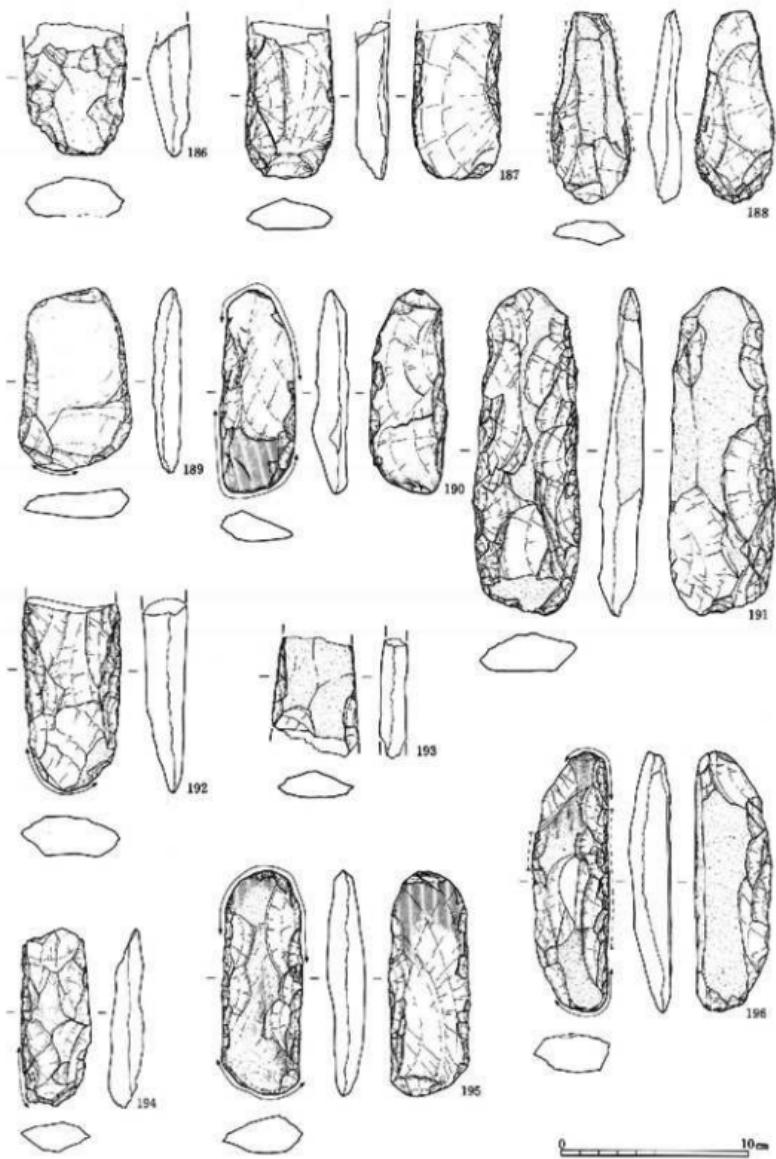
第66図 桧文時代中期後葉の土坑出土土器拓影(8)



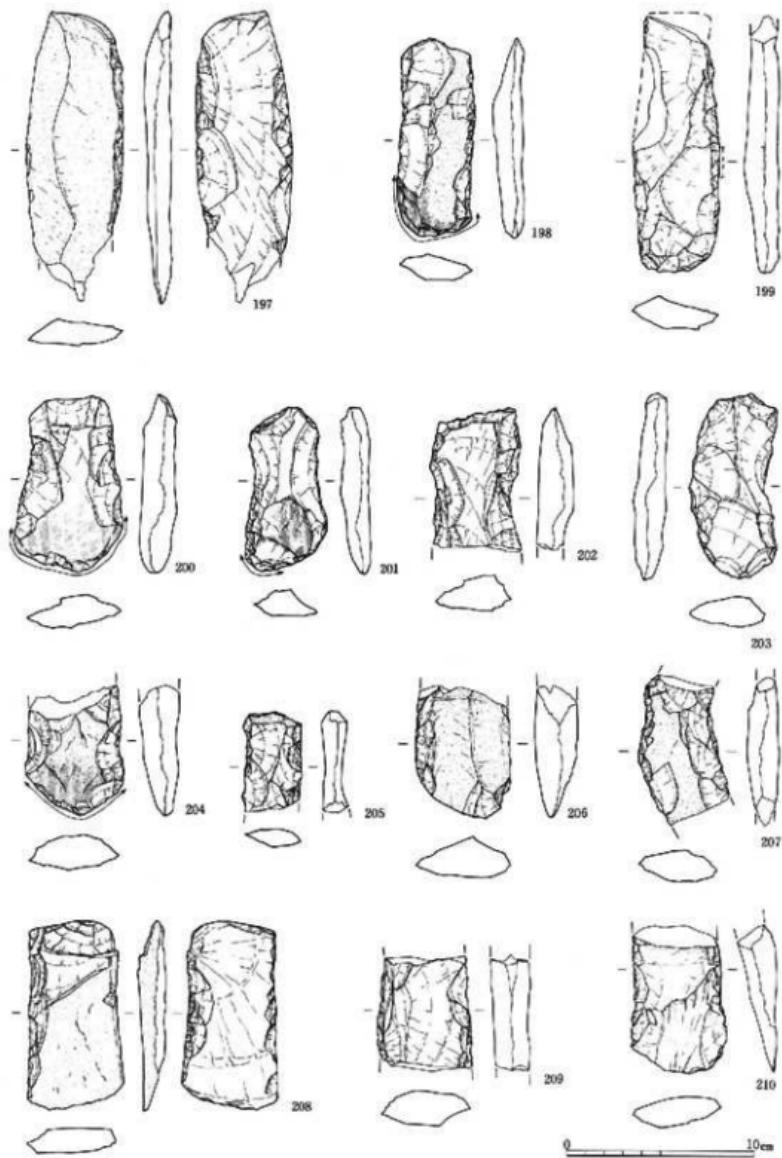
第67図 繩文時代中期後葉の土坑出土石器実測図(1)



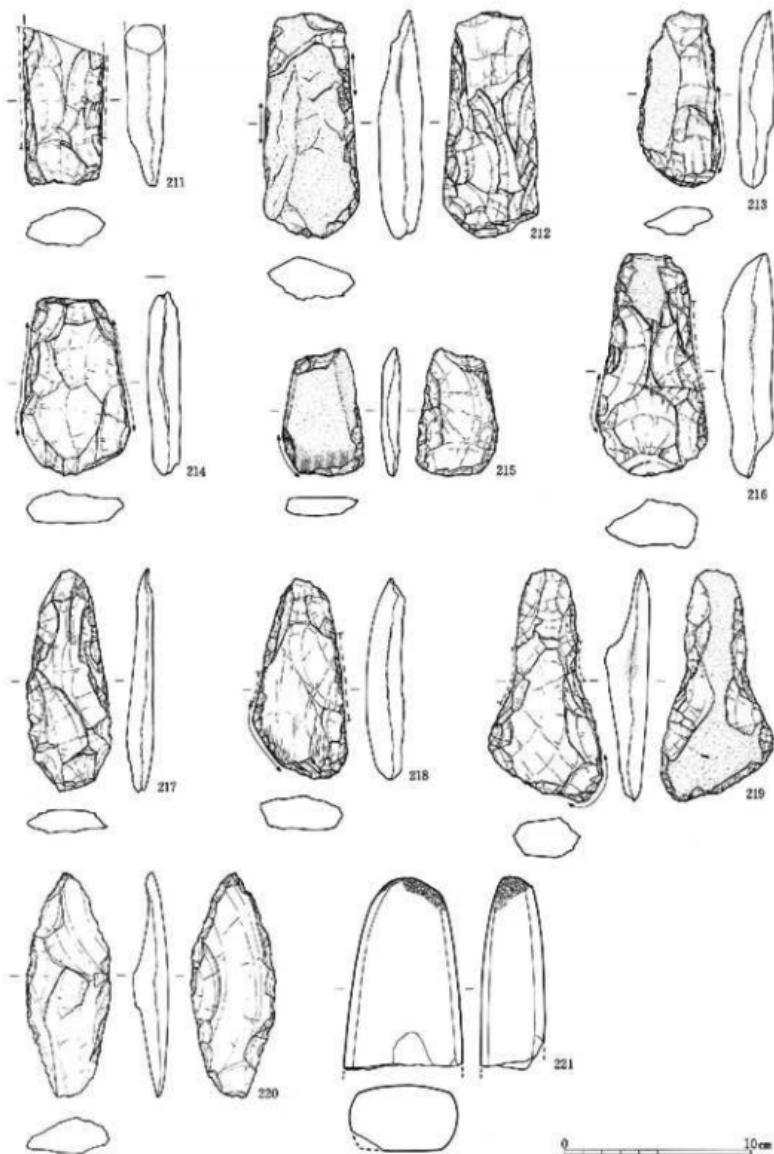
第68図 繩文時代中期後葉の土坑出土石器実測図(2)



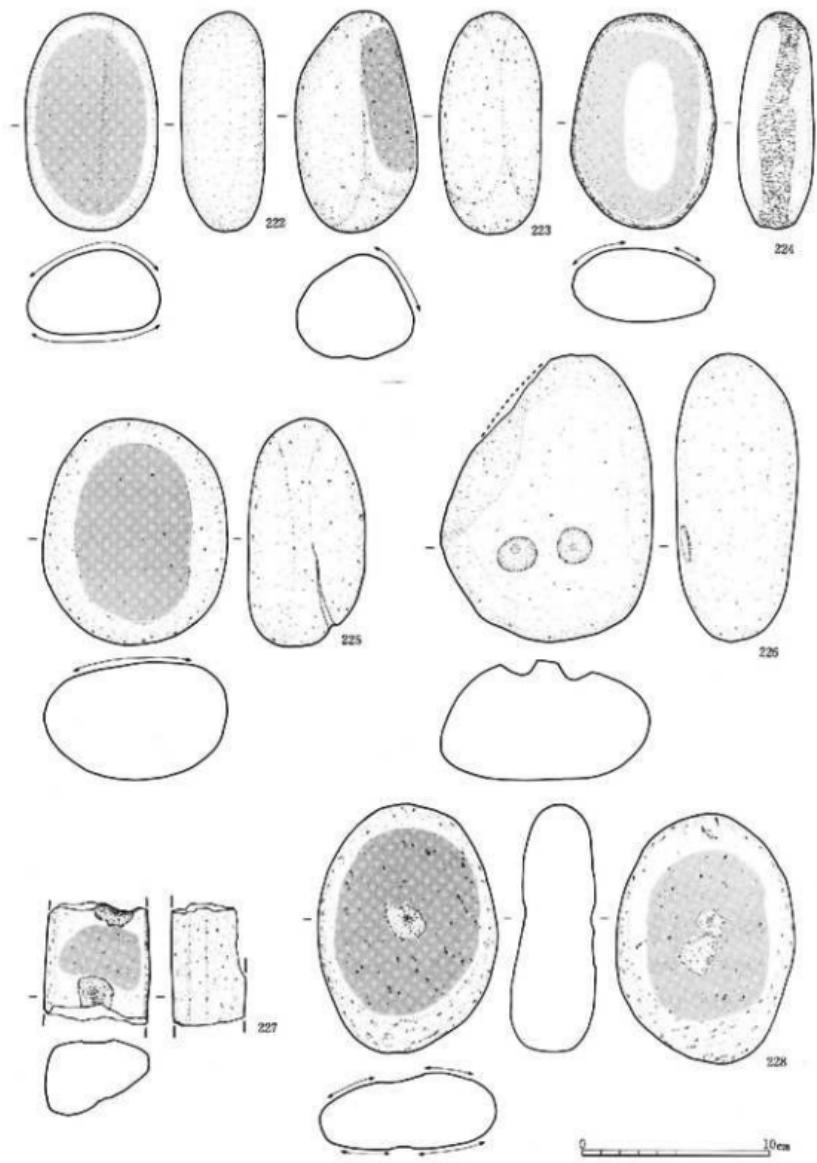
第69図 繩文時代中期後葉の上坑出土石器実測図(3)



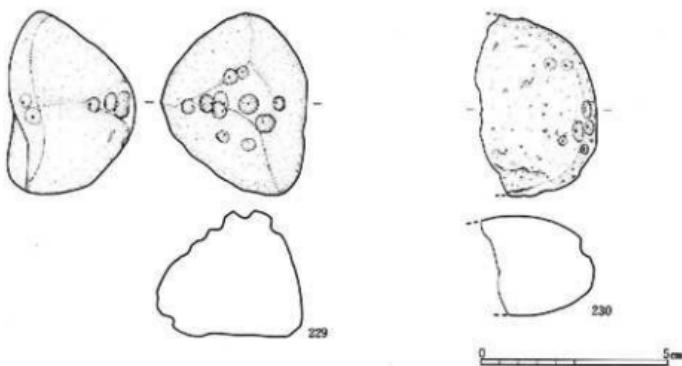
第70図 縄文時代中期後葉の土坑出土石器実測図(4)



第71図 繩文時代中期後葉の土坑出土石器実測図(5)



第72図 繩文時代中期後葉の土坑出土石器実測図(6)



第73図 繩文時代中期後葉の土坑出土石器実測図(7)

46号土坑 (117~122・173・174・210・225・228)

土器の内、117~119は口縁部破片。唐草文系上器の121を除き、他はすべて加曾利E式土器。文様・モチーフの特徴から、四日市第2段階に比定される一群である。他にピエス・エスキュー2、打製石斧1、磨製石斧1、磨石1、凹石1が出土している。

48号土坑 (123)

土器1点を図示できるにすぎない。器面にへら状工具による調整痕を残す無文の胸部破片である。

49号土坑 (124・125)

提示した土器2片は、ともに四日市第4段階に比定される加曾利E式土器。

50号土坑 (126~128・166・177)

土器は四日市第4段階に比定される加曾利E式土器。剥片石器2が伴出した。

51号土坑 (11~14・129~148・155・168・211~219)

土器を中心とまとった量の遺物が出土した。土器は、129~131が覆土上層よりわずかに出土した加曾利E式土器、他が覆土下層から坑底にかけて出土した唐草文系上器。覆土の上・下層の区別は必ずしも明確ではないが、編年的な基準の一指標となりうるものであろう。129~131は四日市第3段階に、11~14・132~148は同第2段階にそれぞれ比定される。他に石錐1、剥片石器1、打製石斧9を図示した。

52号土坑 (149・150)

149は四日市第3段階に、150は同第4段階に伴う加曾利E式土器。

53号土坑 (169・170・220)

四日市第4段階に伴う加曾利E式土器をわずかに認めたが、提示していない。作出した剥片石

器2、打製石斧1のみ図示した。

54号土坑 (15)

人形の深鉢形土器。垂下する隆帯により胴部を縦位に分割し、縄文帯と無文帯とを交互に配す。四日市第4段階に位置づけられる。

65号土坑 (105・106・164)

上器片2、剥片石器1を提示した。土器はともに縄文施文のみをとどめる副部破片。時期は特定しえない。

第3表 縄文時代中期後葉の土坑出土石器観察表

団-No.	出土位標	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質-
67-151	18号土坑	石 錐	圓基	2.2	2.3	0.7	2.1	完 形	黒曜石
-152	21号土坑	"	"	2.4	(1.6)	0.5	(1.2)	脚一部欠	"
-153	27号土坑	"	"	(1.7)	2.0	0.4	(1.0)	上1/3欠	"
-154	"	"	"	2.6	(2.0)	0.4	(1.7)	脚一方欠	"
-155	51号土坑	"	平基	2.3	1.8	0.4	1.3	完 形	"
-156	44号土坑	"	圓基	3.7	1.4	0.9	3.6	"	"
-157	"	石 鋸		2.8	2.7	1.0	4.7	"	"
158	15号土坑	制片石器	I a	3.9	2.8	1.6	11.0	"	"
-159	22号土坑	"	I b	2.0	1.4	0.6	1.7	"	"
160	36号土坑	"	II a	1.4	2.1	0.6	1.1	"	"
-161	39号土坑	"	"	2.0	1.9	0.6	1.1	"	"
-162	42号土坑	"	I b	2.4	1.4	0.6	1.5	"	"
-163	24号土坑	"	"	8.2	2.9	1.7	25.5	"	メノウ
-164	40号土坑	"	I b	2.9	1.7	0.6	2.4	"	黒曜石
165	44号土坑	"	II a	3.5	1.8	0.7	2.1	"	"
-166	50号土坑	"	I a	2.2	1.6	0.6	0.8	"	"
-167	"	"	II a	2.3	2.0	0.8	3.2	"	"
-168	51号土坑	"	"	1.9	2.0	0.5	1.6	"	"
-169	53号土坑	"	I a	2.7	1.7	0.6	1.6	"	"
170	"	"	II a	2.8	1.8	0.6	2.6	"	"
68-171	27号土坑	ビエス		1.9	2.0	0.6	1.8	"	"
172	"	"		2.6	1.9	1.1	5.0	"	"
-173	46号土坑	"		2.1	2.1	1.3	5.2	"	"
-174	"	"		2.6	1.6	0.8	2.9	"	"
-175	14号土坑	石 核	III	2.9	2.4	1.1	5.5	"	"
176	42号土坑	"	II	3.5	2.0	1.4	6.4	"	"
-177	1号土坑	打製石斧	IV	15.5	5.5	2.0	192	"	玄武岩
-178	"	"	I b	12.1	4.2	1.5	95	"	"
-179	"	"	"	11.0	4.8	1.7	79	"	"
-180	"	"	I a	12.0	5.5	1.8	141	"	"
-181	"	"	"	(7.1)	4.1	1.6	(46)	下1/3 欠	"
182	"	"	"	(7.5)	4.9	1.8	(58)	下1/2 欠	"
-183	"	"	"	(5.4)	5.8	1.6	(50)	上1/3 残	"

図-No	出土上標	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
68-184	1号土坑	打製石斧	?	(8.0)	5.2	1.3	(53)	下1/2欠	玄武岩
-185	"	"	"	(9.0)	6.5	1.7	(101)	上1/3欠	"
69-186	3号土坑	"	"	(7.1)	5.5	2.2	(97)	上1/2欠	輝石安山岩
187	6号土坑	"	I a	(8.4)	4.8	1.7	(84)	上1/3欠	玄武岩
-188	"	"	II b	10.3	4.2	1.7	81	完 形	流紋岩
189	8号土坑	"	I b	9.8	6.1	1.5	90	"	玄武岩
-190	"	"	I a	10.9	4.1	1.9	88	"	"
-191	25号土坑	"	I b	17.6	5.8	2.4	259	"	"
-192	13号土坑	"	I a	(10.3)	5.2	2.3	(160)	上1/3欠	"
-193	12号土坑	"	?	(6.4)	4.6	1.4	(52)	上下欠	"
-194	19号土坑	"	I a	9.5	3.7	1.8	61	完 形	"
-195	26号土坑	"	"	12.1	4.4	2.0	128	"	"
196	"	"	I a	14.0	4.0	2.3	150	"	"
70-197	27号土坑	"	"	(15.5)	5.1	1.5	(110)	刃1/4欠	"
198	"	"	"	10.5	4.0	1.6	69	完 形	"
-199	"	"	I b	(13.6)	4.7	1.9	(118)	上一部欠	"
200	"	"	"	9.4	5.9	2.0	111	完 形	"
-201	"	"	I c	8.7	4.4	1.5	72	"	"
202	"	"	"	(7.7)	4.9	2.0	(68)	刃1/3欠	"
-203	"	"	I d	9.9	5.7	1.8	80	完 形	"
204	30号土坑	"	?	(7.0)	5.2	2.1	(71)	上1/2欠	"
-205	36号土坑	"	"	(5.5)	3.3	1.4	(24)	刃1/3欠	"
206	42号土坑	"	"	(7.0)	5.0	2.3	(83)	上1/2欠	"
-207	"	"	I d	(8.0)	4.8	1.8	(65)	上下欠	"
-208	43号土坑	"	I a	10.2	5.1	1.5	88	完 形	"
-209	44号土坑	"	?	(6.1)	5.1	2.1	(87)	上下欠	"
-210	46号土坑	"	I a	(8.0)	5.1	2.1	(80)	上1/3欠	"
71-211	51号土坑	"	"	(8.5)	4.3	2.1	(102)	"	"
-212	"	"	I b	12.0	5.2	2.4	169	完 形	"
213	"	"	"	9.4	4.6	1.9	70	"	"
-214	"	"	"	9.6	5.9	1.7	113	"	"
-215	"	"	"	6.8	4.4	1.0	29	"	"
-216	"	"	II a	11.9	6.0	2.7	171	"	"
-217	"	"	II b	11.9	4.6	1.5	66	"	"
-218	"	"	"	10.8	5.2	2.1	115	"	"
-219	"	"	III b	12.5	6.1	2.3	120	"	"
-220	53号土坑	"	IV	12.0	4.6	2.0	77	"	"
-221	1号土坑	磨製石斧	定	(15.2)	6.4	3.5		刃1/3欠	砂岩
72-222	"	磨 石		11.8	7.2	4.5	560	完 形	輝石安山岩
-223	"	"		11.8	6.3	5.5	542	"	"
-224	3号土坑	"		11.5	7.8	4.0	518	"	輝綠岩
-225	46号土坑	"		12.2	9.9	6.3	1305	"	輝石安山岩
-226	1号土坑	圓 石		15.3	11.2	6.5	(1121)	上一部欠	"
-227	25号土坑	"		(6.5)	5.7	4.0	(192)	西端欠	"
-228	46号土坑	"		13.4	9.7	4.5	687	完 形	輝石安山岩
73-229	27号土坑	鱗の巣石		19.5	15.7	13.5	4002	"	輝石安山岩
-230	44号土坑	"		(19.5)	(13.2)	10.5	(2700)	半 欠	角閃石安山岩

③ 集石土坑

「集石土坑」という表現が適當であるかどうか疑問の残るところだが、その他のいずれの遺構にも該当しないことから、取り敢えずここではこのような表現で扱っておく。1基のみを検出した。

1号集石土坑（第74・75回）

こ・さ-4・5グリッド、傾斜角の変換地点に位置し、西側は調査区外に及んでいる。南北長は東で6.8m、西端で5.5mを測る。方形を基調とするようだが、南東隅が大きく張り出す。壁高は北壁で最大35cm、南壁で5cmを測るが、主に東壁がなだらかに立ち上がるところから、平面形と併せて不整形感をおぼえる。床は、概ねレベルを一定に保つものの小さな凹凸が目立った。また、住居址のような堅壁面は認められない。

覆土は2層に大別した。ともに黒褐色土であり、同時期の遺構が通有とするものと何ら変化は認められない。ロームブロックが混入しておらず、人为的に埋められた可能性は低い。

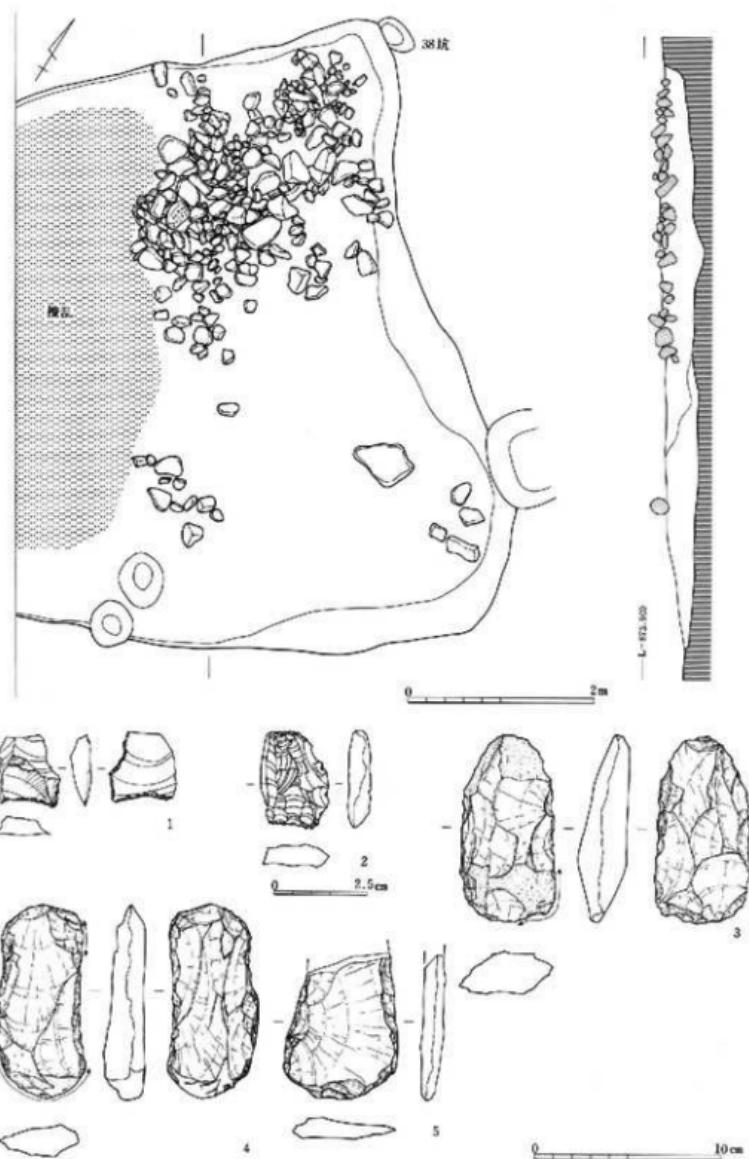
集石を除いて、特に施設は認められなかった。南壁側に小ピットが存在するが、本址に帰属するか否かを判断する材料はない。

集石は、床から20~30cm程度浮いたところに分布していた。北東側で隙間なく、南側では散在して認められるが、これらが検出面に存在することから、低位置の南側においては集石部分の削平を受けている可能性がある。礫に割り石ではなく、すべて自然礫を利用している。また、焼けた痕跡も皆無であった。

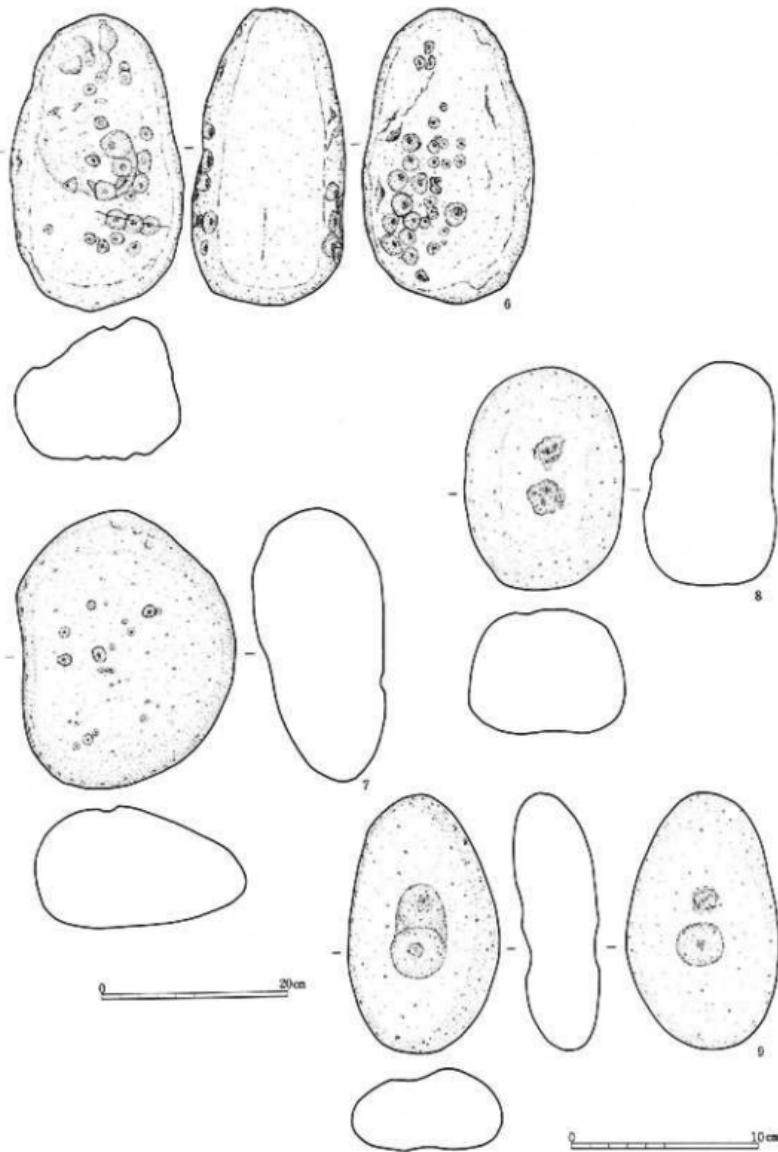
大形の遺構である割りに、含む遺物は微量である。特に上器の出土量が極めて少なく、四日市第4段階に比定される加曾利E式上器3片が出土したに過ぎない。したがって、実際には遺構の時期そのものも、けっして確定できるものではない。提示した石器は、集石中に混在していたものである。石器はすべてを図示した。

第4表 1号集石土坑出土石器観察表

図-No.	出土遺構	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
74-1	1号集石	剥片石器	I b	1.9	1.8	0.5	1.3	完 形	黒曜石
2	"	ビエス		2.6	1.8	0.6	3.0	"	"
-3	"	打製石斧	I b	10.0	5.0	2.7	140	"	玄武岩
-4	"	"	I c	10.5	5.0	2.2	121	"	"
-5	"	"	?	(8.0)	(6.2)	(1.2)	(65)	上1/2欠	"
75-6	"	峰の巣石		31.8	18.5	16.8	10807	完 形	輝石安山岩
-7	"	"		29.7	22.9	14.1	11812	"	角閃石安山岩
-8	"	圓石		11.9	8.5	7.1	930	"	輝石安山岩
-9	"	"		13.8	8.2	4.3	591	"	"



第74図 1号集石土坑実測図及び出土遺物実測図(1)



第75図 1号集石土坑出土遺物実測図(2)

④ 埋甕 (第76図)

住居に帰属しない埋甕を2基検出した。しかし、著しい削平を受けていることから、前記した如く本来は住居出入口部に埋設されたものかもしれない。

1号はおー6グリッド、2号はくー5グリッドに位置する。とともに底部を残したものと正位に埋設している。両者、底部付近のみが現存するに過ぎず、細かな時期比定は不可能である。

⑤ 造構外出土遺物

造構外より得られた遺物の総量は、今回の発掘調査区の大部分が後世の削平及び耕作による擾乱を被っていたこともあり、検出遺構数の割りにはけっして多い

とは言いかない。しかしながら、それを受けたことのなかった調査区北西寄りの部分からは、造構密度がそれほど高くないにもかかわらず、多量の土器・石器の出土をみており、本遺跡が造構数のみならず遺物量においても稀有な規模をもつものであったことがうかがわれる。

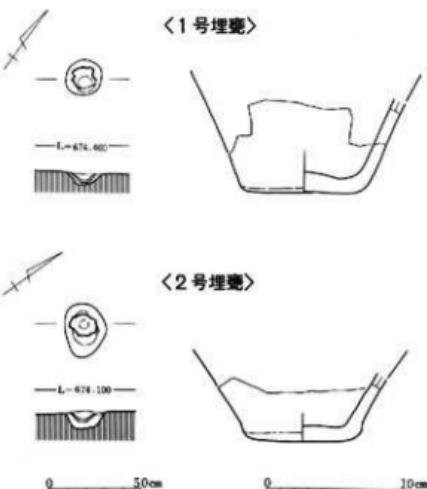
以下、造構外出土遺物について説明を行うが、ここでは土器のみを扱う。石器の大半が当該期に位置づくのは言うまでもないが、石器だけで時期比定できるわけもなく、したがって時期不明遺物として後述する。

ア 土器 (第77~87図)

上述したように、出土土器の総量はけっして多くはない。しかし、後に若干の整理を試みておいたように、時間的・空間的にみて興味ある内容を有するものである。ここでは、土器の系統性を分類の主眼におき、それぞれの系統の中で時間的な新・古を考えてみた。系統及び編年的な枠組みについては、後章を参照されたい。

(a) 加曾利E式及びその系統上の土器。縄文を地文とする他の一群も一括される。(1~159・200~204)

1~20は口縁部文様帶を有する一群ならびにその胸部破片と思われるもの。キャリバー状の形態をもち、隆帯による溝巻状・裕円状の区画文を口縁下に横帯させる。隆帯は幅広の凹線により縁取られ、区画内には縄文を充填している。区画文はすでに崩れ始めており、口縁部文様帶をもつものの中でも新しい段階に帰属しよう。胸部は2条ないし数条の沈線または隆起線を垂下させ、



第76図 縄文時代・中期後葉の埋甕実測図

その間を無文帯として残すことにより磨清繩文と同様な効果をみせる。

21~54は口縁部文様帯の崩壊がいっそう進み、波状沈線区画文を基本とする文様や沈線による逆「U」字状の懸垂文等に変化した段階のもの。口縁部文様は横に流れ、逆「U」字状に連結した胴部懸垂文と分離しあつ組み合わされる。上端が撇手状を呈す懸垂文を空間部に伴う例が多い。器形は口縁部が内湾し胴部がやや括れるものや、括れの弱いキャリバー形を呈するものなどがある。文様は総じて、幅広く浅い凹線の沈線により描かれる。

55~144・200~204は「V」字状や「W」字状文、さらに渦巻状のモチーフなどの組み合わせにより全体の文様が構成される一群。

55~74・200~201は沈線により文様が描かれるものであり、渦巻状のモチーフを有することが多い。口縁上部の内湾する71・72は同一個体と思われ、口縁下に列点状の刺突文を2条めぐらしている。73・74は沈線によるモチーフを伴わないものの諸特徴からここに収めた。繩文施文のあり方から、他に比べ後出的な土器と考えられる。200は脚台のつく小形の鉢形土器。201も脚台を有する小形上器であるが、口縁下のつくりやていねいな器面調整のあり方から有孔鉢付土器の退化したものと捉えられる。

75~81・202は口縁下に降起線ないし降線をもつもの。口縁上部の多くは逆「く」の字状に内傾する。201は大きく山形に競り出す把手であり、口縁下に71や72と同じく列点状の刺突文が施文される。

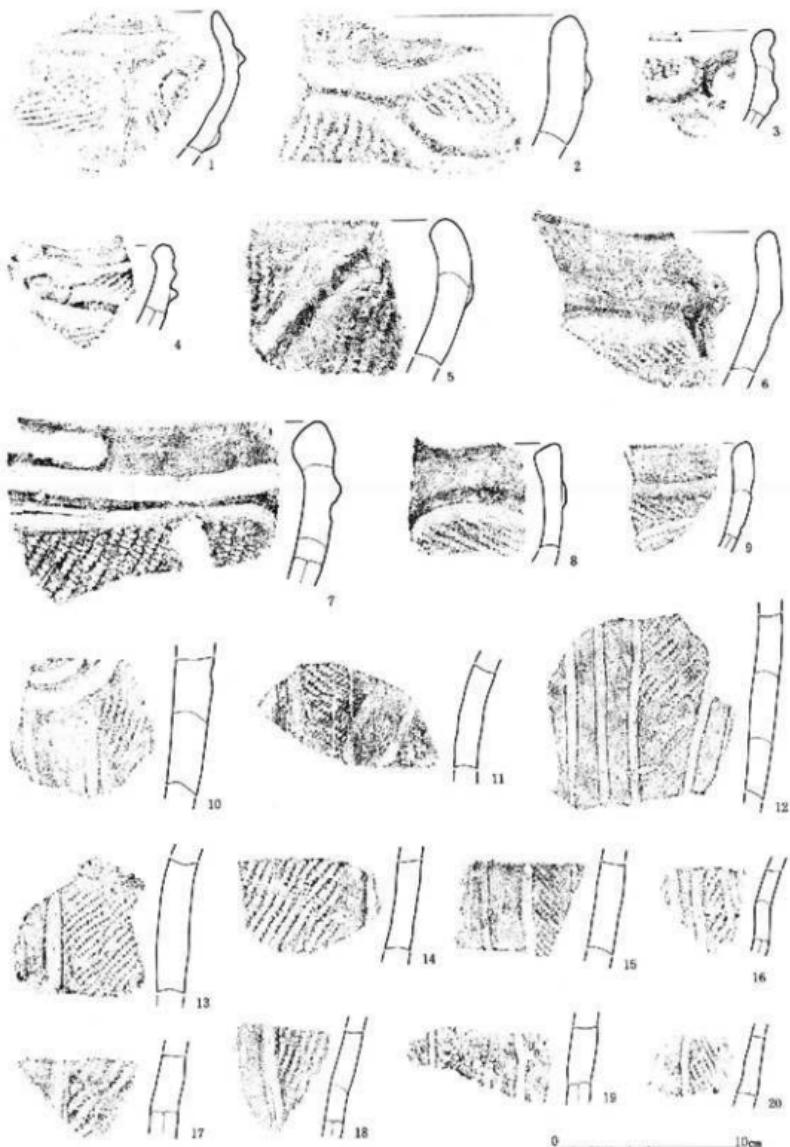
82~117は上記の胴部破片とみられるものを一括した。21~54などとは異なり、細い沈線を用いて文様を描き出す。ていねいな器面調整が行われ、器壁は概して平滑に整えられている。

118~144・203は隆帯や降起線により、「V」字状・渦巻状のモチーフを構成する。大形で厚手のつくりの上器が占める比率が高い。1条でモチーフを描くもの(118~132)と、2ないし3条を単位とする平行線をなすもの(133~144)とがある。203は頂部に撇手状突起を伴う波状口縁。隆帯の脇に刺突文が加えられる。

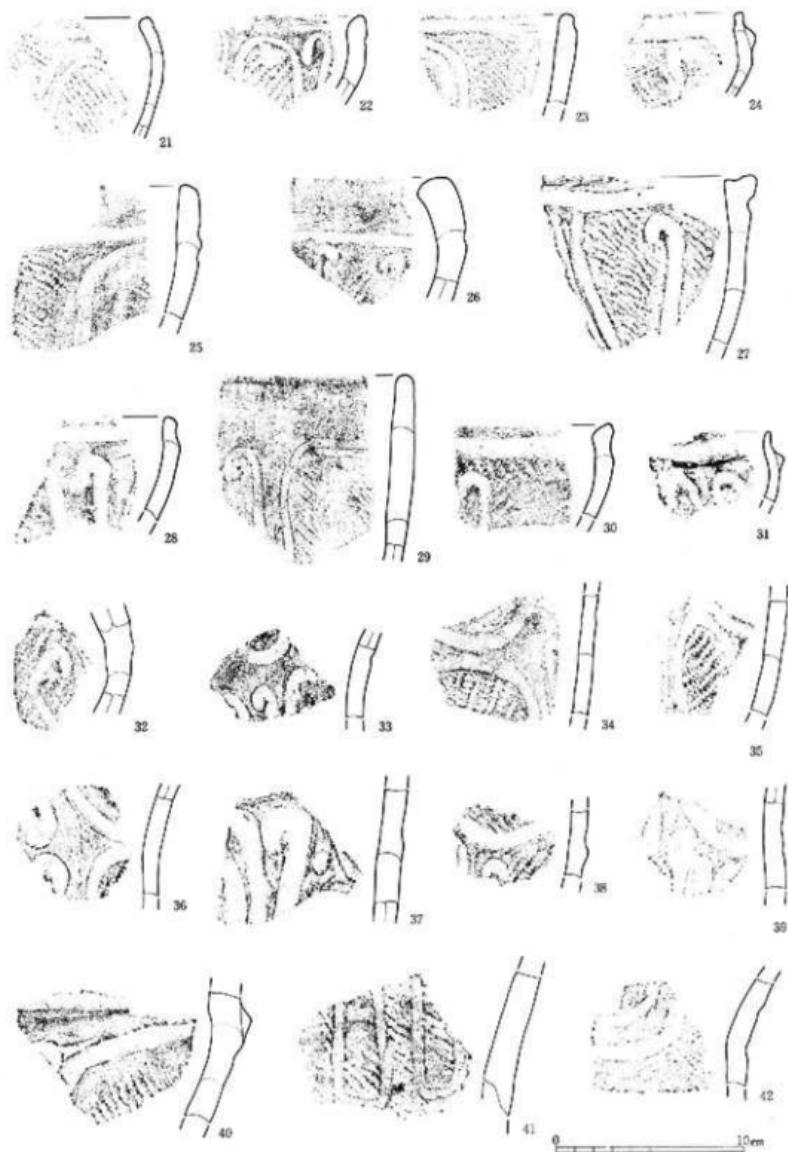
145は口縁下に凸帯状の隆帯をめぐらし、隆帯下に列点状の刺突文を伴う。146・147は圧痕及び棒状工具によるキザミを加えた降帶がみられるもので、146には隆起線による胴部文様が認められる。148~152は直線的に底部へ収束する器形の深鉢形上器である。概して大形の上器によって占められており、文様は胴部を垂下する沈線または隆帯により縦位に分割し、幅広な無文部と繩文部とを交互に繰り返す。153~159は条線を地文とする一群。153は149~152と同様な隆帯文をもつ。他は櫛歯状工具による縦位の条線文のみ施される。

(b) 唐草文系上器に比定されるもの (160~198・205)

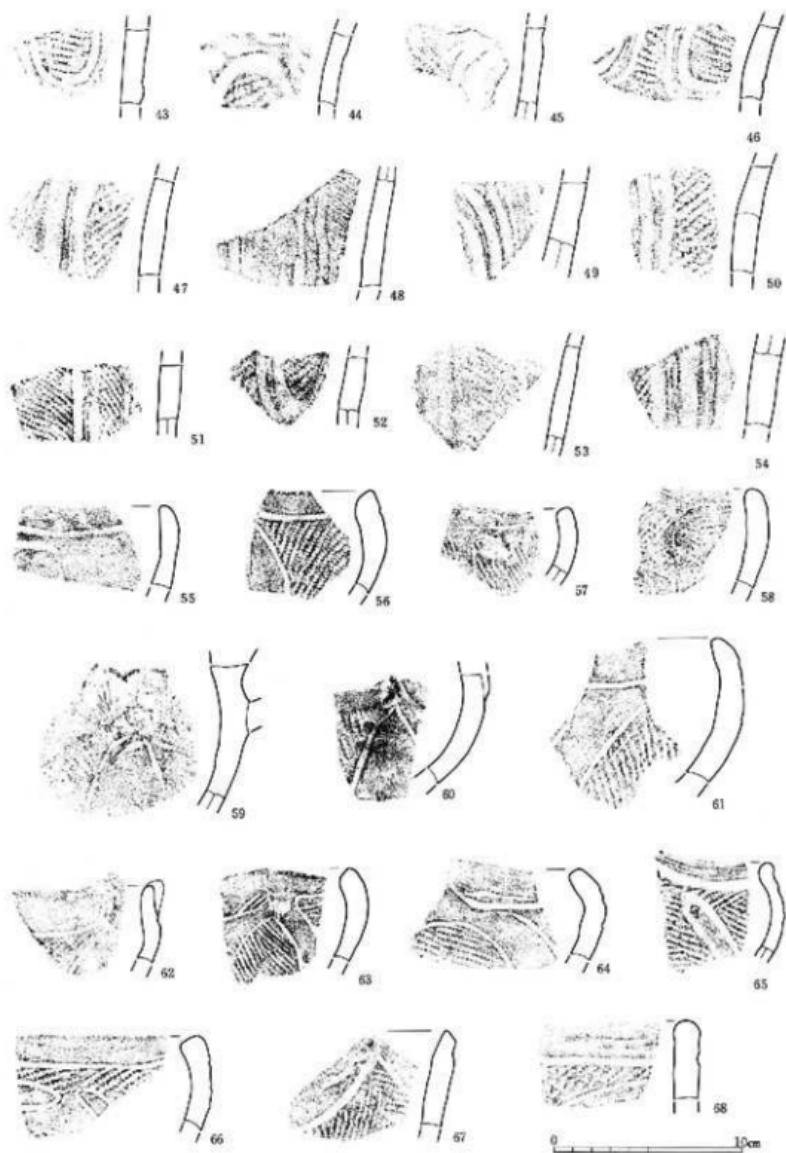
160~179は2本ないし3本を1組とする隆帯により、大柄な渦巻状・唐草文状のモチーフが描かれるもので、空間部を直線的または曲線的な短沈線で埋める。



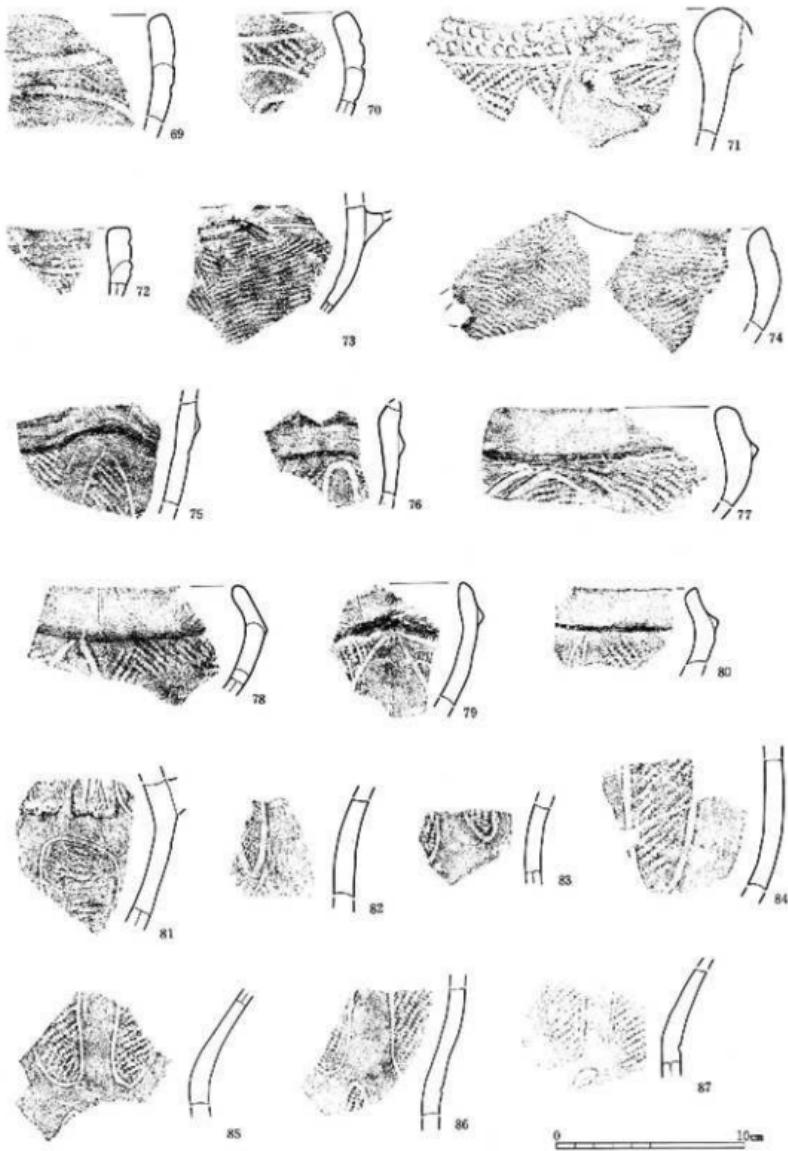
第77図 繩文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(1)



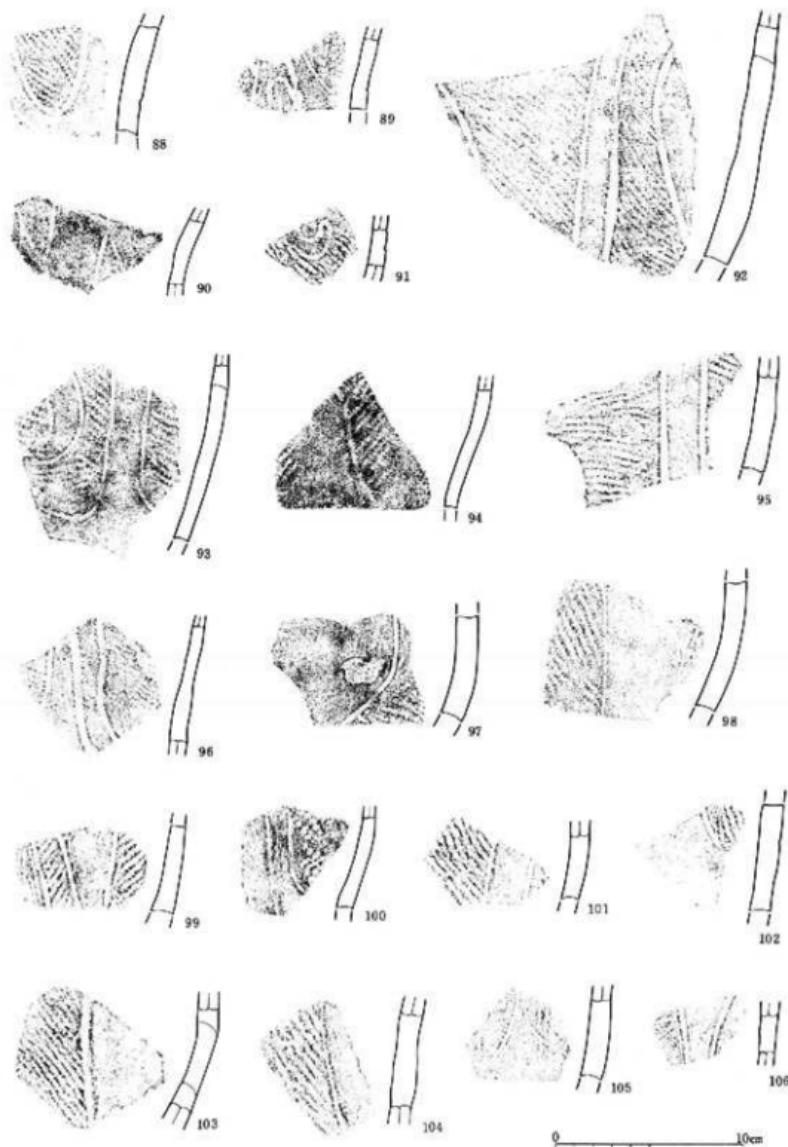
第78図 縄文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(2)



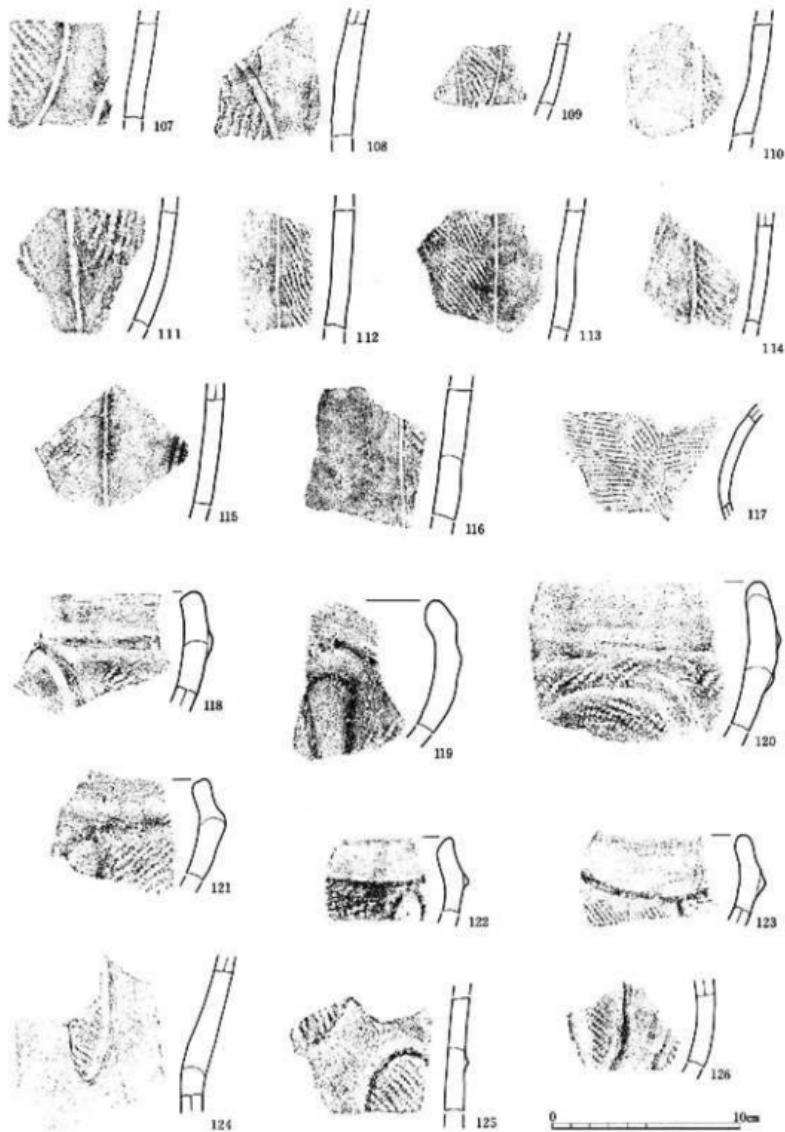
第79図 繩文時代中期後葉の遺構外出土上器拓影(3)



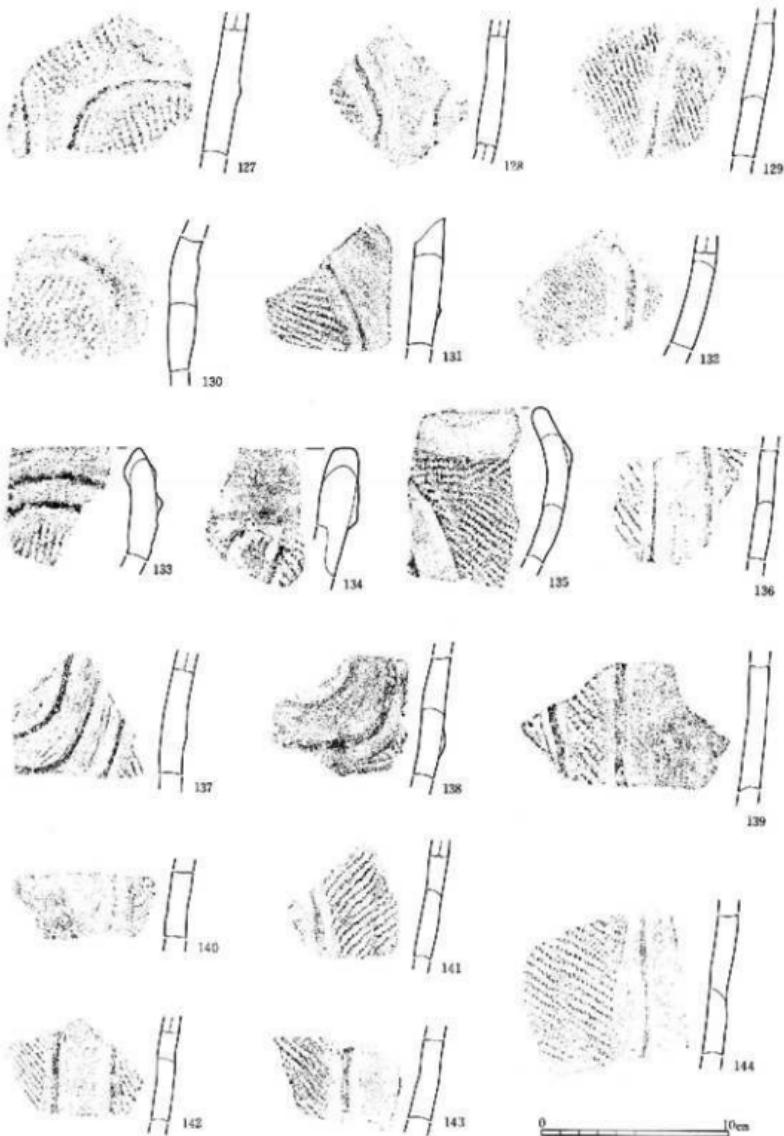
第80図 桶文時代中期後葉の遺構外出土器拓影(4)



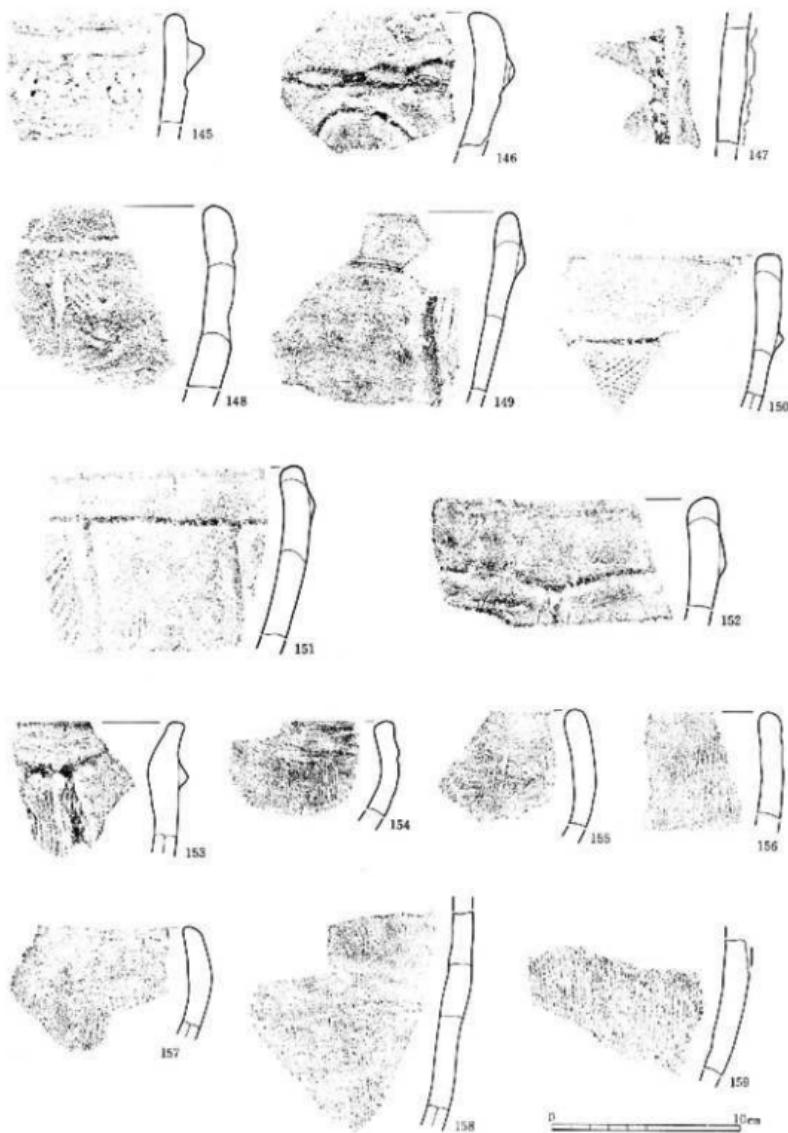
第81図 縄文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(5)



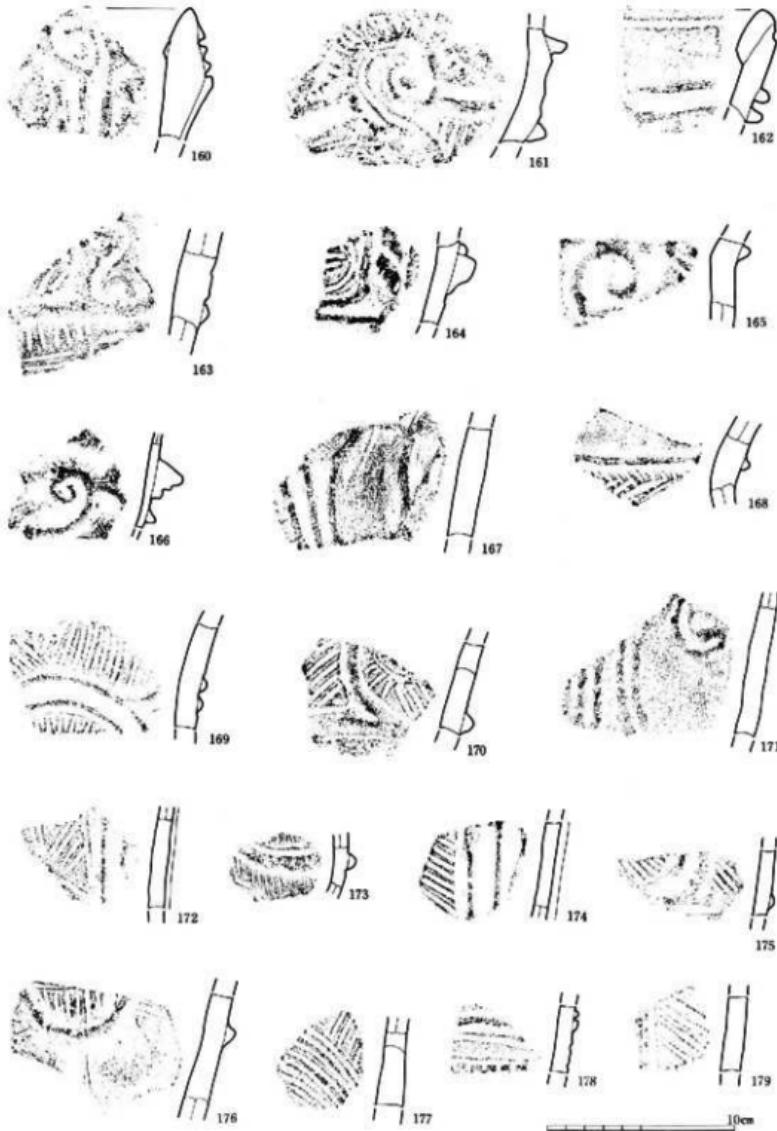
第82図 繩文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(6)



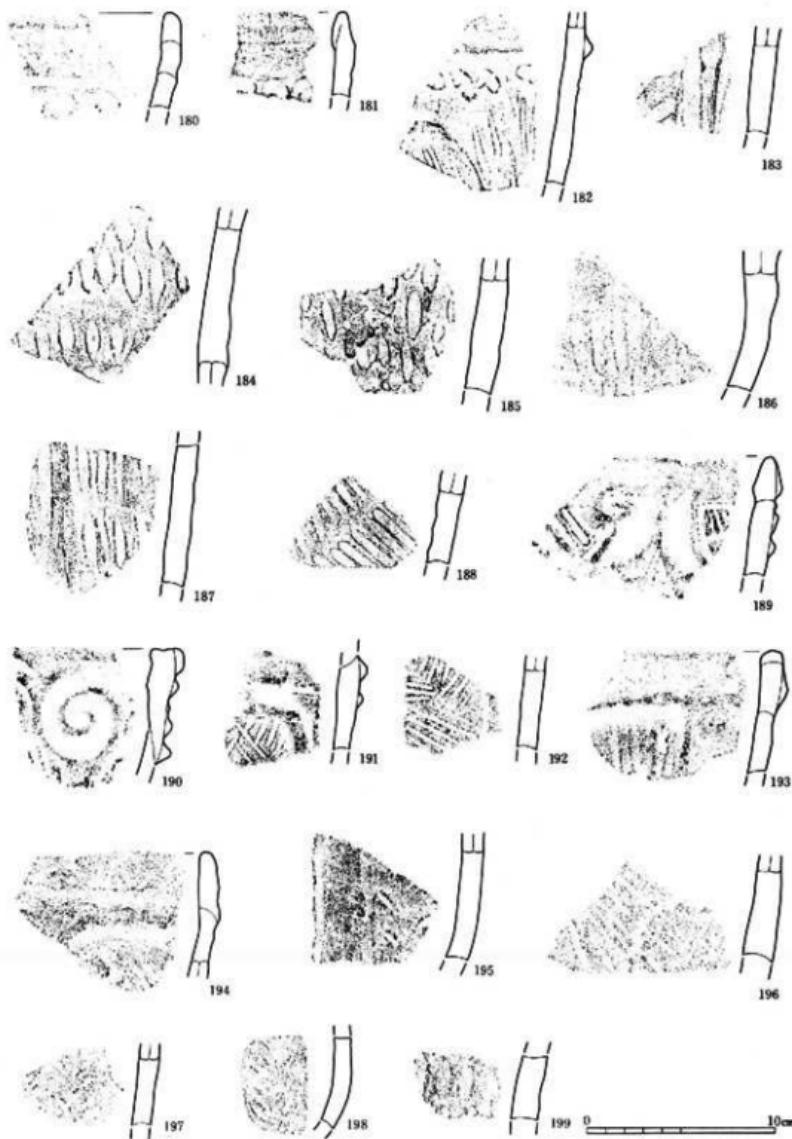
第83図 縄文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(7)



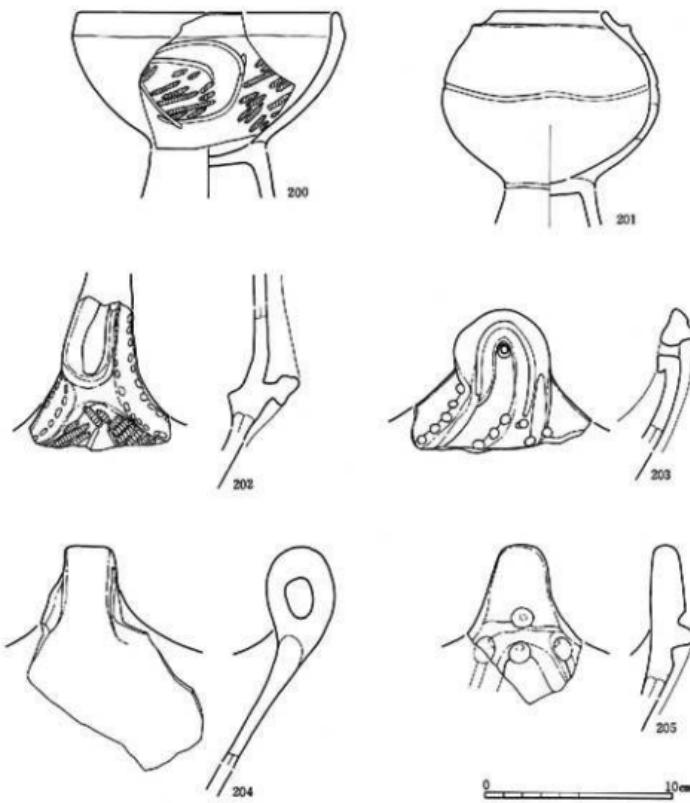
第84図 桶文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(8)



第85図 梶文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影(9)



第86図 梶文時代中期後葉の遺構外出土土器拓影⑩



第87図 縄文時代中期後樂の遣沟外出土土器実測図

160は口縁下に付された渦巻文から縱位懸垂文が垂下する。161・163は「S」字状の隆帶文を伴い、162を含めて横帶する口縁部文様帶を有する。162は口縁下に幅広の無文帶を残す。178には交互刺突文帶が認められる。

180～188は前者に後出するもの。口縁部文様帶の喪失・胸部文様の形態化が著しい。180・181は沈線により、182は隆線によりそれぞれ文様が構成されるが、共通して「C」字状を呈す刺突風の短沈線文を沈線下や隆線下にめぐらす。胸部の地文は浅い凹線様の縱位短沈線を雨垂れ状に施文するものとなる。205は「舌」状にせり上がる突起を有する口縁部破片。